

公益財団法人愛恵福祉支援財団 社会福祉育成活動助成事業  
静岡福祉文化を考える会 2022年度調査研究事業  
～高齢者とともに，地域共生社会を拓く～  
**ホッとする，安心した地域づくり**  
**その意識と実態調査報告書**



**静岡福祉文化を考える会**

**公益財団法人 愛恵福祉支援財団 社会福祉育成活動助成事業  
静岡福祉文化を考える会 2022 年度調査研究事業  
～高齢者とともに、地域共生社会を拓く～  
ホッとする、安心した地域づくりその意識と実態調査報告書**

**【目 次】**

➤	はじめに 27 年間の福祉文化実践のプロセスから、ホッとするこれからの地域づくりを検証	…	p.2
➤	<b>第 1 章 調査の概要</b>	…	p.3
	1. 調査実施意図		
	2. 調査方法と調査日		
	3. 調査票の形式及び調査項目		
	4. 調査対象と調査票の配布と回収		
	5. 調査実施機関		
	6. 回収状況		
	7. 調査協働		
➤	<b>第 2 章 サンプル構成／基本属性</b>	…	p.9
	1. 性別		
	2. 年齢別		
	3. 職業別		
	4. 居住形態別		
	5. 居住年数別		
	6. 居住地域別		
	7. 世帯状況別		
	■ クロス集計表		
➤	<b>第 3 章 調査結果</b>	…	p.13
	1. 高齢者の生活状況（高齢者自身）に関する項目		
	2. 高齢者の家庭・家族に関する項目		
	3. 高齢者の地域との関わりに関する項目（意識）		
	4. 高齢者の地域との関わりに関する項目（実態）		
	5. 高齢者の地域参加の動向に関する項目		
	6. 高齢者の地域環境に関する項目		
	7. 「ホッとする、安心した地域づくり」に関する意見・提言（自由回答）		
	8. 調査協力者から、「調査票」とともに、寄せられた意見		
➤	<b>第 4 章 調査のまとめ</b>	…	p.47
➤	<b>第 5 章 資料編</b>	…	p.54
	1. 2022 年度活動経過記録		
	2. 静岡福祉文化を考える会 27 年間の歩み		
	3. 静岡福祉文化を考える会 2022 年度活動計画		
	4. 地域共生社会調査研究部会設置要綱		
	5. 調査実施要項		
	6. 調査票		
	7. 「Our Life」（本会機関紙）		
	8. 静岡福祉文化を考える会要覧		
	9. 静岡福祉文化を考える会規約		
☆	これからの福祉を考えるネットサイト		

## はじめに

### 27年間の福祉文化実践のプロセスから、ホッとすることからの地域づくりを検証

「静岡福祉文化を考える会」は、阪神淡路大震災発生1年後、「災害と福祉文化」を追求する「地方発 福祉文化の創造」に取り組む市民活動団体として結成（1996年9月）して、ここに27年間を総括する時期を迎えました。結成当初から、「専門性と市民性の融合」、「公開型地域総合型学習の企画と実践」、「課題解決に向けたプロセス重視」の「3つの活動基調」を掲げてきました。

さらに、次の「3つの柱立て」をもとに、具体的な福祉文化実践活動を継承しています。

#### ➤ 第1の柱立て「調査研究事業」

県民の協力により、一貫して、その時代の地域社会問題をテーマに調査研究活動に取り組み、その結果をその都度公表するとともに、県民と共に地域総合型学習をし、課題解決の議論を深める。

#### ➤ 第2の柱立て「啓発学習事業」

「静岡発（地方発）福祉文化の創造」をめざして、県内各地の実践活動に学び、「課題提起」をして「地域総合型学習」の取り組みをする。

#### ➤ 第3の柱立て「実践地区活動事業」

広く県内各地の実践事例を共有し合い、「地域診断」のもとに、確かな地域性を把握し、さまざまな実践活動を展開し、「協働」による福祉問題解決のプロセスの重要性を確認する。

この「3つの柱立て」の中でも、「調査研究事業」は、本会にとって重要な位置づけをしています。本会がこの27年間、調査研究事業で追求してきた「地域コミュニティ」は年々、地域社会全体が個人志向化・希薄化と共に、福祉コミュニティ組織運営の不透明さが浮き彫りになっています。

今こそ、「当たり前前の方が当たり前前のできる社会」、「助け合い、助けられる地域社会」を再構築するために、本会のこれまでのプロセス重視から、2022年度の本会活動テーマを「ホッとすることからの豊かな地域づくりを拓く“共創社会”実現を探る」を掲げました。

厳しいコロナ禍こそ、福祉文化活動をどのように維持できるか、「見える化」、「わかる化」の知恵を出し合い、つながる・支え合う地域社会づくりをこれまで検証しています。

特に、2008年度～2014年度の7年間、静岡県委託事業「一人でも安心して暮せる地域づくり事業」に取り組み、改めて「ホッとすることからの私のご近所福祉を創る」こそ、福祉文化そのものと置き換え、市民主体の福祉文化実践活動を展開しています。

2022年度の第27回調査研究事業は、公益財団法人愛恵福祉支援財団「社会福祉育成活動助成事業」により「ホッとすることからの、安心した地域づくりその意識と実態調査」に取り組むことといたしました。1997年度に「共働きに関する調査」に取り組み、その後、「地域とは何か」、「家族とは何か」、「父親」、「ボランティア活動」、「就労」、「青少年の生きがい」、「地域とは何か(2)」、「子どもと社会環境」、「地域活動と団塊の世代の役割」、「長寿者の生きがい」、「日常生活と福祉情報」、「長寿者に関する県民意識と実態」、「生活圏域における支え合い」、「地域と私の居場所」、「家族とは何か」、「長寿者とつながるホッとすることからの近所」、「豊かに暮らせる地域づくり」、「若者の地域参加」、「ご近所福祉」、「居場所とは何か」、「子どもを育む地域づくり」、「ホッとすることからの地域ですか? 256名の子どもたちに聞きました調査」、「ご近所福祉(2)」、「福祉ってなに? 461名の子どもたちに聞きました調査」から今回のテーマにつながっています。

「第27回調査研究事業」は、県内各方面からのご理解と多大なご支援をいただき、794名からの尊いご意見をいただき、ここに考察することができました。心より感謝申し上げますとともに、この「調査報告書」が、これからの地域づくりの一助になれば幸いです。

2023（令和5）年1月20日

静岡福祉文化を考える会 代表 平田 厚

# 第1章 調査の概要

## 1. 調査実施意図

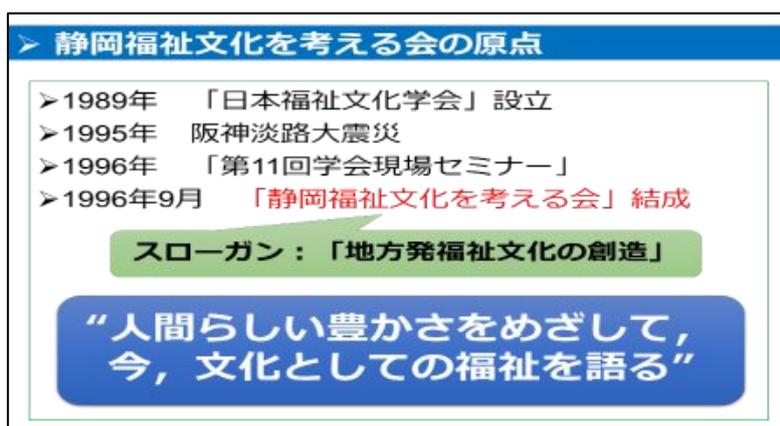
「静岡福祉文化を考える会」の誕生は、「阪神淡路大震災」から1年後、故一番ヶ瀬康子先生（日本福祉文化学会初代会長）から、「静岡で福祉文化現場セミナーをやってほしい」との要請をいただいたのがきっかけである。

静岡県域の仲間約50名がこの「現場セミナー」開催実施にむけて「福祉を文化にする」、「静岡発福祉文化の創造」をめざして準備に取り掛かった。そして、浜松市南区「浜松こども園」荒岡正憲氏の全面的な支援のもと、「静岡発みんなで語ろう福祉文化を二十一世紀の礎に…人間らしい豊かさをめざして、いま文化としての福祉を語る」をセミナーテーマに「第11回日本福祉文化学会現場セミナー」を、全国各地から400名もの参加者を迎えて開催することができた。

当時の学会の論点の一つに「現場に学ぶことから、福祉文化が生まれる」と、全国各地で、「現場セミナー」の実現に努力されていた。

その後、セミナー開催実現に関わった有志40名が、一過性のイベントに終わらせることなく、静岡県に根付く「福祉文化実践の場」をつくらうと、「現場セミナー」の総括とともに、新たな活動の場づくりについて議論を深め、1996年9月に「静岡福祉文化を考える会」を立ち上げた。

その後、本会の結成とともに、本会が主体となり「第18回福祉文化現場セミナー：宮城まり子さんと福祉文化に学ぶ」（2002年1月16日@掛川市ねむの木学園350名参加）をはじめ、「第13回日本福祉文化学会全国大会静岡大会」を2002年11月30日・12月1日の2日間、裾野市、裾野市社会福祉協議会、社会福祉法人富岳会の全面的協力のもと、人々が暮らす生活圏域の会場を交渉し、裾野市の全面的支援のもと、「裾野市市民文化センター」において、全国各地から650名余の参加者が「富士山麓 いのちとくらしによりそう福祉文化の創造と推進」をテーマに熱く議論し、今日まで「静岡県福祉文化研究セミナー」として、静岡県から「福祉文化の火」を消すことなく県内外に発信しようと、微力ながら継続して、「第21回静岡県福祉文化研究セミナー」につなげている。

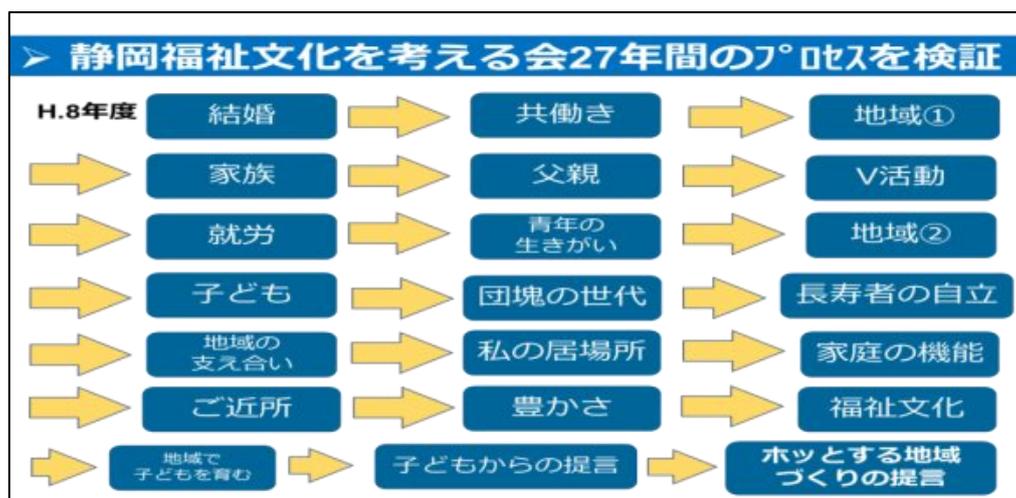


1996年9月結成以来、27年間「静岡発 福祉文化の創造」を目指した実践活動の「啓発学習事業」、「実践地区活動事業」、「調査研究事業」の3つの柱立てで活動を展開してきたが、なかでも、継続的に重要な活動の柱立ての一つとして、その時代の地域活動を取り巻く様々な福祉課題を「調査テーマ」にした「調査研究活動」に取り組み、その分析結果を県内各方面での研修会や本会の公開型研修会などで公表し、世代を超えた「地域総合型学習」を通じて問題提起をし、県民一人ひとりの意識改革に努めてきた。

これまでの調査研究活動を振り返ると、

- ▶ 1997年度 1. 「共働きに関する調査」
- ▶ 1998年度 2. 「私たちにとって、地域とは何かーその1ー意識と実態調査」

- 1999年度 3. 「私たちにとって、家族とは何か調査」
  - 2000年度 4. 「父親に関する調査」
  - 2001年度 5. 「ボランティア活動実践者意識調査」
  - 2002年度 6. 「大人を対象とした生きがいと就労に関する意識調査」
  - 2003年度 7. 「青少年の生きがいに関する調査」
  - 2004年度 8. 「地域とは何かーその2ー意識と実態調査」
  - 2005年度 9. 「子どもと社会環境に関する調査」(継続調査)
  - 2006年度 10. 「子どもと社会環境に関する調査」(総括)
  - 2007年度 11. 「地域活動と団塊の世代の役割に関する意識調査」
  - 2008年度 12. 「長寿者の生きがい、その意識と実態に関する調査」(静岡県共同募金会助成事業)
  - 13. 「日常生活と福祉情報に関する意識調査」(静岡県委託事業)
  - 2009年度 14. 「長寿社会に関する県民意識と実態調査」(静岡県委託事業)
  - 2010年度 15. 「いまこそ地域社会に福祉文化を拓く 生活圏域における支え合いとは何か本音に迫る調査」(静岡県委託事業)
  - 2011年度 16. 「地域と私の居場所その意識と実態調査」(静岡県委託事業)
  - 2012年度 17. 「家族ってなにその意識と実態調査」(静岡県委託事業)
  - 2013年度 18. 「長寿者とつながるホッとすること近所づくりその意識と実態調査」(静岡県委託事業)
  - 2014年度 19. 「豊かに暮らせる地域づくりその意識と実態調査」(静岡県委託事業)
  - 2015年度 20. 「若者の地域参加その意識と実態調査」
  - 2016年度 21. 「ご近所福祉その意識と実態調査」
  - 2017年度 22. 「居場所ってなにその意識と実態調査」
  - 2018年度 23. 「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査」(1)
  - 2019年度 24. 「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査」(2)  
「256名の子どもたちに聞きました。ホッとすること近所ですか?」  
(静岡県社協ふれあい基金助成事業・考察提言)
  - 2020年度 25. 「ご近所福祉その意識と実態調査」(25周年記念調査研究事業)
  - 2021年度 26. 「福祉ってなに? 461名の子どもたちに聞きました調査」  
(公益財団法人さわやか福祉財団、公益財団法人あしたの日本を創る協会助成事業)
- と、「26のテーマ」の調査研究活動に取り組んできた。

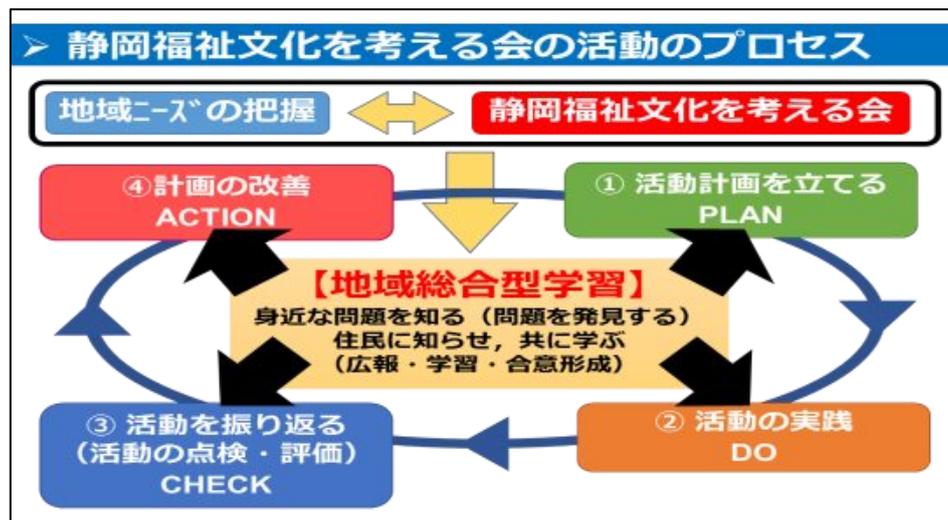


特に、2008年度～2014年度の7年間は、静岡県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」に取り組み、長寿者の孤立防止について、「長寿者の自立」、「長寿者を取り巻く地域社会」、「長寿者への福祉情報の在り方」、「生活圏域での支え合い」、「住民一人ひとりの居場所」、「家族・

家庭機能を問う」、「ご近所の支え合い」、「豊かに暮らせる地域づくり」等のキーワードをもとに、本会の活動の原点を踏まえて、あらゆる領域から福祉文化の視点から検証してきた。

通算 27 回目となる「2022 年度調査研究事業」は、これまでの調査の考察結果から、地域住民相互のつながりやささえあいが弱くなり、地域コミュニティへの関わりについて、その意識と実態が希薄化の傾向にあることが浮き彫りとなり、さらに長引く厳しいコロナ禍で、尊い地域コミュニティの結びつきの弱さによる「共助」、「自助」が衰退傾向にある地域環境の中で、それぞれの地域で暮らす高齢者の意識と実態の現状を把握し、コロナ明けに期待する地域（ご近所）のささえあいの仕組みづくりを検証することとした。

検証作業にあたっては、本会活動と協働で取り組んでいる「焼津福祉文化共創研究会」（2019 年度に結成し、焼津市内中学校区約 5,000 世帯の地域における地域課題改善・解決に向けた活動を展開している志縁団体）とともに、小地域（中学校区単位）の高齢者の意識と実態と県域における現状を地域性ととともに、地域社会が果たすべき課題を提言することを目的に実施した。



## 2. 調査方法と調査日

### (1) 調査票・項目の検討

4 月及び 5 月の本会委員会において、2022 年度の活動基本計画を確認するとともに、「焼津福祉文化共創研究会」との協働の取り組みをもとに、4 月～6 月まで「定例研究会」でも協議を重ね、「地域共生社会調査研究部会」を設置し、会員以外にも、自由に意見を出し合う場を提唱した。

本会ではその後、5 月・7 月の委員会をはじめ、「公開型研修会」において、研修会参加者からも広く意見を求め、「調査実施要項」の趣旨に基づき、「調査票」の作成に努力した。

そして、「第 1 回地域共生社会調査研究部会」（7 月 30 日開催）及び「第 2 回地域共生社会調査研究部会」（8 月 6 日開催）において、集中的に協議をし、「調査票」完成につなげた。

### (2) 調査票の完成

「地域共生社会調査研究部会」において、調査検討協議を積み重ね、「予備調査」を実施し、8 月 25 日に「調査票」を仕上げた。

### (3) 調査依頼（実施期間）

調査時点を、9 月 1 日とし、調査実施期間は、できる限り円滑な活動ができるように、8 月 25 日～10 月 30 日の期間とした。

#### (4) 回収・入力（単純集計）期間

「第4回地域共生社会調査研究部会」（10月1日開催）において、調査データ入力に関する協議を開始し、9月1日～10月30日の間、会員4名により、順次回収した調査票のデータ入力作業に取り組むとともに、入力作業における問題点を出し合いながら作業を進めた。回収・入力作業状況を見ながら、「単純集計」、「クロス集計」作業に取り組み、「第6回地域共生社会調査研究部会」（12月3日開催）において、回収データ794枚の集計結果を確認した。

#### (5) 分析・考察

厳しいコロナ禍で、十分な協議の時間の確保が困難な中、LINE等による連絡網を維持し、活動を継続させた。そして、「第7回地域共生社会調査研究部会」（12月17日開催）において、報告する方向性を確認し、全体調整作業を継続し、「第8回地域共生社会調査研究部会」（1月7日開催）において意見を集約し、「報告書」として取りまとめた。

#### (6) 公表・報告

データ入力作業期間中、「中間報告」の機会を2回設け、本会関連各種会議や、関係機関・団体等の各会議で経過を報告し、かつ「Our Life」（本会広報誌）で経過・概要を紹介した。

正式公表を「第3回公開型研修会～ホッとする豊かな地域づくりを描く～」（2023年2月25日開催）をもって最終的公表とした。

### 3. 調査票の形式及び調査項目

#### (1) 調査票の形式

A3版、両面2ページ、33項目の設問

#### (2) 調査項目

No.	調査項目	設問 No.	設問数
1	基本属性	設問 01. (問 01.～問 07.)	7
2	生活状況（高齢者自身）に関すること	設問 02.～設問 06.	5
3	家庭・家族に関すること	設問 07.～設問 12.	6
4	地域との関わりに関すること（意識）	設問 13.～設問 17.	5
5	地域との関わりに関すること（実態）	設問 18.～設問 20.	3
6	地域参加の動向	設問 21.～設問 25.	5
7	地域環境に関すること	設問 26.～設問 32.	7
8	提言（自由意見）	設問 33.	1

### 4. 調査対象と調査票の配布

#### (1) 対象

静岡県内の65歳以上の方々を対象に、年代・地域・領域等を考慮して、300名程度の回収を目標に実施し、結果的に794名からの尊い意見をいただくことができた。

#### (2) 配布方法

今回の調査は、郵送方法とした。一部、調査期間中に開催した各種研修会において受講者に協力を呼び掛けた。

## 5. 調査実施機関 静岡福祉文化を考える会

協働団体である「焼津福祉文化共創研究会」との密接な連携とともに、新たに「地域共生社会調査研究部会」を設置し、単に調査実施の議論だけではなく、本事業全体の活動テーマに基づく、きめの細かい議論を積み重ねるとともに、関係団体等との日常的連携をもとに、進行管理体制を明らかにして取り組んだ。

回	開催日時・会場	研究協議内容（概要）
1	07月30日（土）18:30 @北川原公会堂	研究会の位置づけと方向性，地域の現状，課題整理
2	08月06日（土）18:30 @北川原公会堂	調査実施計画協議（調査実施要項・調査個票・調査票配布）
3	09月03日（土）18:30 @北川原公会堂	調査実施上の課題反響，調査集計作業
4	10月01日（土）18:30 @北川原公会堂	調査回収状況，調査集計作業，協働の課題
5	11月05日（土）18:30 @北川原公会堂	調査集計作業&考察作業（意識と実態と提言）
6	12月03日（土）18:30 @北川原公会堂	調査から見えた意識と実態と地域づくりの課題考察①
7	12月17日（土）18:30 @北川原公会堂	調査から見えた意識と実態と地域づくりの課題考察②
8	01月07日（土）18:30 @北川原公会堂	調査報告書ページ仕立て作業，入稿，報告研修会計画
9	02月04日（土）18:30 @北川原公会堂	調査結果の検証，報告研修会の具体化
10	03月04日（土）18:30 @北川原公会堂	研究会総括（成果），さわやか福祉財団へ報告

## 6. 回収状況〔配布枚数と回収枚数（地域別）〕

本会の調査活動は、これまで27年間一貫して、会員の手作りによる取り組みで実施してきた。今回は、「焼津福祉文化共創研究会」との協働による取り組みをした。

会員への調査票の配布のほかに、予め県内3つの地域に対して市町社会福祉協議会をはじめ、福祉施設、地域活動実践者等40箇所をお願いをした。

地域別配布及び回収については、「東部地域」に関しては、研修会における参加者の積極的な回答により、大幅な回答結果となった。

「中部地域」に関しては、本会事務局が中部管内にある関係で、調査票の回収が容易であったため、協力呼びかけがしやすかった結果が出ている。

「西部地域」に関しては、地域実践者に精力的な調査の呼びかけをしていただき、これまでの調査より多い回答をいただくことができた。

いずれにせよ、長引く厳しいコロナ禍に加えて、台風15号の被災地域への支援活動に従事されている地域環境の中で、関係者のご理解により本調査が実施できた。

配布及び回収状況は、次の通りである。

地 域	東部地域	中部地域	西部地域	合 計
配布枚数	271	490	155	916
回収枚数	271	388	135	794
回 収 率	100.0%	79.2%	87.1%	86.7%

- この27年間の「調査研究事業」を調査票の回収状況から振り返ると、
    - 2016年度「ご近所福祉調査事業」（大人対象） … 56.1%
    - 2017年度「居場所調査事業」（大人対象） … 65.8%
    - 2020年度「ご近所福祉調査事業」（大人対象） … 71.0%
    - 2021年度「福祉ってなに？461名の子どもたちに聞きました調査事業」（子ども対象） … 75.6%
    - 2018年度「子どもを育む調査事業」（大人対象） … 80.1%
    - 2022年度「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査事業」（大人対象） … 86.7%
- 昨年度に引き続き、厳しい地域環境下での調査研究事業であったが、調査に協力いただいた地

域実践者をはじめ、福祉施設・団体等の積極的な高齢者への働きかけにより、予想を上回る貴重な意見をいただくことができた。

## 7. 調査協働 焼津福祉文化共創研究会

### 参考：本会と協働活動している「焼津福祉文化共創研究会」とは？

#### ■ 「焼津福祉文化共創研究会」の誕生のプロセス

介護保険制度により、これまで長いこと培われていた「共助」は、いつの間にか私たちの身近な地域社会から見失われ、「公助」、「専門性」だけで、私たちの生活は保証される、極端に言えば、人々の意識を大きく転換している。そんな時代を迎えたからこそ、社会の大きな課題提起を私たち地域住民が改めて認識する学びが求められた。公助の視点から、「地域支援」、「生活支援」の言葉が市民に向けられている今、制度の限界から再び、地域での支え合いの仕組みを考え、実践することから、私たちの地域社会の主体性から「お互い様」、「ささえあいの精神」を復活したいと感じ、2016年度～2018年度の3年間、市民主体の「港地域ささえあい講座」を開講。

「講座」を運営した実行委員の有志が「地域の福祉問題」を自発的に身近に学び合い、地域課題の解決・改善に向けて、2019年度に結成し、4年目の活動を総括する。

#### ■ 結成して4年間のプロセス

厳しいコロナ禍で、「共助・近助の地域を再構築」を目的に、活動の原点をもとに、市民有志で結成した本会の活動は、尊い「焼津市赤い羽根共同募金地域福祉促進助成事業」や静岡県コミュニティづくり推進協議会「コミュニティ活動集団助成事業」、「公益財団法人さわやか福祉財団助成事業」等により、地域の福祉課題を検証し、地域住民に課題提起をしている。

##### ➤ 1年目(2019年度)

#### 活動テーマ【港地域の“ご近所”を切り拓く 集まる居場所で地域ぐるみのささえあいを検証する】

約5,000世帯をもって組織化されている「港地域づくり推進会」（港第14・23自治会）管内で、今日まで地域や個々の人々のつながりの中で、気兼ねなく集まり、会話を交わし、ふれあい交流し、普段の拠り所としている「居場所的機能」を持つ55の既存の各種団体・グループを把握し、「集める居場所から集まる居場所」を課題提起できた。

##### ➤ 2年目(2020年度)

#### 活動テーマ【港地域のご近所を切り拓くパート2ー協働による地域課題解決を探る】

管内の20歳以上の住民を対象に「ご近所福祉その意識と実態調査」（345名の回答）に取り組み、地域で顔の見える“近助”の関係づくりができる「協働による地域づくり」を働きかけた。

##### ➤ 3年目(2021年度)

#### 活動テーマ【港地域をつなぐ・ささえあう“ご近所福祉”を創る】

管内関係団体・学校関係者等の協力で、子どもを対象に、「福祉ってなに？244名の子どもたちに聞きました調査」を実施し、尊い子どもたちからの意見を大人社会への提言としてまとめた。

##### ➤ 4年目(2022年度)

#### 活動テーマ【わかる・見える実践活動で“福祉文化としてのご近所福祉”を探る】

本会との協働により、管内在住の65歳以上の高齢者を対象に「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査」を実施。地縁組織、志縁組織との協働により、315名から尊い意見をいただいた。「みんなで創る福祉を学ぶ講座事業」にも取り組む。

## 第2章 サンプル構成／基本属性

この章では、このたび、静岡県域の65歳以上の高齢者を対象に実施した「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査」に回答いただいた794名がどの領域かの基本となる「サンプル構成」、「基本属性」をまとめた。

本会は1996年度結成以来、27年間取り組んできた調査活動を、県内の「東部地域」、「中部地域」、「西部地域」の各地域、各領域から、調査実施要項に基づき、均等性、信頼性に努め、今回の調査につなげている。

調査実施及び調査票の組み立て等にあたり、「地域共生社会調査研究部会」、本会委員会及び協働で取り組んできた「焼津福祉文化共創研究会」等で慎重に協議を積み重ねた。

また、全国的な「基本調査」、「世論調査」、「動向調査」等で活用している項目を参考にした。

「基本属性」については、

- |          |        |        |          |
|----------|--------|--------|----------|
| 1. 性別    | 2. 年齢別 | 3. 職業別 | 4. 居住形態別 |
| 5. 居住年数別 | 6. 地域別 | 7. 世帯別 |          |

の7項目とした。

議論の中で、「3. 職業別」については、今日高齢者の社会参加を積極的に呼びかけていることを念頭に、選択肢を、

- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| ① 自営業（農村漁業）   | ⑤ パートタイム・臨時被雇用者 |
| ② 自営業（商工サービス） | ⑥ フルタイム被雇用者     |
| ③ 会社または団体役員   | ⑦ 収入を伴う仕事はしていない |
| ④ 無職          |                 |

と、幅を広げた。

「2. 年齢別」は、60代を考察するうえで、①65歳～69歳を意図的に選択肢に入れた。そして、②70歳～74歳を設けて、①と②で「前期高齢者」の領域を設けた。さらに、「後期高齢者」を、③75歳～79歳、④80歳以上に区分した。

また、「7. 世帯別」については、選択肢を、①夫婦のみ、②単身世帯、③複世代との同居、④その他の4つとしたが、③と④を混同している回答があった。

今回の調査にあたり、「第1章 調査の概要」で述べたとおり、これまで26年間実施してきた「調査票」から、今回の調査実施の趣旨に基づく「設問」として生かせる内容として、「14の設問」を再び採用した。

主な内容は、

- |                  |                      |
|------------------|----------------------|
| ① 困ったときの相談相手は誰か  | ⑧ 地域の行事や活動参加の有無      |
| ② 生活情報の入手方法      | ⑨ 地域行事や活動の内容         |
| ③ 一人でも安心して暮せる地域か | ⑩ 地域からの活動参加呼びかけへの対応  |
| ④ 地域の人々との交流の有無   | ⑪ 呼びかけの参加の内容         |
| ⑤ 超高齢社会の生活の支え    | ⑫ 在宅生活維持のために希望する支援内容 |
| ⑥ 地域コミュニティの在り方   | ⑬ とともに、助け合う地域づくりの環境  |
| ⑦ ご近所との行き来       | ⑭ 地域の見守りの支援体制の有無     |

である。

考察にあたり、今回の調査結果とを比較考察し、地域社会の変化を併せて把握することを確認した。新たな「設問」として、「18の設問」に組み込んだ。

主な設問内容を挙げると、

- |                |                             |
|----------------|-----------------------------|
| ✓ 「生活の不安の有無」   | ✓ 「ホッとする居場所はどこか」            |
| ✓ 「家族関係」       | ✓ 「これまでの人生を振り返る」            |
| ✓ 「高齢者の果たす役割」  | ✓ 「これからも、住み慣れた地域で生活するための環境」 |
| ✓ 「生活圏域の親しい関係」 | ✓ 「有償ボランティアの活用」             |
| ✓ 「ご近所の付き合い」   | ✓ 「居場所の運営に望むこと」             |

等である。



- ✓ 今回の調査では、高齢者を対象とした「地域の支え合い」の意見をもとに考察するうえで、年齢別回答は、重要な意義を持つ。特に、「前期高齢者層」と「後期高齢者層」の意識と実態の考察も考慮するよう努力した。
- ✓ 結果的には、70歳～74歳 34%で一番多く回答をいただいた。次に、65歳～69歳 25%、75歳～79歳 23%、80歳以上 19%の順であった。
- ✓ 「前期高齢者層」59%に対して、「後期高齢者層」41%と、「後期高齢者層」の積極的な回答が伺えた。このたびの調査の回収過程から、高齢者の思いは、年齢が重なるごとに、本調査への思いが強く感じられた。

### 3. 職業別

- |                         |                             |
|-------------------------|-----------------------------|
| (1) 自営業（農村漁業）…36名（5%）   | (5) パートタイム臨時被雇用者…105名（13%）  |
| (2) 自営業（商工サービス）…42名（5%） | (6) フルタイム被雇用者…26名（3%）       |
| (3) 会社または団体役員…41名（5%）   | (7) 収入を伴う仕事はしていない…156名（20%） |
| (4) 無職…372名（48%）        |                             |
- ✓ 回答結果から、明らかに、高齢者の社会参加の傾向は多い。「無職」48%の回答以外は、何らかの形で、日常的に地域のつながりを有していることがわかる。

### 4. 居住形態別

- |                   |                |
|-------------------|----------------|
| (1) 持ち家…763名（97%） | (4) 間借り…3名（0%） |
| (2) 公営借家…8名（1%）   | (5) その他…6名（1%） |
| (3) 民営借家…9名（1%）   |                |
- ✓ 回答者の97%が、ご近所との関わりができる環境にある「持ち家」である。その意味では、「地域社会との関わり合い」を、居住環境から考察できる。

### 5. 居住年数別

- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| (1) 5年未満…18名（2%）  | (3) 20年未満…71名（9%）   |
| (2) 10年未満…19名（2%） | (4) 20年以上…664名（86%） |
- ✓ ①20年以上 86%、②20年未満 9%、③10年未満 2%、④5年未満 2%の回答順。高齢者の居住年数から、約95%はご近所との関わりのある環境であることが伺える。

### 6. 居住地域別

- |                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| (1) 東部地域…245名（32%） | (3) 西部地域…131名（17%） |
| (2) 中部地域…390名（51%） |                    |
- ✓ 2年前の調査回答実数よりやや上回った結果となった。地域別では、ほぼ前回と同じ傾向の回答状況であった。
  - ✓ 中部地域に本会事務局がある関係で、中部地域からの回答が多く寄せられている。今回の調査実施において、東部地域における研修会参加者から積極的な回答をいただいた。
  - ✓ 西部地域は、前回の回答を上回った。

### 7. 世帯別状況

- |                    |                       |
|--------------------|-----------------------|
| (1) 夫婦のみ…254名（44%） | (3) 複世代との同居…232名（40%） |
| (2) 単身世帯…69名（12%）  | (4) その他…21名（4%）       |
- ✓ 回答結果から、①夫婦のみ 44%、②複世代との同居 40%、③単身世帯 12%、④その他 4%と、それぞれの世帯生活状況から、地域ぐるみで支え合う環境に対する意識と実態の回答の考察ができる。

## 【「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査」調査項目とクロス集計】

今回の調査の考察については、「地域共生社会調査研究部会」及び「定例研究会」の協議で、下記のようなクロス集計をもとに考察することができた。

設問No.・区分・内容			基本属性						
			1 性別	2 年齢層	3 職業	4 居住形態	5 居住年数	6 居住地域	7 世帯状況
2	生活状況	暮らし向きについて	●	●		●	●	●	
3		現在の生活上の不安について	●	●			●	●	●
4		毎日の暮らしの中で困ったとき、誰に相談するか	●	●			●	●	●
5		日常生活における生活情報源について	●	●	●	●	●	●	●
6		親しくしている友人・仲間ほどの程度か	●	●				●	
7		家族を大切にしているか	●	●				●	
8	家庭・家族	家族はどのような意味を持つか	●	●			●	●	●
9		家族と食事をどのようにとっているか	●	●	●			●	●
10		子どもとともに生活したいか	●	●				●	
11		一番家族が必要だと感じる時はいつか	●	●			●	●	●
12		家族の中で高齢者が果たす役割について	●	●		●	●	●	●
13	地域意識	「一人でも安心して暮せる地域である」と思うか	●	●			●	●	
14		自分の住んでいる地域の人々との交流について	●	●	●		●	●	●
15		“超高齢社会”における、今日の「生活の支え」	●	●			●	●	●
16		地域コミュニティについて	●	●				●	
17		これから参加してみたい興味のある地域活動	●	●			●	●	
18	地域実態	あのときは良かったと感じる内容について	●	●			●	●	●
19		ご近所の人とお付き合いについて	●	●	●		●	●	●
20		ご近所に親しくしていき来する家があるか	●	●			●	●	●
21	地域参加動向	地域の行事や活動に参加しているか	●	●	●		●	●	●
22		(設問21.で)主に「参加している」内容	●	●	●			●	
23		地域活動への参加	●	●				●	
24		(設問23.で)主な活動内容	●	●				●	
25		(設問23.で)主な理由	●	●	●			●	
26	地域環境	一番安心(ホッと)できる場所について	●	●			●	●	●
27		在宅生活を維持していくために必要と思われる支援	●	●				●	
28		共に助け合う地域環境	●	●			●	●	●
29		「地域ぐるみで見守り活動」をする支援体制はあるか	●	●			●	●	●
30		今の地域で暮らし続けるために必要と思われること	●	●			●	●	●
31		生活上困ったときの「有償サービス」支援の利用	●	●				●	
32		「居場所」の運営(環境)	●	●				●	
33	提言	意見・提言	●	●					

## 第3章 調査結果

第3章では、静岡県域における65歳以上の高齢者794名から回答をいただいた、「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査」を単純集計結果と、「第2章 サンプル／基本属性」に基づき、クロス集計結果をもって考察すべき設問についてまとめた。このたびの「32の設問項目」を、大きく次の「7つの領域」に分けて考察した。

- (1) 高齢者の生活状況に関する項目（設問 02. ～設問 06.）
  - ① 高齢者の暮らし向きの現状について
  - ② 高齢者の現在の生活上の不安は何か
  - ③ 毎日の暮らしの中で困ったとき、だれに相談をするか
  - ④ 日常の生活の福祉の情報源はなにか
  - ⑤ 親しくしている友人・仲間の状況について
- (2) 高齢者の家庭・家族に関する項目（設問 07. ～設問 12.）
  - ① 家族を大切にしているか
  - ② 家庭はどのような意味を持っているか
  - ③ 家族と食事をどのようにとっているか
  - ④ 子供とともに生活をしたいか
  - ⑤ 一番家族が必要だと感じる時はいつか
  - ⑥ 家庭の中で、高齢者の果たす役割はどのようなことか
- (3) 高齢者の地域との関わり（意識）に関する項目（設問 13. ～設問 17.）
  - ① あなたの地域は、「一人でも安心して暮らせる地域」であるか
  - ② 自分の住んでいる地域の人々との交流についての考え方
  - ③ “超高齢社会”の今の「生活の支え」について
  - ④ あなたの地域のコミュニティの考え方について
  - ⑤ これから参加してみたい興味のある地域活動について
- (4) 高齢者の地域との関わり（実態）に関する項目（設問 18. ～設問 20.）
  - ① 人生を振り返り「あの時はよかった」と感じる内容
  - ② ご近所の人とおつきあいについて
  - ③ ご近所に、親しく行き来する家の有無
- (5) 高齢者の地域参加の動向に関する項目（設問 21. ～設問 25.）
  - ① 地域の行事や活動の参加の有無
  - ② 参加している内容
  - ③ 「地域づくり」に参加呼び掛けがあった時の参加の有無
  - ④ 参加したい活動の内容
  - ⑤ 参加したくない理由について
- (6) 高齢者の地域環境に関する項目（設問 26. ～設問 32.）
  - ① 一番安心（ホッと）できる場所について
  - ② 地域で困った状態の時、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービスについて
  - ③ とともに、助け合う地域づくりに向けて、どのような環境があれば活動しやすいか
  - ④ あなたの地域に、「地域ぐるみで見守り活動」の支援体制はあるか
  - ⑤ 今の地域で暮らし続けるために必要と思われること
  - ⑥ 生活上困ったときに「有償サービス」の利用について
  - ⑦ 地区住民同士がひと時を過ごす「居場所」の運営について
- (7) 「ホッとする、安心した地域づくり」に関する意見・提言（設問 33.）

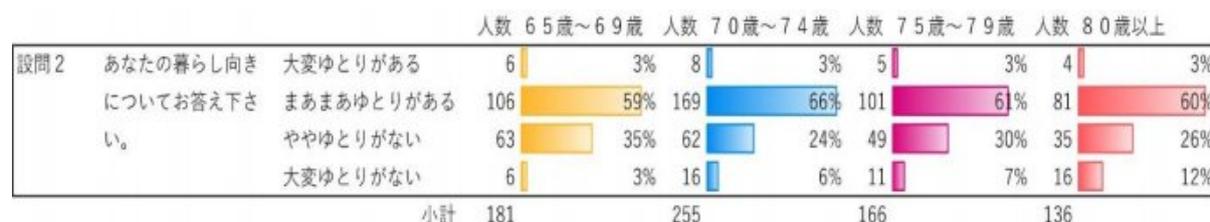
■ 本会が2020年度調査研究活動「ご近所福祉その意識と実態調査」を実施した設問項目の結果考察を、今回の調査設問項目に取り入れた設問項目については、★印で比較考察をした。

# 1. 高齢者の生活状況に関する項目（設問 02. ～設問 06.）

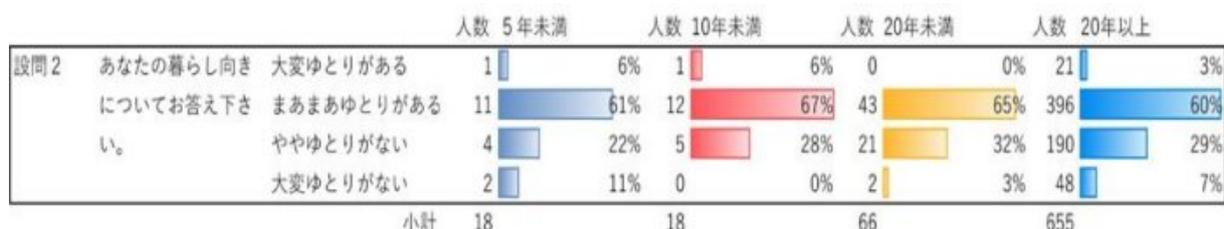
## 設問02. 高齢者の暮らし向きに関する現状について



- ✓ 全体的には、「まあまあゆとりがある」61%、「大変ゆとりがある」3%を合わせると64%と半数以上が「ゆとりがある」と伺える。「ややゆとりがない」29%、「大変ゆとりがない」7%の約40%は「ゆとりがない」と回答している。男女別でも、ほぼ同じ傾向である。



- ✓ 年代別では、70～74歳は、他の領域よりも、ややゆとりがあるとの回答が伺える。65～69歳では、他の領域よりも「ゆとりがある」の回答状況が低い。70～74歳を前後して、生活のゆとりがない傾向が伺える。



- ✓ 居住年数から、生活のゆとりを考察すると、「全体的にゆとりがある傾向」は、5年未満67%、10年未満73%、20年未満65%、20年以上63%。ここでは、10年未満が73%と高く、次に5年未満67%、20年未満65%、20年以上63%である。居住年数が長いと生活のゆとりが低いことが伺われる。

## 設問03. 高齢者の現在の生活上の不安は何か



- ✓ 高齢者の現在の生活上の不安についての回答結果では、全体の結果から、回答の多い順にまとめると、①自分や家族の健康35%、②災害時の対応24%、③自分や家族の介護16%、④コロナの緊急対応10%、⑤特に不安はない7%、⑥家族問題4%、⑦友人や地域との交流がない、ご近所問題各2%。男女別を見ると、大きな開きはないが、「特に不安はない」の回答が男性よりも女性が上回っている。

		人数 65歳～69歳	人数 70歳～74歳	人数 75歳～79歳	人数 80歳以上
設問3	あなたの現在の生活 自分や家族の健康	118	175	106	102
	上の不安についてお 災害時の対応	85	118	79	73
	答え下さい。主なも 自分や家族の介護	67	65	41	58
	のを3つまでお答え コロナの緊急対応	30	56	37	25
	下さい。 家族問題	12	22	12	10
	友人や地域との交流が	7	7	6	5
	ご近所問題	8	15	4	3
	その他( )				
	特に不安はない	21	36	30	17
	小計	348	494	315	293

- ✓ 年齢別に考察すると、大きな開きはないが、「自分や家族の介護」は、65～69歳、80歳以上で回答が多いことが伺える。このことは、実社会における動きが伺える結果である。また、「特に不安はない」の回答では、75～79歳が10%の回答をしている。それなりに生活基盤が確立している年代とも読み取れる。

		人数 夫婦のみ	人数 単身世帯	人数 複世代との同居世帯	人数 その他( )
設問3	あなたの現在の生活 自分や家族の健康	175	37	167	15
	上の不安についてお 災害時の対応	121	36	118	8
	答え下さい。主なも 自分や家族の介護	80	24	78	6
	のを3つまでお答え コロナの緊急対応	45	16	44	3
	下さい。 家族問題	16	4	16	4
	友人や地域との交流が	10	4	8	1
	ご近所問題	7	5	8	0
	その他( )	11	1	5	0
	特に不安はない	26	9	25	5
	小計	491	136	469	42

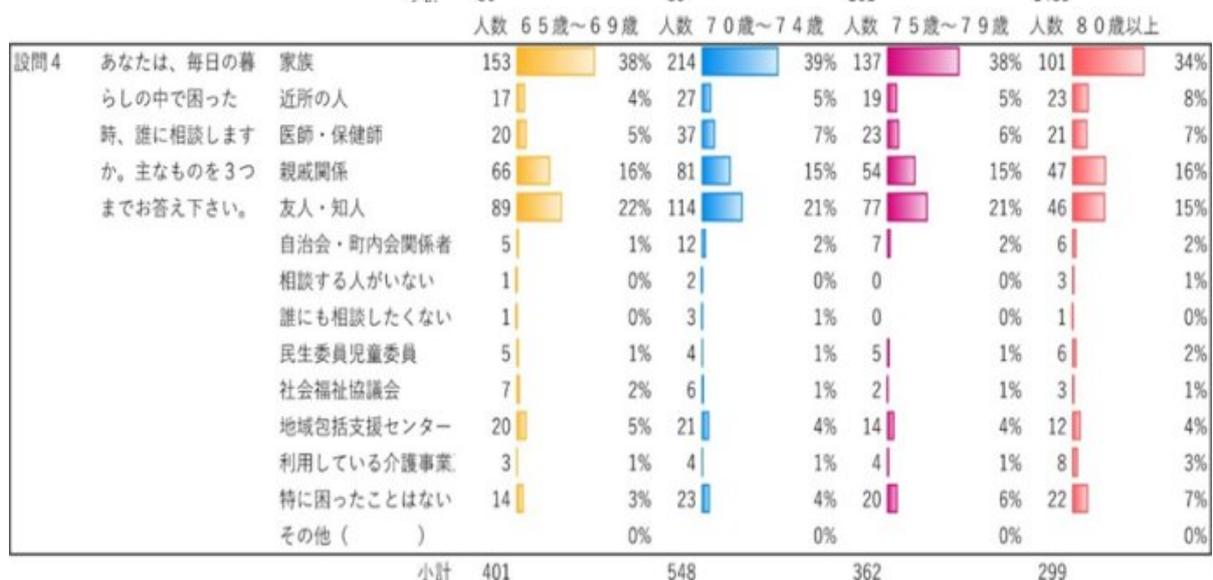
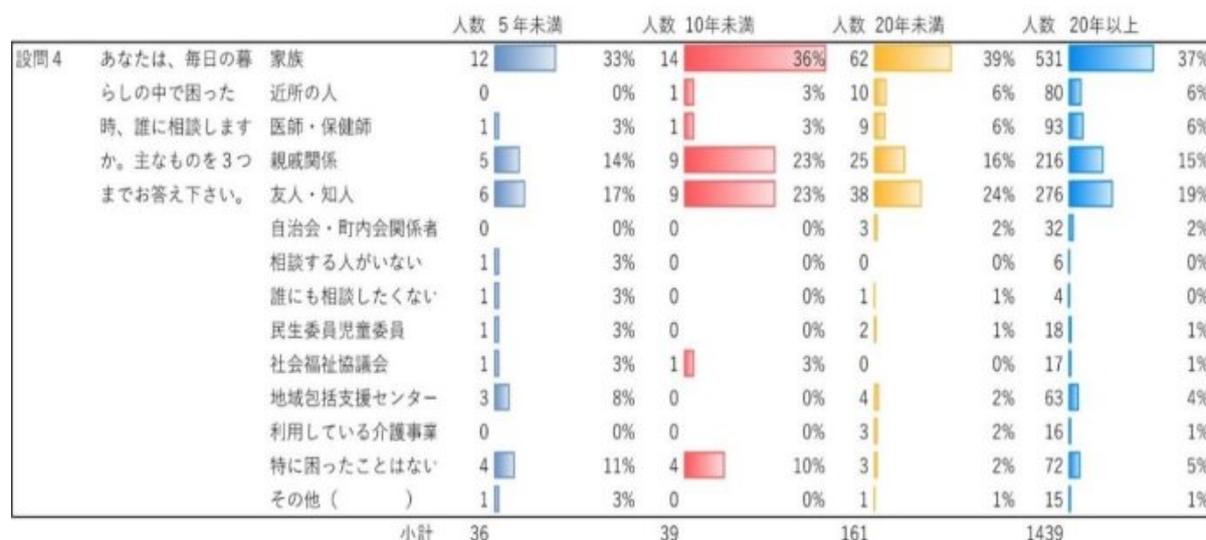
- ✓ 世帯状況別で、現在の生活上の不安はなにかを考察すると、全体的には、ほぼ不安内容は共通しているように項目別に見ると、「自分や家族の健康」では、夫婦のみ、複世代との同居世帯、その他が各36%と高い回答状況である。次に、「災害時の対応」では、単身世帯26%と高い回答状況である。次に、夫婦のみ、複世代との同居世帯各25%である。「自分や家族の介護」は、単身世帯18%、複世代との同居世帯17%、夫婦のみ16%。「コロナの緊急対応」は、単身世帯12%、夫婦のみ、複世代との同居世帯各9%。「特に不安はない」の回答では、単身世帯の7%、次に夫婦のみ、複世代との同居世帯各5%の回答である。

#### 設問04. 毎日の暮らしの中で困ったとき、誰に相談をするか

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
設問4	あなたは、毎日の暮らしの中で困った時、誰に相談しますか。主なものを3つまでお答え下さい。	263	361	624
	家族	36%	38%	37%
	近所の人	31	4	90
	医師・保健師	48	7	105
	親戚関係	117	16%	15%
	友人・知人	134	18%	22%
	自治会・町内会関係者	23	3%	1%
	相談する人がいない	4	1%	0%
	誰にも相談したくない	3	0%	0%
	民生委員児童委員	8	1%	1%
	社会福祉協議会	12	2%	1%
	地域包括支援センター	35	5%	4%
	利用している介護事業	13	2%	1%
	特に困ったことはない	37	5%	5%
	その他( )		0%	0%
小計	728	951	1679	

- ✓ 全体的な考察では、回答の多い順にまとめると①家族37%、②友人・知人20%、③親戚関係15%、④医師・保健師6%、⑤近所の人・特に困ったことはない5%、⑥地域包括支援センター4%、⑦自治会・町内会関係者2%、⑧民生委員児童委員、利用している介護事業所関係者、

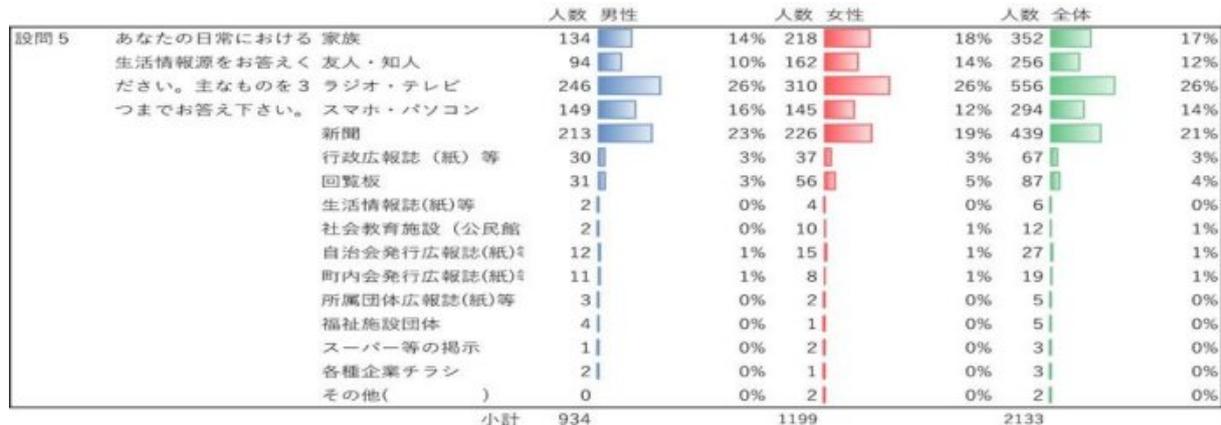
社会福祉協議会 1%。相談する人がいない、誰にも相談したくない回答はごくわずかであった。回答内容から、少しずつ、公的制度等を活用した問題解決に努力されていることが伺える。性別では、男性よりも女性の方が、友人・知人の割合が多い。親戚関係への相談は、男性の方が女性よりも多いことが伺える。年齢別回答では、80歳以上になると、友人・知人よりも親戚関係が上回る回答である。居住年数別の回答状況は、近所の人や自治会・町内会関係者の相談が、居住年数が長くなるにつれて、表面化している。



★ 2020年度調査結果との比較考察

No.	2020年度	2022年度
1	家族関係 48.7%	家族関係 37%
2	友人・知人 18%	友人・知人 20%
3	親戚関係 16.7%	親戚関係 6%
4	近所の人 7%	医師・保健師 5%
5	医師・保健師 3%	近所の人、特に困ったことはない 4%
6	自治会町内会関係者 地域包括支援センター 1%	地域包括支援センター 4%
		自治会・町内会関係者 2%
		民生委員児童委員
		利用している介護事業所関係者、 社会福祉協議会 1%

設問05. 日常生活の福祉の情報源は何か



- ✓ 全体の回答状況を多い順にまとめると、①ラジオ・テレビ 26%、②新聞 21%、③家族 17%、④スマホ・パソコン 14%、⑤知人・友人 12%、⑥回覧板 4%、⑦行政広報誌（紙）等 3%、⑧生活情報誌等、⑨社会教育施設（公民館だより等）、自治会発行広報誌（紙）等、町内会発行広報誌（紙）等 1%。性別にみると、家族、友人・知人からは、女性の方が多い。スマホ・パソコンは、男性の方が多い。回覧板は、女性の方が多く回答している。



- ✓ 年齢別にみると、共通的に、ラジオ・テレビが多い。友人・知人からは、加齢とともに多い傾向にある。スマホ・パソコンは、65～69歳までは20%と多く、加齢とともに、80歳以上では5%と低い。
- ✓ ここで、高齢者への生活情報源を考察すると、マスコミからの情報入手が大きく浮き彫りになっている。また、家族や友人からの情報も頼りにしている。従来、身近な地域において重視されている回覧板機能は、この調査結果から、住民同士が、今後維持していく上で創意工夫が求められる。さらに、新たに、高齢者に向けて浮かびあがってきたのは、スマホ・パソコンによる情報入手の課題である。65～74歳の年代層では、約2割が情報入手に活用していることが伺える。

★ 2020年度調査結果との比較考察

No.	2020年度		2022年度	
1	ラジオ・テレビ	30%	ラジオ・テレビ	26%
2	新聞	20%	家族	17%
3	家族	18%	新聞	21%
4	スマホ・パソコン	9%	スマホ・パソコン	14%
5	行政広報誌（紙）等	3%	知人・友人	12%
6	回覧板	4%	回覧板	4%
7	自治会発行広報誌（紙）等 町内会発行広報誌（紙）等	1%	行政広報誌（紙）等	3%

- ✓ スマホ・パソコンは、2020年度の9%から2022年度は14%と広がっていることが伺える。
- ✓ 回覧板は、ほとんど変化がない。知人・友人は2022年度一挙に12%と増えている。

設問06. 親しくしている友人・仲間の状況について

	人数 男性	人数 女性	人数 全体
設問6 あなたは、親しくしてたくさん持っている	41	71	112
いる友人・仲間はどのま	60%	66%	63%
程度かお答え下さい。あまり持っていないと	81	70	151
ほとんど持っていない	13	6	19
小計	340	432	772

- ✓ 全体的な考察では、「持っている」傾向が78%、「持っていない」傾向が33%。
- ✓ 性別では、「持っている」領域は女性の82%に対して、男性は72%と10%低いことが伺える。

	人数 65歳～69歳	人数 70歳～74歳	人数 75歳～79歳	人数 80歳以上
設問6 あなたは、親しくして	28	31	24	28
ている友人・仲間は	60%	67%	65%	58%
どの程度かお答え下さい。あまり持っていないと	38	48	30	26
ほとんど持っていない	7	4	4	4
小計	183	254	168	138

- ✓ 年齢別に「持っている」領域をみると、加齢とともに多い傾向が伺える。

	人数 自営業(農林業)	人数 自営業(小売業)	人数 会社員(役員)	人数 無職	人数 パートタイム被雇用者	人数 フルタイム被雇用者	人数 収入を伴う仕事をしていない
設問6 あなたは、親しくして	3	3	9	59	13	1	24
ている友人・仲間は	9%	7%	22%	63%	13%	4%	16%
どの程度かお答え下さい。あまり持っていないと	7	11	26	11	22	4	15
ほとんど持っていない	2	1	0	8	4	0	4
小計	34	42	41	369	103	26	154

- ✓ 職業別では、無職とフルタイム被雇用者は、「持っている」傾向が伺える。

	人数 持ち家	人数 公営借家	人数 民営借家	人数 間借り	人数 その他( )
設問6 あなたは、親しくして	111	0	0	0	0
ている友人・仲間は	63%	63%	78%	67%	100%
どの程度かお答え下さい。あまり持っていないと	148	1	2	1	0
ほとんど持っていない	17	2	0	0	0
小計	753	8	9	3	6

- ✓ 居住形態別にみると、地域環境から、持ち家の方、民営借家の方は、地域との交流ができて回答が伺える。居住年数が長いほど、「友人・仲間を持っている」回答である。

	人数 夫婦のみ	人数 単身世帯	人数 複世代との同居世帯	人数 その他( )
設問6 あなたは、親しくして	41	7	33	6
ている友人・仲間は	63%	63%	62%	57%
どの程度かお答え下さい。あまり持っていないと	48	14	50	2
ほとんど持っていない	5	3	5	1
小計	251	68	231	21

- ✓ 世帯状況の回答状況からは、「友人・仲間を持っている」傾向は、単身世帯75%、夫婦のみ79%、複世代との同居76%と、わずかではあるが、単身世帯の方が少ないことが伺える。

**【高齢者の生活状況に関する考察】**

1. 高齢者の現在の暮らし向きは、全体的及び性別・世帯状況別共に、約6割は「ゆとりがある」回答であるが、「ゆとりがない」回答は約4割を占めている。年齢別には、70～74歳を前後に、「ゆとりがない」ことが伺える。
2. 高齢者の現在の生活上の不安は、「自分や家族の健康」「災害時の対応」「自分や家族の介護」「日々の緊急対応」が浮き彫りになっている。性別では、女性の方が「特に不安はない」が男性を上回っている。年齢別では、75～79歳代は、それなりに生活基盤が確立している年代とも読み取れる。
3. 毎日の暮らしの中で、困った時の相談は、「家族」「友人・知人」「親戚関係」の回答が多いが、比較的年代が若い方々は、「親戚関係」よりも「友人・知人」の回答が多いが、年配者では、「これが逆転している。前回の調査より、少しずつ、公的制度等を活用した問題解決に努力されていることが伺える。性別では、男性よりも女性の方が、友人・知人の割合が多い。親戚関係への相談は、男性の方が女性よりも多いことが伺える。
4. 日常の生活の福祉の情報源について、全体の回答状況では、マスコからの情報入手、次に家族や友人からの情報を頼りにしている。さらに、新たに、高齢者に向けて浮かびあがってき

たのは、「スマホ・パソコン」による情報入手である。「回覧板」は、前回とほぼ同じであるが、女性の方が多く回答している。スマホ・パソコンは、前回から大幅に増えている。65~69歳までは20%と多いが80歳以上では5%と低い。従来、身近な地域において重視されている回覧板機能は、この調査結果から、今後維持していく上での課題がある。

## 2. 高齢者の家庭・家族に関する項目（設問07.～設問12.）

### 設問07. 家族を大切にしているか

		人数 男性	人数 女性	人数 全体			
設問7 あなたは、家族を大切にしていますか。	とても大切にしている	127	38%	187	44%	314	41%
	大切にしている	176	53%	213	50%	389	51%
	少し大切にしている	27	8%	20	5%	47	6%
	どちらかといえば大切にしている	2	1%	6	1%	8	1%
	大切にしていない	3	1%	0	0%	3	0%
小計		335		426		761	

- ✓ 全体的な考察では、「家族を大切にしている」は92%と高い。性別、年齢別でも、ほぼ変わらない。

### 設問08. 家庭はどのような意味を持っているか

		人数 男性	人数 女性	人数 全体			
設問8 あなたにとって、家庭はどのような意味を持っていますか。主なものを3つまでお答え下さい。	家族の団らんの場	201	27%	247	26%	448	26%
	休憩安らぎの場	215	29%	288	30%	503	30%
	家族の絆を強める場	144	19%	158	17%	302	18%
	家族が共に成長する場	117	16%	171	18%	288	17%
	子供を産み育てる場	14	2%	20	2%	34	2%
	夫婦の愛情を育む場	27	4%	26	3%	53	3%
	子どもをしつける場	12	2%	9	1%	21	1%
	親の世話をする場	12	2%	13	1%	25	1%
	その他（ ）	5	1%	6	1%	11	1%
	わからない	6	1%	8	1%	14	1%
小計		753		946		1699	

- ✓ 高齢者からの「家庭はどのような意味を持つか」の回答は、全体的には、「休憩安らぎの場」30%、「家族の団らんの場」26%、「家族の絆を強める場」18%、「家族が共に成長する場」17%、「夫婦の愛情を育む場」3%、「子どもを産み育てる場」2%、「子どもをしつける場」「親の世話をする場」各1%である。性別では、男性は「家族の絆を強める場」19%、「家族が共に成長する場」16%に対して、女性は「家族が共に成長する場」18%「家族の絆を強める場」17%の結果である。

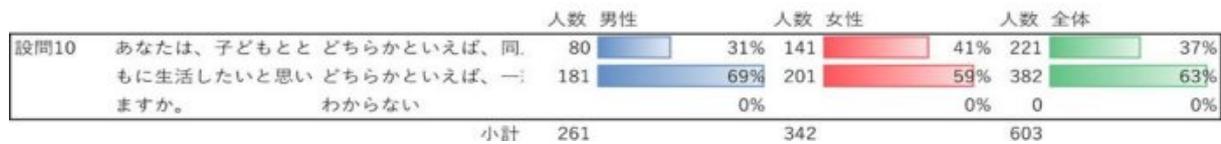
### 設問09. 家族と食事をどのようにしているか

		人数 男性	人数 女性	人数 全体			
設問9 あなたは、家族と食事をどのようにしていますか。	ほとんどいつも家族の誰かと一緒に食べている	238	70%	282	66%	520	68%
	毎日少なくとも1回は家族の誰かと一緒に食べている	54	16%	73	17%	127	17%
	時々、家族の誰かと一緒に食べている	21	6%	40	9%	61	8%
	家族と一緒に食べていない	26	8%	33	8%	59	8%
小計		339		428		767	

		人数 夫婦のみ	人数 単身世帯	人数 複世代との同居世帯	人数 その他（ ）				
設問9 あなたは、家族と食事をどのようにしていますか。	ほとんどいつも家族の誰かと一緒に食べている	197	78%	8	13%	165	71%	15	71%
	毎日少なくとも1回は家族の誰かと一緒に食べている	37	15%	8	13%	46	20%	6	29%
	時々、家族の誰かと一緒に食べている	14	6%	15	23%	14	6%	0	0%
	家族と一緒に食べていない	4	2%	33	52%	8	3%	0	0%
小計		252		64		233		21	

- ✓ 高齢者が家族との食事のとり方を、家族関係を考察する調査した項目とした。全体の回答結果では、「ほとんどいつも家族の誰かと一緒に食べている」68%、「毎日少なくとも1回は家族の誰かと一緒に食べている」17%、「時々、家族の誰かと一緒に食べている」8%、「家族と一緒に食べていない」8%（単身世帯）。年齢別、性別共に、ほぼ同じ傾向である。

設問10. 子どもとともに生活をしたいか



- ✓ 子どもとの同居についての回答結果では、全体的には、回答の多い順では、「どちらかといえば、一緒に住みたい」63%、「どちらかといえば、同居したくない」37%、「わからない」0%と「同居したい」回答が多い。これを性別にみると、「同居したい」傾向は同じであるが、男性の方がより同居したい意向が強いことが伺える。

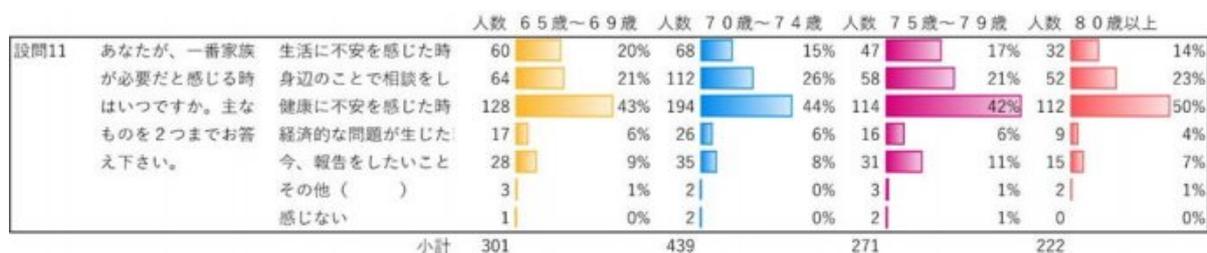


- ✓ 年齢別にみると、65~69歳では、「わからない」30%と多いが、中でも「同居したい」意向が多い。70歳以上は、「同居したい」回答が50%以上である。

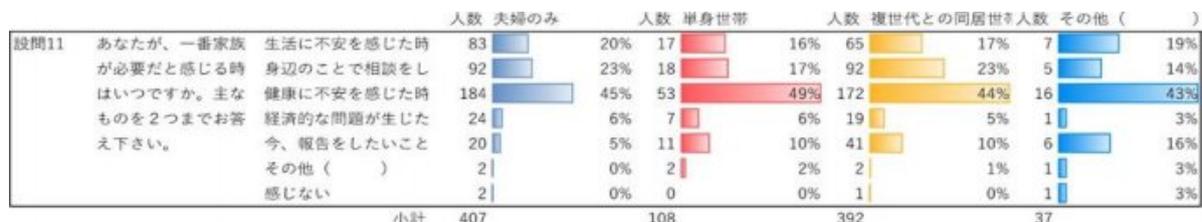
設問11. 一番家族が必要だと感じる時はいつか



- ✓ 高齢者が、家族を一番必要と感じる時の回答では、全体的には回答の多い順に、「健康に不安を感じた時」45%、「身近なことで相談をしたいとき」23%、「生活に不安を感じた時」17%、「今報告をしたいことが生じた時」9%、「経済的な問題が生じた時」6%、「感じない」1%。性別、居住年数別の領域では、ほぼ全体的結果と同じ傾向である。



- ✓ 年齢別にみると、ほぼ全体的・性別の結果とほぼ同じ傾向であるが、80歳以上では、特に「健康に不安を感じたとき」が、50%と他の年齢層よりも多い回答である。

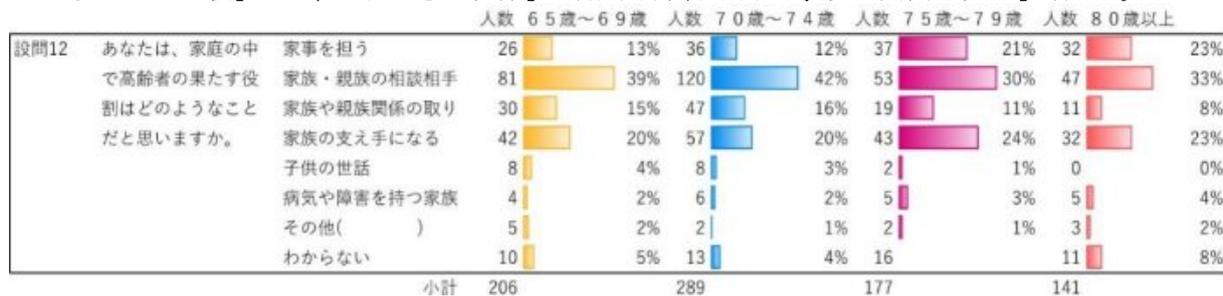


- ✓ 世帯状況別にみると、全体的な結果とほぼ同じ回答状況であるが、単身世帯における「健康に不安を感じたとき」の回答が49%と他の領域よりも回答が多い。

設問12. 家庭の中で、高齢者の果たす役割はどのようなことか



- ✓ 家庭の中で、高齢者の果たす役割の回答結果は、全体的に回答の多い順にあげると「家族・親族の相談相手になる」38%、「家族の支え手」20%、「家事を担う」16%、「家族や親族関係の取りまとめ役」13%、「子どもの世話」「病気や障害を持つ家族の面倒を見る」各2%。



- ✓ 年齢別の回答では、「家族・親族の相談相手になる」は、70~74歳では42%と高い。
- ✓ 「家族の支え手」は、75~79歳で24%と高い回答である。

**【高齢者の家庭・家族に関する考察】**

- 「家族を大切にしている」の回答は92%と高い。性別、年齢別でも、ほぼ変わらない。
- 「家庭はどのような意味を持っているか」の全体的な回答は、「休憩安らぎの場」「家族の団らんの場」、「家族の絆を強める場」、「家族が共に成長する場」、「夫婦の愛情を育む場」、「子どもを産み育てる場」、「子どもをしつける場」、「親の世話をする場」の順である。男性は「家族の絆を強める場」、女性は「家族が共に成長する場」を多く回答。65~79歳までは、「休憩安らぎの場」、80歳以上では、「家族の団らんの場」の回答が多い。単身世帯は、「休憩安らぎの場」の回答が多い。
- 家族との食事のとり方を、家族関係を考察する調査をした結果、全体の回答結果では、「家族と食事をとる」回答が約8割強であった。子どもとの同居についての全体の回答結果は、約6割は「同居を望む」、「同居を望まない」約4割と別れた。性別でみると、「同居したい」傾向は同じであるが、男性の方がより同居したい意向が強いことが伺える。65~69歳では、「わからない」30%と多いが、なかでも「同居したい」意向は多い。70歳以上は、「同居したい」回答が50%以上である。
- 家族を一番必要と感じる時の全体の回答の多い順に、「健康に不安を感じたとき」「身近なことで相談をしたいとき」「生活に不安を感じたとき」「今、報告をしたいことが生じたとき」「経済的な問題が生じたとき」「感じない」。
- 80歳以上では、特に「健康に不安を感じたとき」が50%と、他の年齢層よりも多い回答である。単身世帯における「健康に不安を感じたとき」の回答が49%と他の領域よりも回答が多い。
- 家庭の中で、高齢者の果たす役割の全体の回答結果は、多い順に「家族・親族の相談相手になる」、「家族の支え手」、「家事を担う」、「家族や親族関係の取りまとめ役」、「子どもの世話」、「病気や障害を持つ家族の面倒を見る」。70~74歳では「家族・親族の相談相手になる」42%と高い。75~79歳では、「家族の支え手」24%と高い回答である。

### 3. 高齢者の地域との関わり（意識）に関する項目（設問 13. ～設問 17.）

設問13. あなたの地域は、「一人でも安心して暮らせる地域」であるか



- ✓ 「一人でも安心して暮らせる地域であるか」の全体的な回答結果は、「強く思っている」11%、「少し思っている」55%、「あまり思っていない」24%、「まったく思っていない」3%、「わからない」7%。「安心して暮らせる地域である」が66%で「安心して暮らせる地域ではない」は、3分の1の34%の回答である。



- ✓ 居住年数別に考察すると、「安心して暮らせる地域である」回答は、「5年未満」47%、「10年未満」72%、「20年未満」68%、「20年以上」66%。居住年数が短い層では否定的、特に、「5年未満」の回答は、53%が否定的な回答となっている。居住年数が長くなるとやや否定的傾向の回答結果である。県内地域別では、「安心して暮らせる地域である」回答が多い順に、「東部地域」70%、「中部地域」65%、「西部地域」63%。



- ✓ 年齢別に考察すると、「安心して暮らせる地域である」回答は、「65～69歳」68%、「70～74歳」65%、「75～79歳」65%、「80歳以上」66%と、ほぼ同じ回答傾向である。

#### ★ 2020年度調査結果との比較考察

No.	2020年度		2022年度	
1	少し思っている	57%	少し思っている	55%
2	あまり思っていない	19%	あまり思っていない	24%
3	強く思っている	16%	強く思っている	11%
4	わからない	5%	わからない	7%
5	まったく思っていない	3%	まったく思っていない	3%

- ✓ 「安心して暮らせる地域である」回答は、2020年度は73%であったが、2022年度は66%と7ポイント回答が低い。

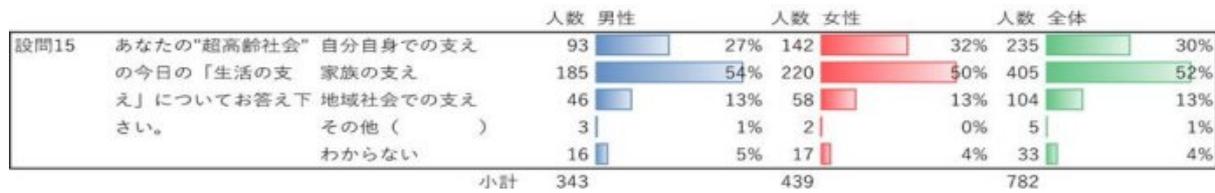
設問14. 自分たちの住んでいる地域の人々との交流についての考え方



- ✓ 全体的な考察では、回答の多い順に、「地域の人々との交流は大切である」59%、「地域の人々との交流はどちらかといえば大切である」38%、「あまり大切だとは思わない」2%、「まったく大切だとは思わない」0%。性別では、回答結果は、同じ傾向であるが、女性の方が男性よりも「地域の人々との交流は大切である」は6ポイント高い。年齢別では、全体的回答と同

じ回答状況であるが、80歳以上では99%と高い。職業別、居住年数別、地域別、世帯状況別も、ほとんど「交流の必要性」の回答である。

設問15. “超高齢社会”の今の「生活の支え」について



- ✓ “超高齢社会”の今の「生活の支え」の全体的回答の多い順に、「家族の支え」52%、「自分自身での支え」30%、「地域の支え」13%、「わからない」4%。性別では、傾向は、全体的回答傾向であるが、「自分自身での支え」男性27%に対して、女性32%と5%女性の回答が高い。「家族の支え」男性54%に対して女性は50%、男性の「家族の支え」が女性よりも4%高い。この結果からは、女性の自立心が高い傾向結果である。



- ✓ 年齢別では、「80歳以上」では、「家族の支え」が55%と高い回答。「75～79歳」では、「家族の支え」47%、「自分自身の支え」39%と、他の領域よりも、自立度は高い回答結果である。



- ✓ 居住年数別では、「5年未満」では、「地域の支え」33%と期待する回答。居住年数が長いほど、「家族の支え」の回答が高い傾向にある。「地域別」回答では、ほぼ同じ傾向結果である。



- ✓ 世帯状況別では、「夫婦のみ」は、「家族の支え」53%、「自分自身での支え」28%。「単身世帯」では、「自分自身での支え」が53%と高い。「複世代との同居世帯」では、「家族の支え」58%と高く、「自分自身での支え」は26%にとどまっている。

★ 2020年度調査結果との比較考察

No.	2020年度	2022年度
1	家族の支え 45%	家族の支え 52%
2	地域社会での支え 32%	自分自身での支え 30%
3	自分自身での支え 21%	地域社会での支え 13%
4	わからない 2%	わからない 4%

- ✓ 今回の回答結果は、2年前より「地域社会での支え」より、「自分自身での支え」の回答が多い。また、「家族の支え」が7ポイント前回よりも高い回答。

### 設問16. あなたの地域のコミュニティの考え方について



- ✓ 「地域のコミュニティの考え方」についての、全体的に回答の多い順に、「潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割を持つ」58%、「今後、ますますその役割は薄れてくる」17%、「よくわからない」16%、「生活を営む上で必要は感じていない」9%。



- ✓ 年齢別の回答では、「潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割を持つ」は、70～74歳61%と高く、75～79歳57%、65～69歳56%、80歳以上53%。否定的回答では、80歳以上46%と高く、65～69歳44%、75～79歳43%、70～74歳39%。70～74歳では、地域コミュニティへの期待が込められている回答であるが、65～69歳、80歳以上では、やや否定的な回答である。地域別では、「潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割を持つ」は、東部地域と西部地域では60%であるが、中部地域では54%と約6%低い回答。

#### ★ 2020年度調査結果との比較考察

No.	2020年度	2022年度
1	潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割を持つ 58%	潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割を持つ 58%
2	よくわからない 22%	今後、ますますその役割は薄れる 17%
3	今後、ますますその役割は薄れる 10%	よくわからない 16%
4	生活を営む上で必要は感じていない 9%	生活を営む上で必要は感じていない 9%

- ✓ 2年前の調査結果との比較では、「潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割を持つ」58%は同じ回答状況であった。「よくわからない」は前回よりも少ない回答。相変わらず、「否定的回答」は4割。

### 設問17. これから参加してみたい興味のある地域活動について



- ✓ 全体的回答の多い順に、趣味や特技を生かせる活動31%、高齢者を対象にした健康交流の活動25%、特にな15%、世代間交流ができる学習活動8%、身近な地域防災に関する活動・環境美化に関する活動7%、世代間交流ができる文化活動6%。性別では、女性は男性よりも高齢者を対象にした健康交流の活動」の回答が9%多い。年齢別では、加齢化とともに、「高齢者を対象にした健康交流の活動」が多い回答。

#### 【高齢者の地域との関わり（意識）に関する考察】

- まず、浮き彫りになったのは、2年前の調査結果と比較すると、「安心して暮らせる地域」約7%低い結果である。今回の回答結果から、約7割が「一人でも安心して暮らせる地域」と受け止めているが、「安心して暮らせる地域ではない」の回答が3割ある。居住年数別に

考察すると、居住年数が短い層では否定的、特に「5年未満」の回答の半数が否定的な回答であるが、居住年数が長くなると、やや否定的傾向の回答結果である。年齢別では、ほぼ同じ回答傾向である。

2. 地域の人との交流については、「地域の人々との交流は大切である」59%、「地域の人々との交流はどちらかといえば大切である」38%と、ほぼ全員がその必要性を回答しているが、男性よりも女性の方が高い回答をしている。2020年度の調査結果「大切である」74%に比べ、今回は59%と15%の開きがある。
3. 「“超高齢社会”の今の生活の支え」の回答の多い順に、「家族の支え」52%、「自分自身での支え」30%、「地域の支え」13%、「わからない」4%と、「家族の支え」が半数以上の回答である。男性の「家族の支え」が女性よりも4%高く、女性の自立心が高い傾向が伺える。特に、「自分自身での支え」男性27%に対して、女性32%と5%女性の回答が高い。「80歳以上」では、「家族の支え」が55%と高い回答。居住年齢別では、「5年未満」では、「地域の支え」33%と期待する回答。世帯状況別では、「夫婦のみ」、「複世代との同居世帯」は、「家族の支え」、「単身世帯」では、「自分自身での支え」が高い。今回の回答結果は、2年前の調査結果より「地域社会での支え」より、「自分自身での支え」の回答が多い。
4. 本会では、これまで「地域のコミュニティの考え方」について、年々、希薄化の傾向にあると強調してきたが、「潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割を持つ」58%は、2年前の調査結果とほぼ同じ回答結果で、約6割は、期待する回答結果となったが、年齢別の回答では、70～74歳61%と高いが、75～79歳57%、65～69歳56%、80歳以上53%と回答は低い。否定的回答では、80歳以上46%と高い回答である。
5. 「これから、参加してみたい地域活動」の回答では、回答の多い順に、趣味や特技を生かせる活動31%、高齢者を対象にした健康交流の活動25%、特にない15%、世代間交流ができる学習活動8%、身近な地域防災に関する活動・環境美化に関する活動7%、世代間交流ができる文化伝承活動6%。性別では、女性は男性よりも、高齢者を対象にした健康交流の活動」の回答が9%多い。年齢別では、加齢化とともに、「高齢者を対象にした健康交流の活動」が多い回答。

#### 4. 高齢者の地域との関わり（実態）に関する項目（設問 18. ～設問 20.）

##### 設問18. 人生を振り返り「あの時はよかった」と感じる内容

設問18	内容	人数 男性		人数 女性		人数 全体		割合
		人数	割合	人数	割合	人数	割合	
あなたの人生を振り返り、あの時は良かった	健康・スポーツ・レクリエーション	155	19%	159	15%	314	17%	
	家族との和やかなひととき	161	20%	225	22%	386	21%	
	子どもたちの元気な姿	148	18%	196	19%	344	19%	
	近所同士の交流	40	5%	92	9%	132	7%	
	趣味仲間との活動	113	14%	131	13%	244	13%	
	町内会活動・行事	34	4%	35	3%	69	4%	
	自治会活動・行事	33	4%	27	3%	60	3%	
	老人クラブ	12	1%	11	1%	23	1%	
	婦人会	0	0%	14	1%	14	1%	
	P T A	6	1%	10	1%	16	1%	
	地域のお祭り	30	4%	37	4%	67	4%	
	環境美化活動	9	1%	3	0%	12	1%	
	運動会	10	1%	12	1%	22	1%	
	青年団(青年会・青年学)	8	1%	6	1%	14	1%	
	高齢者との交流(居場所)	16	2%	32	3%	48	3%	
	消防団	11	1%	0	0%	11	1%	
	学習・教養活動	6	1%	12	1%	18	1%	
	子供会	7	1%	6	1%	13	1%	
	その他( )	9	1%	12	1%	21	1%	
	特にない	10	1%	12	1%	22	1%	
	小計	818		1032		1850		

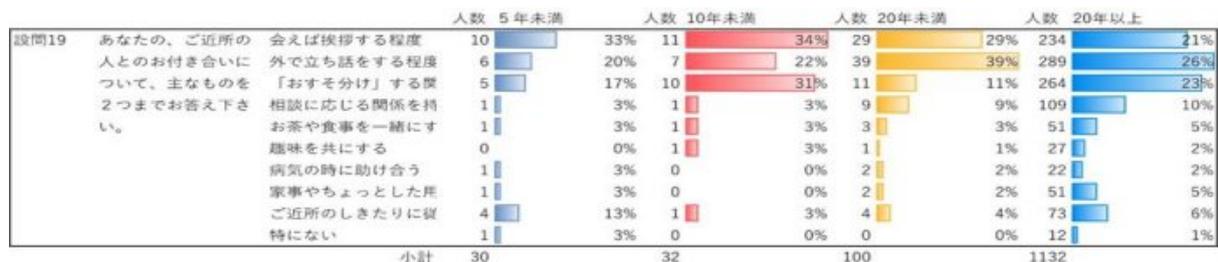
- ✓ 「人生を振り返り、あの時は良かったと感じる内容」を全体的に回答の多い順に主な内容をまとめると、①家族との和やかなひととき21%、②子どもたちの元気な姿19%、③健康・スポーツ・レクリエーション活動17%、④趣味仲間との活動13%、⑤近所同士の交流7%、⑥町内

会活動・地域のお祭り各4%, ⑦自治会活動・行事・高齢者との交流(居場所・サロン・ミニデイサービス等)各3%等となっている。家族→仲間→ご近所→コミュニティ活動が描かれている。年齢別で回答の多い内容をまとめると、65~69歳・70~74歳・75~79歳は家族・子供, 80歳以上は健康・スポーツ。

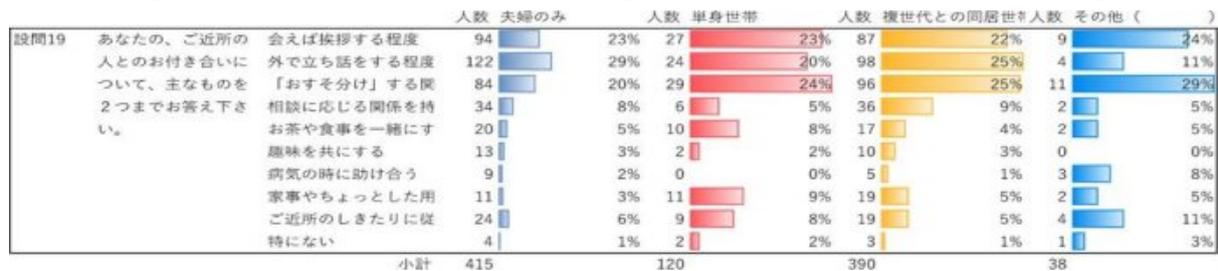
設問19. 近所の人との付き合いについて



- ✓ 「ご近所の人との付き合い」の回答状況は、全体的な回答結果で多い順に、外で立ち話をする程度26%, 会えば挨拶する程度・「おすそ分け」する関係を持つ22%, 相談に応じる関係を持つ9%, ご近所のしきたりに従う6%, お茶や食事を一緒にする・家事やちょっとした用事も頼める関係を持つ4%, 趣味を共にする・病気の時に助け合う2%, 特にな1%。性別では、男性は、会えば挨拶する程度→外で立ち話をする程度, 女性は、外で立ち話をする程度→「おすそ分け」する関係を持つ→会えば挨拶する程度と違う回答である。年齢別では、大きな変化はない。



- ✓ 居住年数別の回答の多い内容は、5年未満「会えば挨拶する程度」、10年未満「会えば挨拶する程度」、20年未満「外で立ち話をする程度」、20年以上「外で立ち話をする程度」



- ✓ 世帯状況別では、夫婦のみ「外で立ち話をする程度」→「会えば挨拶する程度」、単身世帯では、「おすそ分けする関係」→「会えば挨拶する程度」、複世代との同居世帯では、「外で立ち話をする程度」、「おすそ分けする関係」共に高い回答結果である。

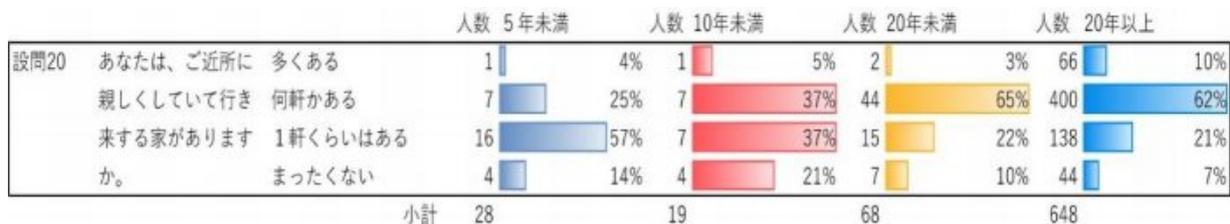


- ✓ 職業別では、共通して「外で立ち話をする程度」が一番多い回答である。自営業・収入を伴う仕事をしていない層では、次に「おすそ分けする関係」、会社・団体役員は「外で立ち話をする程度」、無職・パート・アルバイトは、「会えば挨拶する程度」と少し変化のある回答である。

設問20. ご近所に、親しくして、行き来する家の有無



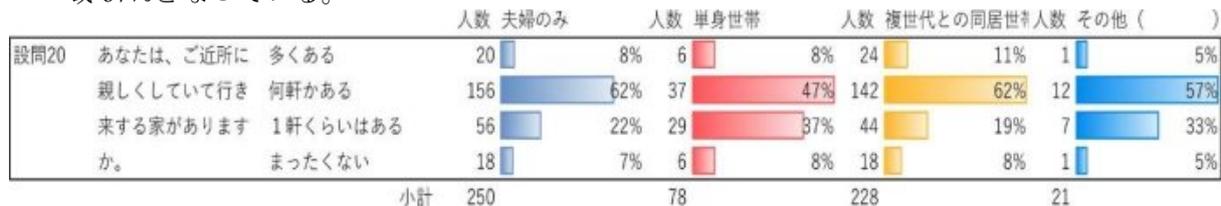
- ✓ 「ご近所に、親しくして、行き来する家はあるか」の全体的な回答結果は、「何軒かある」60%、「多くある」9%、「一軒くらいはある」23%、「まったくない」8%。性別では、女性は、多くある10%に対して、男性は8%である。まったくないは、男性9%に対して、女性は7%とご近所との関わりは、女性の方が積極的である回答結果である。年齢別では、加齢化とともに、ご近所との関わりは多い回答である。



- ✓ 居住年数別の考察では、10年未満では、「全くない」21%と多く、次に5年未満14%、20年未満10%、20年以上7%の回答結果である。



- ✓ 地域別回答状況のご近所との関係の多い回答では、西部地域は76%、東部地域69%、中部地域67%となっている。



- ✓ 世帯状況別で、ご近所との付き合いの多い回答順では、複世代との同居世帯73%、夫婦のみ70%、単身世帯55%と、単身世帯の地域での孤立の傾向が伺えるが、一軒程度はある37%と自助努力は伺える。

★ 2020年度調査結果との比較考察

No.	2020年度	2022年度
1	何軒かある 67%	何軒かある 60%
2	1軒くらいはある 16%	1軒くらいはある 23%
3	多くある 11%	多くある 9%
4	まったくない 9%	まったくない 8%

- ✓ ご近所との付き合いを2年前の調査結果と比較すると、「多くある」の回答傾向は、2年前が78%、今回の回答結果は、69%で、その開きは9%となっている。厳しいコロナ禍が少なからず伺えるように感じられる。



- ✓ 世帯状況からの調査結果からは、「単身世帯」の地域参加の傾向が「夫婦のみ」、「複世代との同居世帯」よりも多いことが伺われる。

★ 2020 年度調査結果との比較考察

No.	2020 年度		2022 年度	
1	時々参加している	49%	時々参加している	54%
2	積極的に参加している	36%	積極的に参加している	36%
3	ほとんど参加していない	15%	ほとんど参加していない	10%

- ✓ 地域の行事や活動への参加状況を 2 年前の調査結果と比較すると、今回の調査結果からは、僅かではあるが地域参加の傾向を示している。

設問22. 参加している内容

設問22	人数	男性	人数	女性	人数	全体	
設問21で「①積極的に参加している」「②地域の祭り時々参加している」と答えた人に伺います。あなたが、主に「参加している内容」を2つまでお答え下さい。							
① 清掃活動	141	24%	167	24%	308	24%	
② 地域の祭り	60	10%	67	10%	127	10%	
③ P T A ・子ども会活動	5	1%	9	1%	14	1%	
④ 防災訓練	131	23%	165	24%	296	23%	
⑤ 健康スポーツ関連行事	25	4%	23	3%	48	4%	
⑥ 文化関連行事	14	2%	17	2%	31	2%	
⑦ 奉仕活動	37	6%	58	8%	95	7%	
⑧ 交通安全活動	9	2%	7	1%	16	1%	
⑨ 自治会・町内会活動	137	24%	145	21%	282	22%	
⑩ 趣味活動	15	3%	25	4%	40	3%	
⑪ その他( )	2	0%	8	1%	10	1%	
小計	576		691		1267		

- ✓ 地域の行事や活動に参加している主な内容を回答の多い順にあげると、①清掃活動 24% ②防災訓練 23%、③自治会・町内会活動 22%、④地域の祭り 10%、⑤奉仕活動 7%、⑥健康・スポーツ関連行事 4%、⑦趣味活動 3%等である。

★ 2020 年度調査結果との比較考察

No.	2020 年度		2022 年度	
1	清掃活動	24%	清掃活動	24%
2	防災訓練	23%	防災訓練	23%
3	自治会・町内会活動	22%	自治会・町内会活動	22%
4	地域の祭り	10%	地域の祭り	10%
5	奉仕活動	7%	奉仕活動	7%
6	文化関連行事	3%	健康・スポーツ	4%
7	交通安全活動	2%	趣味活動	3%

- ✓ 今回の回答結果と 2 年前の調査回答結果と大きな開きはない。高齢者の立場から、「防災訓練」、「清掃活動」、「自治会・町内会活動」、「地域の祭り」、「奉仕活動」への参加傾向は変わらないように伺える。

設問23. 「地域づくり」の参加呼びかけがあったときの参加の有無

設問23	人数	男性	人数	女性	人数	全体	
あなたは、「地域づくりを進める活動に呼びかけがあれば参加協力呼びかけが参加したくない	53	16%	60	14%	113	15%	
「ぜひ参加したい」	248	74%	316	74%	564	74%	
「参加したくない」	35	10%	52	12%	87	11%	
小計	336		428		764		

- ✓ 「地域づくりへの参加の呼びかけ」について、全体的な調査結果は、「呼びかけがあれば参加してもよい」74%と高い。「ぜひ、参加したい」15%で、前向きな参加の回答が約9割と高い。「参加したくない」11%。性別では、女性よりも、男性の参加の意向が高い。

設問23	人数	65歳～69歳	人数	70歳～74歳	人数	75歳～79歳	人数	80歳以上	
あなたは、「地域づくりを進める活動に呼びかけがあれば参加協力呼びかけが参加したくない	25	14%	38	15%	33	20%	18	13%	
「ぜひ参加したい」	145	78%	187	74%	112	68%	97	71%	
「参加したくない」	15	8%	27	11%	19	12%	21	15%	
小計	185		252		164		136		

✓ 年齢別の回答結果では、加齢とともに消極的傾向が伺える。

		人数 東部地域	人数 中部地域	人数 西部地域
設問23	あなたは、「地域づくりを進める活動に参加協力の呼びかけがあれば参加したくない」と答えた人	43 18%	40 10%	30 23%
	ぜひ参加したい	179 76%	284 74%	89 68%
	参加したくない	12 5%	61 16%	12 9%
	小計	234	385	131

✓ 地域別回答結果では、「東部地域」94%、「西部地域」91%、「中部地域」84%。設問21の「地域行事への参加状況」結果の「東部地域」94%、「西部地域」90%、「中部地域」88%に関連した回答結果である。

★ 2020年度調査結果との比較考察

No.	2020年度	2022年度
1	呼掛けがあれば参加してもよい 64%	呼掛けがあれば参加してもよい 74%
2	ぜひ参加したい 28%	ぜひ参加したい 15%
3	参加したくない 8%	参加したくない 11%

✓ 「前向きな参加意向がある」回答は、2年前と今回の調査結果との開きは約3%低い結果となっている。

設問24. 参加したい活動の内容

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
設問24	設問23で「①ぜひ参加したい②呼びかけがあれば参加してもよい」と回答の方にお伺いします。主な活動を2つまでお答え下さい。	48 9%	85 14%	133 12%
	子育てや子どもの見守り	65 13%	96 15%	161 14%
	高齢者や障害者への支援	90 17%	151 24%	241 21%
	健康づくりや生きがい	22 4%	36 6%	58 5%
	介護者や介護を必要とする方への支援	68 13%	49 8%	117 10%
	自治会・町内会等運営の参画	59 11%	27 4%	86 8%
	防災・防犯等生活安全に関する活動	44 9%	36 6%	80 7%
	世代を超えた趣味・地域行事等交流活動	39 8%	54 9%	93 8%
	青少年健全育成活動	3 1%	5 1%	8 1%
	高齢者同士の見守り・介護者や介護を必要とする方への支援	20 4%	37 6%	57 5%
	生活改善（環境美化・緑化・まちづくり等）	19 4%	14 2%	33 3%
	生産就労（農園芸・飼育・シルバー人材センター）	11 2%	9 1%	20 2%
	教育・文化活動（学習会・子供会育成・郷土芸能等）	17 3%	13 2%	30 3%
	その他（ ）	1 0%	1 0%	2 0%
	特になし	10 2%	14 2%	24 2%
	小計	516	627	1143

✓ 回答の多い内容順にあげると、①健康づくりや生きがいづくり 21%、②高齢者や障がい者への支援（買い物・家事・移送等）14%、③子育てや子どもの見守り 12%、④自治会・町内会運営の参画 10%、⑤防災・防犯等生活安全に関する活動・世代を超えた趣味・地域行事等交流活動 8%、⑥スポーツ・文化・レクリエーション等の活動 7%、⑦高齢者同士の見守り・介護者や介護を必要とする方への支援 5%、⑧生活改善（環境美化・緑化・まちづくり等）・教育・文化活動（学習会・子供会育成・郷土芸能等）3%、⑨生産就労（農園芸・飼育・シルバー人材センター）・特になし 2%、⑩青少年健全育成活動 1%。

設問25. 参加したくない理由について

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
設問25	設問23で「③参加したくない」と答えた人	6 12%	16 24%	22 19%
	時間がない	8 16%	9 13%	17 15%
	興味がない	10 20%	6 9%	16 14%
	自分に合った活動がない	11 22%	15 22%	26 22%
	健康でない	1 2%	2 3%	3 3%
	費用が掛かる	0 0%	1 1%	1 1%
	近くに活動がない	0 0%	3 4%	3 3%
	情報が入らない	3 6%	2 3%	5 4%
	一緒に活動する人がいない	3 6%	3 4%	6 5%
	参加のきっかけがない	7 14%	10 15%	17 15%
	参加したいと思わない	0 0%	0 0%	0 0%
	社会の動きが気になる	0 0%	0 0%	0 0%
	その他（ ）	0 0%	0 0%	0 0%
	小計	49	67	116

- ✓ 「参加したくない」11%の回答者の全体的な主な意見は、「健康でない」22%と多い回答。次に、「時間がない」19%、「興味がわからない」「参加したいとは思わない」各15%、「参加のきっかけがない」5%、「一緒に参加する人がいない」4%、「費用が掛かる」「情報が入らない」各3%、「近くに活動がない」1%。

### 【高齢者の地域参加の動向に関する考察】

1. 高齢者の日頃の地域参加の状況については、2年前の調査結果より、「前向きに参加している」回答で、約9割と高い回答結果であった。男性よりも、やや女性の方が消極的傾向の回答であった。加齢とともに、地域参加状況は消極的傾向がみられる。また、就労状況にある高齢者層では、就労そのものが地域参加の回答と受けとめることが出来る。世帯状況からの調査結果から、「単身世帯」の地域参加の傾向が「夫婦のみ」、「複世代との同居世帯」よりも多いことが伺われた。県内の地域別地域参加の動向は、「東部地域」94%、「西部地域」90%、「中部地域」88%の回答結果であった。
2. 高齢者の「地域の行事や活動に参加している主な内容」を回答の多い順にあげると、①清掃活動24%、②防災訓練23%、③自治会・町内会活動22%、④地域の祭り10%、⑤奉仕活動7%、⑥健康・スポーツ関連行事4%、⑦趣味活動3%等である。
3. 「地域づくりへの参加の呼びかけについて」、2年前より、やや「参加したくない」11%の回答結果であったが、全体的には、「呼掛けがあれば参加してもよい」74%と高い。「ぜひ、参加したい」15%を合わせると、前向きな参加の回答が約9割と高い。日頃の地域参加の現状と同様、女性よりも、男性の参加の意向が高い。
4. 「参加したい活動の内容」の多い順に、①健康づくりや生きがいづくり21%、②高齢者や障がい者への支援（買い物・家事・移送等）14%、③子育てや子どもの見守り12%、④自治会・町内会運営の参画10%、⑤防災・防犯等生活安全に関する活動・世代を超えた趣味・地域行事等交流活動8%、⑥スポーツ・文化・レクリエーション等の活動7%、⑦高齢者同士の見守り・介護者や介護を必要とする方への支援5%、⑧生活改善（環境美化・緑化・まちづくり等）・教育・文化活動（学習会・子供会育成・郷土芸能等）3%、⑨生産就労（農園芸・飼育・シルバー人材センター）・特になし2%、⑩青少年健全育成活動1%。
5. 「参加したくない」全体的な意見は、「健康でない」22%と多い回答。次に、「時間がない」19%、「興味がわからない」「参加したいとは思わない」各15%、「参加のきっかけがない」5%、「一緒に参加する人がいない」4%、「費用が掛かる」「情報が入らない」各3%、「近くに活動がない」1%。いかにして、住み慣れた身近な地域において、高齢者としての地域参加について、積極的に、つなぐ・つながる地域全体の仕組みづくりを課題としたい。

## 6. 高齢者の地域環境に関する項目（設問26.～設問32.）

### 設問26. 一番安心（ホッと）できる場所について

設問26	あなたの一番安心（ホッと）できる場所についてお伺いします。	人数 男性		人数 女性		人数 全体	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
	家庭・家族	292	82%	368	81%	660	81%
	ご近所	4	1%	8	2%	12	1%
	友人との付き合い	33	9%	48	11%	81	10%
	趣味仲間	22	6%	16	4%	38	5%
	地域の「居場所・サロン」	3	1%	6	1%	9	1%
	利用している福祉施設	0	0%	4	1%	4	0%
	社会教育施設(公民館・)	0	0%	1	0%	1	0%
	その他( )	0	0%	4	1%	4	0%
	なし	4	1%	0	0%	4	0%
	小計	358		455		813	

- ✓ 「あなたの一番安心（ホッと）できる場所」について、全体的な回答結果の多い順にまとめると、①家庭・家族81%、②友人との付き合い10%、③趣味仲間5%、④ご近所1%。性別では、女性は、①家庭・家族81%、②友人との付き合い11%、③趣味仲間4%、④ご近所1%、⑤地域の「居場所・サロン」・利用している福祉施設1%。男性は、①家庭・家族82%、②友人との付き合い9%、③趣味仲間6%、④ご近所・地域の「居場所・サロン」・なし各1%。男性の社会性は、女性よりも弱い傾向が伺える。年齢別では、加齢とともに、「家族・家庭」の

回答は少ない。その分、「地域の居場所・サロン」や「趣味の仲間」(利用している福祉施設)に移行している傾向が伺える。

		人数 65歳～69歳	人数 70歳～74歳	人数 75歳～79歳	人数 80歳以上
設問26	あなたの一番安心(ホッと)できる場所についてお伺いします。	158	232	133	113
	家庭・家族	82%	84%	79%	76%
	ご近所	2	4	4	2
	友人との付き合い	20	29	15	15
	趣味仲間	9	5	11	11
	地域の「居場所・サロン」	1	2	1	5
	利用している福祉施設	0	1	1	2
	社会教育施設(公民館・)	0	0	1	0
	その他( )	1	0	2	0
	なし	1	2	1	0
小計		192	275	169	148

		人数 夫婦のみ	人数 単身世帯	人数 複世代との同居世帯	人数 その他( )
設問26	あなたの一番安心(ホッと)できる場所についてお伺いします。	219	47	202	21
	家庭・家族	84%	60%	82%	95%
	ご近所	5	2	3	0
	友人との付き合い	19	18	25	0
	趣味仲間	12	7	13	0
	地域の「居場所・サロン」	3	2	1	0
	利用している福祉施設	1	1	0	1
	社会教育施設(公民館・)	0	1	0	0
	その他( )	0	0	0	0
	なし	1	0	1	0
小計		260	78	245	22

✓ 世帯状況別の回答結果では、「家庭・家族」は、夫婦 84%、複世代との同居世帯 82%と高い回答であるが、単身世帯 60%で、「友人との付き合い」23%、「趣味仲間」9%と広がりを見せている。

#### 設問27. 地域で困った状態の時、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービスについて

		人数 男性	人数 女性	人数 全体
設問27	今後、あなたが地域において、困った状態の時、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービスについて、主なものを3つまでお答え下さい。	240	300	540
	見守り・声掛け(安否確認)	29%	30%	29%
	移動支援	9%	9%	9%
	同行(買い物・通院等)	10%	11%	10%
	配食	4%	4%	4%
	子育て支援	1%	1%	1%
	ゴミ出し	5%	6%	6%
	調理	1%	2%	2%
	定期的なふれあいサロン	4%	7%	6%
	掃除(草取り)	4%	6%	5%
	災害時の手助け	14%	10%	12%
	話し相手	6%	7%	7%
	趣味・特技の援助	2%	0%	1%
	簡単な介助・介護	5%	4%	5%
	洗濯	1%	0%	0%
	小動物の世話	5%	0%	0%
	お墓の掃除	1%	0%	0%
	簡単な修理	5%	1%	1%
	その他( )	0%	0%	0%
小計		813	1022	1835

✓ 「今後、あなたが困った状態のとき、地域において、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービス」の全体的での多い回答順の結果では、①見守り・声掛け(安否確認) 29%、②災害時の手助け 12%、③移動支援・同行(買い物・通院等) 各 10%、④話し相手 7%、⑤ゴミ出し・定期的なふれあいサロン(居場所) 各 6%、⑥掃除(草取り)・簡単な介助・介護各 5%、⑦配食 4%、⑧調理 2%。性別、年齢別は、全体の回答と傾向は同じである。

#### ★ 2020年度調査結果との比較考察

No.	2020年度	2022年度
1	見守り・声掛け(安否確認) 29%	見守り・声掛け(安否確認) 28%
2	災害時の手助け 15%	災害時の手助け 12%
3	移動支援 10%	移動支援, 同行(買い物, 通院等) 各 10%
4	同行(買い物, 通院等), 話し相手 各 8%	話し相手 7%
5	定期的なふれあいサロン(居場所) 7%	ゴミ出し 定期的なふれあいサロン(居場所) 各 6%
6	ゴミ出し・簡単な介助・介護 各 5%	掃除(草取り), 簡単な介助・介護 各 5%
7	掃除(草取り)・配食 各 3%	配食 4%

- ✓ 今回の全体の回答の多い順は、2年前の回答結果と、ほぼ同様な回答傾向である。回答が一番多い内容は、いずれも「見守り・声掛け（安否確認）」、次に「災害時の手助け」、3番目は「移動支援」、「同行（買い物・通院等）」、「話し相手」、「ゴミ出し」、「定期的なふれあいサロン（居場所）」、「掃除（草取り）」、「簡単な介助・介護」の順である。

設問28. ともに、助け合う地域づくりに向けて、どのような環境があれば活動しやすいか

設問28	あなたとともに助け合う地域づくりに向けて、どのような環境があれば活動しやすいか。主なものを2つまでお答え下さい。	人数 男性	人数 女性	人数 全体			
	地域が抱えている課題	125	21%	123	17%	248	19%
	一緒に活動する人（仲間）	203	33%	266	37%	469	35%
	一人ひとりが気軽に参加できる環境	163	27%	236	32%	399	30%
	団体や活動に関する情報が提供されていること	13	2%	16	2%	29	2%
	長期休暇や労働時間の短縮	8	1%	1	0%	9	1%
	ボランティア休暇など	23	4%	31	4%	54	4%
	退職などにより、時間的なゆとりができること	28	5%	25	3%	53	4%
	公共的な活動を積極的に評価し、支援する仕組みがあること	45	7%	26	4%	71	5%
	どんな環境でも活動したいとは思わない	1	0%	4	1%	5	0%
	その他（ ）		0%		0%	0	0%
	小計	609		728		1337	

- ✓ 「ともに、助け合う地域づくりに向けて、どのような環境があれば活動しやすいか」の全体的回答結果は下記のとおりである。（ ）内のパーセンテージは、2020年度の回答結果である。

- ① 一所に活動する人（仲間がいること） … 35% (34%)
- ② 一人ひとりが気軽に参加できる活動の機会があること … 30% (35%)
- ③ 地域が抱えている課題の情報が提供されていること … 19% (16%)
- ④ 公共的な活動を積極的に評価し、支援する仕組みがあること … 5% (3%)
- ⑤ ボランティア休暇等、公共的な活動に参加しやすい仕組みがあること … 4% (3%)
- ⑥ 退職等により、時間的なゆとりができること … 4% (2%)
- ⑦ 団体や活動に関する情報の入手が容易い … 2% (6%)
- ⑧ 長期休暇や労働時間の短縮で余暇が増えること … 1% (0%)
- ⑨ どんな環境でも活動したいとは思わない … 0% (3%)

性別及び年齢別、世帯状況別回答結果は、全体的な回答と同じ傾向である。女性は、男性より「一緒に活動する人（仲間）がいること」を望んでいる回答である。

設問29. あなたの地域に「地域ぐるみで見守り活動」の支援体制はあるか

設問29	あなたの地域には、「地域ぐるみで見守り活動」をする支援体制はありますか。	人数 男性	人数 女性	人数 全体			
	地域が一体となって積極的に取り組んでいる	22	7%	55	13%	77	10%
	ある程度地域住民が取り組んでいる	142	42%	153	36%	295	39%
	どちらかという消極的な取り組みである	68	20%	68	16%	136	18%
	ほとんど活動はしていない	43	13%	32	8%	75	10%
	わからない	61	18%	114	27%	175	23%
	小計	336		422		758	

- ✓ 「地域に、地域ぐるみで見守り活動の支援体制はあるか」の全体的回答結果は、「地域が一体となって積極的に取り組んでいる」10%、「ある程度地域住民が取り組んでいる」39%で、「見守り体制がある」回答は約5割であるが、「どちらかという消極的な取り組みである」18%、「ほとんど活動はしていない」10%、「わからない」23%の回答から、地域全体への広がりではなく、関係者の認識の範囲内にとどまっている傾向にある。特に、年齢別、居住年数別から見ると、加齢とともに、十分な受け止めではない回答傾向である。世帯状況別では、単身世帯の回答では、支援体制の認識は55%と高いが、複世代との同居世帯49%、夫婦のみ46%の意識であるが、「わからない」の回答はいずれも約3割の回答である。

設問29	あなたの地域には、「地域ぐるみで見守り活動」をする支援体制はありますか。	人数 65歳～69歳	人数 70歳～74歳	人数 75歳～79歳	人数 80歳以上				
	地域が一体となって積極的に取り組んでいる	18	10%	22	9%	18	11%	14	10%
	ある程度地域住民が取り組んでいる	71	39%	105	43%	65	40%	44	33%
	どちらかという消極的な取り組みである	41	22%	48	19%	28	17%	12	9%
	ほとんど活動はしていない	17	9%	23	9%	17	10%	16	12%
	わからない	37	20%	49	20%	35	21%	49	36%
	小計	184		247		163		135	

★ 2020年度調査結果との比較考察

No.	2020年度		2022年度	
1	ある程度地域住民が取組んでいる	43%	ある程度地域住民が取組んでいる	39%
2	わからない	22%	わからない	23%
3	どちらかというと消極的な取り組みである	15%	どちらかというと消極的な取り組みである	18%
4	地域が一体となって積極的に取り組んでいる	9%	地域が一体となって積極的に取り組んでいる	10%
5	ほとんど活動はしていない	9%	ほとんど活動はしていない	10%

✓ 「地域に、地域ぐるみで見守り活動の支援体制はあるか」の2年前の調査と今回の調査結果は、ほとんど変化がない状況である。どちらかと言えば、意識が薄れている傾向にある。大きな社会の変化の中で、さらにその必要性を地域全体に啓発していく課題が浮き彫りになっている。

設問30. 今の地域で暮らし続けるために必要と思われることは何か

設問30	内容	人数 男性		人数 女性		人数 全体	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
	あなたが、今の地域で暮らし続けるために必要と思われることについて、主なものを3つまでお答え下さい。						
	コミュニティ組織体制	126	16%	100	11%	226	13%
	ご近所のささえあい	200	25%	249	26%	449	26%
	身近な人の見守りと助	120	15%	180	19%	300	17%
	相談体制や情報提供の	69	9%	84	9%	153	9%
	福祉人材の養成	27	3%	29	3%	56	3%
	NPO法人等志縁団体に	17	2%	18	2%	35	2%
	身近なところでの「居	70	9%	103	11%	173	10%
	企業・学校・地域社会	16	2%	24	3%	40	2%
	市行政の地域への積極	59	7%	55	6%	114	7%
	福祉団体の地域への積	27	3%	23	2%	50	3%
	地縁団体（自治会・町	74	9%	78	8%	152	9%
	その他（	4	0%	0	0%	4	0%
	小計	809		943		1752	

✓ 本会の27年間の調査活動で、初めて設問とした「今の地域で暮らし続けるために必要と思われること」の全体的結果の多い回答順は、

- ① ご近所の支え合い … 26%
- ② 身近な人の見守りと助言体制 … 17%
- ③ コミュニティ組織体制の確立 … 13%
- ④ 身近なところでの「居場所」の開設 … 10%
- ⑤ 相談体制や情報提供の確立 … 9%
- ⑥ 地縁団体（自治会・町内会）の積極的な福祉活動の取り組み … 9%
- ⑦ 市町行政の地域への積極的な歩み寄り … 7%
- ⑦ 福祉人材の養成 … 3%
- ⑦ 福祉団体の地域への積極的な歩み寄り … 3%
- ⑧ 企業・学校・地域社会への積極的な歩み寄り … 2%
- ⑧ NPO法人等志縁団体による困りごと支援体制 … 2%

高齢者の身近な生活圏域におけるつながる関係を強く求めている結果が伺える。生活圏域での住民個々の語れる環境を、いかに住民相互の努力で築き上げあげられるか、また、自治会・町内会運営における地域環境づくりと行政等の地域への歩み寄りも浮き彫りになっている。年齢別では、加齢化とともに、居住年数別では、年数が長いほど、さらに、身近な環境でのつながりを求めている結果である。

		人数 夫婦のみ	人数 単身世帯	人数 複世代との同居世帯	人数 その他（ ）	
設問30	あなたが、今の地域で暮らし続けるために必要と思われることについて、主なものを3つまでお答え下さい。	コミュニティ組織体制	75 14%	18 11%	68 13%	2 4%
	ご近所のささえあい	161 29%	37 23%	127 24%	15 31%	
	身近な人の見守りと助言体制	86 16%	35 22%	91 17%	12 24%	
	相談体制や情報提供の充実	65 12%	13 8%	41 8%	3 6%	
	福祉人材の養成	16 3%	1 1%	21 4%	2 4%	
	NPO法人等志願団体に身近なところでの「居企業・学校・地域社会	11 2%	2 1%	10 2%	0 0%	
	市行政の地域への積極	49 9%	23 14%	50 10%	5 10%	
	福祉団体の地域への積極	16 3%	2 1%	13 2%	1 2%	
	地縁団体（自治会・町	21 4%	10 6%	37 7%	3 6%	
	その他（	13 2%	7 4%	14 3%	3 6%	
	その他（	36 7%	13 8%	50 10%	3 6%	
	小計	551	161	523	49	

- ✓ 「世帯別状況」からの回答結果から、多い回答順に比較すると、
- 「夫婦のみ」
    - ① ご近所の支え合い…29%
    - ② 身近な人の見守りと助言体制…16%
    - ③ コミュニティ組織体制の確立…14%
    - ④ 相談体制や情報提供の充実…12%
  - 「単身世帯」
    - ① ご近所の支え合い…23%
    - ② 身近なところでの居場所の開設…14%
    - ③ 身近な人の見守りと助言体制…22%
    - ④ コミュニティ組織体制の確立…11%
  - 「複世代同居世帯」
    - ① ご近所の支え合い…24%
    - ② 身近な人の見守りと助言体制…17%
    - ③ コミュニティ組織体制の確立…22%
    - ④ 身近なところでの居場所の開設…14%
- 「ご近所の支え合い」、「身近な人の見守りと助言体制」は共通であるが、「単身世帯」では、「コミュニティ組織体制の確立」よりも、具体的な「居場所」の開設を求めている回答である。

### 設問31. 生活上困ったときの「有償サービス」の利用について

		人数 男性	人数 女性	人数 全体	
設問31	あなたが、生活上困ったときの「有償サービス」支援の利用についてお伺いします。	大いに利用したい	33 10%	51 12%	84 11%
	説明を聞いたうえで前向きに考えたい	216 65%	272 63%	488 64%	
	少し戸惑う	47 14%	58 13%	105 14%	
	利用しない	7 2%	9 2%	16 2%	
	わからない	29 9%	43 10%	72 9%	
小計	332	433	765		

- ✓ 「生活上困ったときの“有償サービス”支援の利用」の全体的な回答結果では、①「説明を聞いた上で前向きに考えたい」64%、②「少し戸惑う」14%、③「大いに利用したい」11%、④「わからない」9%、⑤「利用しない」2%。福祉活動の「有償化」は、今後さらに住民への啓発を通じて充実していく課題がある。

		人数 65歳～69歳	人数 70歳～74歳	人数 75歳～79歳	人数 80歳以上	
設問31	あなたが、生活上困ったときの「有償サービス」支援の利用についてお伺いします。	大いに利用したい	21 11%	23 9%	23 14%	14 10%
	説明を聞いたうえで前向きに考えたい	117 64%	173 68%	98 58%	86 64%	
	少し戸惑う	20 11%	34 13%	31 18%	15 11%	
	利用しない	4 2%	4 2%	3 2%	4 3%	
	わからない	22 12%	19 8%	13 8%	15 11%	
小計	184	253	168	134		

- ✓ 年齢別では、どの領域も、「大いに利用したい」、「説明を聞いたうえで前向きに考えたい」を合わせると、7割以上が前向きな回答結果である。これからの福祉のあり方を更に、地域社会に啓発していく課題がある。

設問32. 地区住民同士がひと時を過ごす「居場所」の運営について

		人数 男性	人数 女性	人数 全体	
設問32	あなたの地域において、地区住民同士がひと時を過ごす「居場所」はどのような運営（環境）であればよいと思いますか。	169	241	410	51%
	自由にいつでも出入りできる環境	169	241	410	51%
	ボランティアによる計画的な運営	24	31	55	7%
	自治会・町内会等の主体的な活動としての運営	71	45	116	14%
	利用者が主体となって運営できる環境	24	20	44	5%
	利用者同士で仲間づくりができる環境	56	98	154	19%
	福祉施設が地域貢献活動として運営する環境	7	18	25	3%
	その他（ ）		0	0	0%
小計		351	453	804	

- ✓ すでに、家庭・家族機能の大きな変化とともに、県内各地において、高齢者等の孤立防止、身近な生活圏域における拠点づくりとして、積極的に取り組まれている「居場所」について、今回の調査項目に、あえて取り上げることにした。これまでの「居場所」から、これからの「居場所」のあり方を問い質すことを狙いに「地域において、地区住民同士がひと時を過ごす“居場所”はどのような運営（環境）であればよいか」を回答いただいた。
- ✓ 「高齢者が望む、地域の居場所の運営（環境）」の回答結果は、全体的な考察から見ると、
  - ① 自由にいつでも出入りできる環境 … 51%
  - ② 利用者同士で仲間づくりができる環境 … 19%
  - ③ 自治会・町内会等の主体的な活動としての運営 … 14%
  - ④ ボランティアによる計画的な運営 … 7%
  - ⑤ 利用者が主体となって運営できる環境 … 5%
  - ⑥ 福祉施設が地域貢献活動として運営する環境 … 3%

回答から考察できることは、

- 「語れる、対等で自由な環境が保障されていること」
- 「参加者が主体であり、上下の関係がなく、対等な関係が維持されること」
- 「居場所が参加する住民をつなぎ、共助関係を維持できる」
- 「地縁団体組織で継続的に維持できる運営基盤が保障されていること」

で、「ボランティア主体」、「福祉施設等への依存」の回答は低い。性別の回答では、女性の方が男性より柔軟で自由な環境を求めている。年齢別の回答状況は全体の回答とほぼ同じである。

### 【高齢者の地域環境に関する考察】

1. 高齢者が、安心（ホッと）できる場所（環境）は、「家庭・家族」が一番で、次に「友人との付き合い」「趣味仲間」「ご近所」と回答している。男性の社会性は、女性よりも弱い傾向にあり、年齢別では、加齢とともに「家族・家庭」から「地域の居場所・サロン」や「趣味の仲間」「利用している福祉施設」の回答である。また、単身世帯では、「友人との付き合い」「趣味仲間」へと広がりを見せている。
2. 地域において、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービスは、2年前の調査結果と変わりなく、日頃から身近な生活圏域で、見守り・声掛け（安否確認）、移動支援・同行（買い物・通院等）、話し相手、ゴミ出し、定期的なふれあいサロン（居場所）等が求められている結果である。
3. こうした、地域での環境を維持し、持続していくためには、2年前の調査結果と比較すると、「一緒に活動する人（仲間）がいること」が男性よりも女性が多い意見で、「一人ひとりが気軽に参加できる活動の機会があること」と前後の回答結果ではあるが、もっとも多い回答となっている。また、地域が見える化する、「地域が抱えている課題の情報が提供されていること」が挙げられている。今回は、「どんな境でも活動したいとは思わない」回答はなかった。
4. 「地域ぐるみで見守り活動の支援体制はあるか」の認識は、2年前の調査結果より、やや認識が薄れている傾向にはあるが、「ある程度地域住民が取り組んでいる」、「地域が一体と

なって積極的に取り組んでいる」で約5割を占めている。しかし、前回同様、相変わらず、「わからない」2割の回答から見ると、地域全体への広がりではなく、関係者の認識の範囲内にとどまっている傾向にある。年齢別、居住年数別から見ると、加齢とともに、十分な受け止めではない回答傾向である。世帯状況別では、単身世帯の回答では、支援体制の認識は55%と高いが、複世代との同居世帯49%、夫婦のみ46%の意識であるが、「わからない」の回答はいずれも約3割ある。大きな社会の変化の中で、さらに、地域ぐるみの見守りの必要性を地域全体に啓発していく課題が浮き彫りになっている。

5. 高齢者が、住み慣れた身近な生活圏域の「ご近所」で必要と思われる主な内容は、「ご近所のささえあい」、「身近な人の見守りと助言体制」、「コミュニティ組織体制の確立」、「身近なところでの「居場所」の開設」と、「ご近所福祉そのものである。そして、専門性と市民性の融合の視点で「相談体制や情報提供の充実」が挙げられている。

行政と住民との協働の視点では、「地縁団体（自治会・町内会）の積極的な福祉活動の取り組み」「市町行政の地域への積極的な歩み寄り」が浮かび上がっている。いずれにせよ、高齢者の加齢化とともに、居住年数別では、年数が長いほど、さらに、身近な環境での「つながる関係」を強く求めている。「夫婦のみ」、「単身世帯」、「複世代同居世帯」のいずれの「世帯状況別」回答結果からは、「ご近所の支え合い」、「身近な人の見守りと助言体制」の回答は高い。しかし、「単身世帯」では、「コミュニティ組織体制の確立」よりも、具体的な「居場所」の開設を求めていることは特記できる回答である。

6. 私たちの地域環境では、これまで、ボランティア活動における定義として、「自発性」「無償性」「連帯性」をもとに地域活動に取り組まれてきた。しかし、社会の仕組みが「介護保険制度の導入」とともに、その認識は大きく変化している。今回の調査の実施において、新たな設問項目として「無償性と有償性」について、高齢者に問いかけることにした。「生活上困ったときの“有償サービス”支援の利用」についての全体的な回答結果では、「説明を聞いた上で前向きに考えたい」と、約6割の回答であったが、「少し戸惑う」14%、「大いに利用したい」11%、「わからない」9%、「利用しない」2%の回答結果である福祉活動の「有償化」については、今後さらに、これからの福祉のあり方を広く地域住民に問いかけ、地域社会全体に啓発していく課題がある。

7. 高齢者の地域環境を問う設問として、「居場所」を取り上げた。すでに、核家族化の時代を迎えて、家庭・家族機能（生み育てる・保護的・福祉的・教育的・情緒安定的・経済的）は、大きく変化をしている。県内各地において、高齢者等の孤立防止、身近な生活圏域における生活圏域の拠点づくりとして、積極的に取り組まれている「居場所」について、今回の調査項目を、あえて取り上げることにした。「これまでの「居場所」から、これからの「居場所」のあり方」を問い質すことを狙いに「地域において、地区住民同士がひと時を過ごす“居場所”はどのような運営（環境）であればよいか」を設問とした。

「高齢者が望む、地域の居場所の運営（環境）」の全体的な回答から考察できることは、「語れる、対等で自由な環境が保障されていること」「参加者が主体であり、上下の関係がなく、対等な関係が維持されていること」「居場所が参加する住民をつなぎ、共助関係を維持できる」「地縁団体組織で、継続的に維持できる運営基盤が保障されていること」で、「ボランティア主体、福祉施設等の依存」の回答は低い。

性別の回答では、女性の方が、男性より、柔軟で自由な環境を求めている傾向にある。

## 7. 「ホッとすると、安心した地域づくり」に関する意見・提言(自由回答)

ここでは、設問 33の「ホッとすると、安心した地域づくり」に関する、自由な意見をまとめた。回想的意見や、現実の意見、これからの託したい意見、身近なご近所から、社会全体からと、幅広い意見が寄せられている。全体で、289件の意見を「年齢別」「性別」でまとめた。「年齢別」では、65～69歳は92件、70～74歳は91件、75～79歳は65件、80歳以上は41件で、若い年代層の意見が多く寄せられた。性別では、「男性」は152件、「女性」は138件の意見をいただいた。

### ➤ 65～69歳 男性 (45)

- 1 あいさつができる空間
- 2 安心した地域づくりに向けて、まちづくり協議会との連携を深めている
- 3 一服できる場所、笑いのある場所
- 4 居場所、定期的に顔を合わせる場所があること（見守りにもつながる）、防災訓練が参加率が高いので、その機会にもっと知り合う内容を入れる
- 5 居場所が提供されること
- 6 今日日本の国家として2,000年続いた日本らしさを見失っていると思います  
特に先の敗戦によるGHQの日本封じの流れを未だに実践している、マスメディア等により、地域コミュニティの日本らしさは失われていると考えます  
この根本的なところに力を入れないと、研修で述べられていた“ご近所福祉”はまだまだ遠いと思います
- 7 偉そうな態度の人が一人でもいれば、まとまらないので不愉快になるだけ
- 8 家族が皆健康
- 9 近所であいさつ、情報交換ができること
- 10 近所とのつながりを大事にする
- 11 高齢化の問題…地域に負担をかけられない
- 12 ご近所で、おすそわけが出来る
- 13 ご近所で農作物を栽培できる環境
- 14 ご近所同士、会えば気軽に立話ができる地域
- 15 子どもの元気な声が聞こえる所
- 16 子どもの通学の安全
- 17 これからの自分の居場所について勉強できた
- 18 三世代がつながり、笑顔と歓声溢れる地域づくりを期待する
- 19 自治会、社協、民生等の分けなく、自治会（町内会）として一つの活動の方が分かり易い
- 20 自分の暮らしを「自立」させたいので、他への援助を考えたい
- 21 女性の井戸端会議で、明るく元気な所
- 22 水害のない地域になるように、治水工事をしてほしい
- 23 好きな事が言える友人がいる
- 24 たよりにされたとき
- 25 地域ごと、差があるので何ともいえない
- 26 地域に居住する人たちが、相互に尊重し相手の弱点を個性として受け止めできる人間集団
- 27 地域に慣れ、顔見知りになること
- 28 地域へ出向いていく活動
- 29 地域を動かす人が育つ場であるで仲間を持つ
- 30 定期/定例的な集まりができる場の運営
- 31 仲間と「わいわいガヤガヤ」といろいろな話をし、酒を飲むとき
- 32 犯罪のない地域
- 33 日頃から、隣近所での挨拶や声掛け、顔の見える関係が構築されている地域
- 34 一人暮らしの家、又は道端で会った時、気軽に話ができる時（あいさつでも）

- 35 貧富の差が大きくないこと、おなじレベルの人たちの集団であること
- 36 本人が必要とするサービスが必要な時に受けられること そのサービスが行政や NPO 法人が中心であること
- 37 地域包括支援センター職員が不足している
- 38 福祉活動で多くの人との交流が出来きている
- 39 福祉の充実
- 40 まだ若いと思っているので、地域に依存する体制に違和感がある
- 41 ルールはあまり作りたくないが、均等に役割を分担するようにしたい
- 42 老人クラブ、自治会等の活動で世代を超えて創り上げる
- 43 若者世代を、しっかりと大人社会が関わりをもつこと
- 44 適度な近所付き合い
- 45 自治会・町内会の動きを、若い世代にわかるように伝えていく工夫

➤ **65～69 歳 女性 (47)**

- 1 「～しなければならぬ」しきたりや慣習が少なく、陰口や噂話がない。
- 2 1 人でも行ける憩いの場があること
- 3 あいさつ運動
- 4 パート暮らしでも、地域の方が気軽に声を掛けてくれる。
- 5 アンケートに回答しながら改めて考えさせていただきました。 何が必要なのか、気軽さ、自然の中で対応することが大切かと思いました。 ハードルが高いと難しいですね。
- 6 家の周辺に空き家がなく、人が住んでいる地域
- 7 居場所の維持管理がしっかりと組織体制づくり
- 8 お互いに思いやれる関係づくり
- 9 大人も子どもも挨拶ができる地域
- 10 改善・改良が進み、前例にとらわれない（前例踏襲が多い）
- 11 家族や知り合いが近くにいること
- 12 気軽に話が出来る地域
- 13 行政、医療、福祉、地域が連携されており、対応ができる地域体制があること
- 14 気楽に地域住民達との関係性が作られる場所があること
- 15 近所同士が仲良く、話合いができる環境
- 16 交流の場所
- 17 高齢化、人口減少社会となる中、「ホッとできる安心した地域は今後ますます重要になると思う
- 18 声を掛け合い、気心が知れた地域
- 19 ご近所さんの素性がはっきりと見えていて、住民が地域での役割をしっかりと認識し、孤独感を感じない生活できる地域づくり
- 20 ご近所福祉の大切さを地域住民一人一人に啓発していくことが大切だと思う
- 21 困った時に、すぐ相談できる、ご近所さんがいたらいい
- 22 困った時に、直ぐに相談できる場所があること
- 23 困りごと、悩みごとを気軽に相談できる窓口（自治会、民生、包括の充実）
- 24 コロナ禍でなかなか集まって何かすることが難しい 「ご近所福祉」身近なところから歩みだしたい
- 25 四季が感じられる環境
- 26 自治会・町内会活動が充実して、みんなが協力的に参加すること
- 27 自治会・地域住民が声かけをいつでもできる
- 28 自治会が地域住民の状況を把握している
- 29 住民の方々のお困りごと等、相談に乗れる人材がいること
- 30 女性が意見を言い行動をするのが普通である（出る杭は打たれることがまだまだある）
- 31 頼れる友人（1 人暮らしの時、鍵など預けられる人）

- 32 地域で、気軽に会話ができ、気軽に活動に参加できる環境
- 33 地域の公民館をオープンにして、自由に利用できるようにして、夜7時から8時ころカギをかけて1日終わると感じる、いつでもウエルカムにしたらどうか
- 34 地域の人々との交流ができ、気軽に出入りできる居場所があること
- 35 となり近所と仲がよい
- 36 隣近所とのコミュニティー充実
- 37 仲間がいること
- 38 何があっても、近所の人と助け合える町を作る
- 39 認知症になっても普通に生活ができる（周りの人の見守り）
- 40 一人暮らしでも、気軽に声をかけてもらえる地域
- 41 一人暮らしの高齢者を孤立させないため近所の声掛け
- 42 見守り、声掛けのできる人が身近にいる体制があること
- 43 気軽に声を掛けられるご近所
- 44 世代間交流が出来る地域
- 45 挨拶が飛び交う地域
- 46 近所同士での声掛け
- 47 若い世代に、地域のことをしっかりと教えられる家庭環境

### ➤ 70～74歳 男性(53)

- 1 安心できるコミュニティー（全国どこでも）づくりは、子供の教育と経済の安定化の取り組みが必至である
- 2 イベント・祭・etc.・アルコールの力も必須
- 3 笑顔があふれる地域
- 4 お気に入りのコースを歩くこと
- 5 核家族ではなく、昔のように大家族で生活できれば、家族の協力も得られ、各自がさみしい思いをしなくても済むと思う
- 6 風通しの良い環境を一人一人が意識して育てる
- 7 気軽におすそわけが出来る地域
- 8 決まった日時に、集まり、話をしたり、ゲーム、レクなどがみんなとできること
- 9 近所同士での井戸端会議が見える地域
- 10 近所同士の支え合い
- 11 近所の子供を気軽に呼び合い、会話ができる地域
- 12 近所の皆さんと話し合える（交流できる）居場所づくりを進めたい
- 13 近所の人との会話を大切にしたい
- 14 現在は、コロナの影響で人との接触ができず、何もできない
- 15 現状の問題点を洗い出し、対策を実施していくことが、ホッとできる安心した地域づくりで重要である
- 16 交流館が近くなのでありがたい。
- 17 高齢者になると人的交流が少なくなるので、地域での居場所づくりの工夫
- 18 高齢夫婦がのんびり散歩できる地域
- 19 気軽な声掛け
- 20 そこに行くと、誰かが絵を描き、ラジオ体操をし、太極拳をしている、毎週、若者がギターをひき歌っている
- 21 コストの削減により、コミュニティーの崩壊（自治会活動への助成、学校の縮小による地域の疲弊など）がないように！ コストとは税金の少なくなることによる支出の削減
- 22 コミュニケーションが取れている地域であるとうれしい
- 23 自治会・町内会活動に感謝する心を持った住民の集まり
- 24 自助・共助・公助の確立

- 25 自然に顔と名前がわかる地域での見守り
- 26 社会保障の将来を見える化  
上記の結果として、ともに助け合う地域づくりや積極的に種々の活動参加ができる人材が増えると思う
- 27 心配事や困りごとなどをサポートできる身近なところ
- 28 生活支援ニーズを満たすことが必要  
「安心」を基盤に、「日常的家事」、「外出」、「交流」、「非日常的家事」、「ちょっとしたこと」を備えていることが必要。
- 29 全員が挨拶できる安心した地域（理想）
- 30 互…お互い様
- 31 互近助（ゴキソジョ）
- 32 他人の生活を尊重する人たちに囲まれる地域
- 33 楽しく無理せず、みんなで自然に協力し合える地域社会を築きたい!
- 34 地域に相談する身近な人がいること
- 35 地域福祉計画などの具体化と住民一人ひとりの意識改革
- 36 地域役員を強制しない また、運動会など役員の負担になる行事を少なくする
- 37 小さい子どもを通じて親、年寄が一体感が持てる安全な地域
- 38 近…遠くの親戚より向こう三軒両隣
- 39 町内（近所）の人達が顔を合わせた時、笑顔で話ができる地域である事
- 40 町内で早くコミュニケーションを高めたい
- 41 出会い、ふれあい、わかちあえる地域。
- 42 20年前は、地域がまとまっていたが、今は、なかなか声をかけることもない 家の中で過ごすことが多い
- 43 誰もが気軽に話し合いたい ウォーキングコース
- 44 野原・自家用車の中・テントの中・シニアハウス（個室）・昔の二間長屋（木造）・空気の良い田舎
- 45 負担の無い集合体作り
- 46 ホットとする地域で安心して終活する!
- 47 ほとんどが顔見知り
- 48 道ですれ違いの時に、誰とでも気軽にあいさつできること
- 49 見守り。
- 50 見守り活動を通じて困ったことの相談を受けて、少しでも明るい地域づくりを目指したい
- 51 役割分担がしっかりできる人達の組織 →他の人や地域への信頼と責任がある人
- 52 要支援の身なので、行動には限りがある 座る椅子があちこちにあればホットとする
- 53 若い世代が地域を知る努力が必要
- 54 私の居住する地域は 100 戸ほどの一戸建て住宅の地域 年々高齢化が進んでいるので、お互いに声を掛け合い何かの時はお互い助け合う地域にしなければと思っている
- 55 我地域では、自治会が積極的に取り組んでいるので継続してほしい
- 56 ゴミ捨て支援／買い物支援／パンク修理／包丁とぎ／屋根の見積もり支援等実施中
- 57 子どもたちが大きな声を出して遊んでいる姿を見ると喜びを感じる

### ➤ 70～74 歳 女性 (38)

- 1 これから、1,2 人家族、1 人きりの生活になっていく それでも、安心できる地域でいてほしい
- 2 アンケートに答えながら、自身の地域活動を担う側と受け取る側の双方を意識しなければいけないと感じ参考になった
- 3 安全が確保できること
- 4 いずれは、利用者側として、どのような社会になってもらいたいかを念頭に、今後のボラン

- ティア活動に取り組んでいきたいと感じた
- 5 いつでも気軽に集れる場所があること
  - 6 今生活の中で息抜きができる
  - 7 ホールに受け入れてくださり、対等な関係がある
  - 8 屋外での顔の出し合い、活動等、人のいきあう賑やかな社会
  - 9 お互いに声を掛け合う
  - 10 外出時の声掛け等
  - 11 行政、社協、地区社協、自治会、民生委員、地域ボランティア等が一体となり、安定した地域づくりを確立してほしい
  - 12 近所とか友人には困りごととは相談したくない 公共の相談場所を作って宣伝してほしい
  - 13 高齢者自身が、外部との関わりを拒否する高齢者も増えている 又、高齢者を不安にさせる事件なども増えており、気軽に外部との接触がしづらくなっている 気軽に集まることができる場所を作っていくことが望ましい
  - 14 高齢者や独り者、若者がいつも明るく過ごせて気軽に声を掛けて助け合う地域
  - 15 ここの地域は、まだおすそわけをしている地域である おいしいものがあると食べてみてと持っていく 今は、まだコロナ禍で立話もままならない 会えば井戸端会議に早変わり、早くそうなることを祈る
  - 16 殺伐とした昨今、近所での声掛けでコミュニティを維持
  - 17 支援・被支援者のお互いに顔が見える関係にあること
  - 18 自治会長、組長他役員がきっちり選出され、地域のために活動してくださる地域で住んでいれば、安心できてほっとできる
  - 19 自由に出入りする環境
  - 20 住民同士気軽に声掛け、挨拶ができる
  - 21 心配事が解消できること
  - 22 積極的に声掛けをする人を欲しい（年配者は自分からの発信はしない）
  - 23 地域住民が、なるだけ多く顔を合わせる。若い人や高齢者すべての年代の方々が顔を見たことがあれば、地域の人だとわかり、安心感が生まれる 防災訓練等で顔を合わせるのが良いと思う
  - 24 地域のおかれた状態を皆が理解すること
  - 25 地域の人とあいさつをし、顔なじみになること
  - 26 ちょっとした困りごとを相談できる関係
  - 27 歳をとったら、気の合う人だけで過ごしたい
  - 28 仲間づくりができる環境
  - 29 何でも、話が出来る友人が周りにいてくれるありがたさを、いつも感じている
  - 30 ホットする居場所があること
  - 31 身近に、一人暮らしの方の死去が多い 民生委員の活動に期待する
  - 32 公民館活動に気軽に参加できること ときに、相談し協力できる環境を望むことができる地域 実の妹が不自由なため、頑張っていきたい
  - 33 皆が仕事を分けて協同作業する
  - 34 もしもの時に、声をかけ助け合えるご近所さんがあること
  - 35 もっと、もっと、住民同士で声を掛け合い、笑顔を交わす
  - 36 老若男女みんなが楽しめる場所があるとよい
  - 37 若者たちが住みたくなるような魅力ある地域になること  
（子どもたちのにぎやかな声を聞くとホットする）
  - 38 我が家は、4世代同居だが、近所には若い世代と同居の家族が少ない  
若い世代が暮らし合う地域を期待する

➤ **75～79 歳 男性 (25)**

- 1 15 号台風時、私の地域では、雨による被害はなかったが、災害の時の不安が大きい
- 2 70 歳代でも、敬老会役員に気持ちよく賛同してくれる人がいる地域
- 3 運動公園で、出会った人との会話ができる環境。
- 4 行政支援の充実
- 5 区画整理が実施され新旧住民の垣根がなくなった時、新しいコミュニティが生まれる
- 6 敬老対象者の増加に比例して、敬老会役員希望者も増える地域
- 7 公民館がもう少し気楽に活用できるようにしてほしい。
- 8 高齢者を集め 100 歳体操のボランティア活動をして 8 年目を迎える 25 人程度のボランティアで毎週 40 人余りの高齢者が体操をして帰ってゆきます。自分の老後を垣間見るようで興味深い
- 9 ご近所で気がねなく、いつでも声を掛け合う世代を超えた地域
- 10 ご近所とのささえあい
- 11 この地域づくりには個人情報取得が前提となるが、これを阻む風潮が最大のネックであり寂しい限りだ
- 12 世界状況下、日本の政治は何をしようとしているのか、大きな不安を感じる
- 13 全体的に安全は保障されている地域
- 14 他人と気軽に挨拶ができる地域であること
- 15 地域の人達と触れ合い交流が多いこと
- 16 近場に、生活に必要な施設があること（商業、医療）
- 17 都市化されても緑地が多くあること
- 18 まず家庭環境が良いこと
- 19 友人、仲間達と遊びや旅行に行くこと
- 20 友人が居ること
- 21 老人クラブがなくなり、同年代の笑顔で暮らせ地域安全推進員と、20 年以お互い誰もが、心を拓くことが出来る地域づくり」に「見守っているよ」「頼りにしているよ」と会話を交わしている
- 22 面白いことは、みんなで笑い合えることが出来ることい合える地域
- 23 5 年間は、居場所を楽しみにする活動であってほしい
- 24 安全安心な街づくりを啓発している
- 25 率先して役員になる人がいない、地域を守る意識が少ない、市民主体の街づくり交流がなくなった

➤ **75～79 歳 女性 (32)**

- 1 60 代の頃は、町内にふれあいサロンを仲間と作ったり、毎週楽しく活動しましたが、母の介護で活動から離れ、今年に入って夫の介護で地域活動に参加するゆとりがなく、今一番ホッとする場所は家庭 夫婦 2 人でのいる時間が幸せで安心の場です
- 2 挨拶、会釈くらいしましょう
- 3 あまり干渉されず、自宅でのんびりと暮らすことができる、見守りなどがいいなと思っています
- 4 大人が会うと声をかけ、名前を呼んでくれた
- 5 顔を合わせた時、誰とでも笑顔で挨拶ができる
- 6 顔を合わせた会話の日常的にできる地域
- 7 気を遣わずに雑談できる仲間がほしい
- 8 普段の生活の中で、さりげない会話出来る環境
- 9 近所同士でお茶を飲みながら世間話出来る地域
- 10 近所同士の挨拶
- 11 健康で、仲間と趣味を続けられる環境

- 12 高齢者が多いこの町で、安心した地域作りは難しく、自分の家庭を守ることで精一杯です  
時間的にも、経済的にも、精神的にもゆとりがありません 寂しいですが、これが現実です
- 13 ご近所さん同士が気楽におしゃべりできたとき
- 14 ご近所の声掛けが必要
- 15 個人情報保護が守られる地域
- 16 あの時代、子どもも大人も地域もホッとしていたと思います
- 17 困ったとき、何処へ相談すべきか分らない  
自分はずきあいが苦手
- 18 主人がいない 80 歳ですが、自分のことは自分でできますが、手助けは必要です  
これからのことが心配です
- 19 地域のみんなが笑える居場所づくり
- 20 近くに買物できる所をほしい
- 21 近くに息子家族がいるので、用事は頼める
- 22 町内会・自治会、ボランティア活動情報の共有
- 23 常に、挨拶できる地域
- 24 隣近所の親同士が子供を交えて良く話をしている
- 25 なるだけ、自立した生活をしたい（無理?）
- 26 日頃の声掛け
- 27 身近なところで明るく生活できる
- 28 昔の生活で、例えば、縁側、隣組、あめ玉、おさがり（姉妹の）、紙芝居、かるたとトランプ<sup>o</sup>、丸  
いテーブル  
近所のおじちゃんおばちゃん 懐かしい光景
- 29 昔の懐かしい映画を見たい
- 30 若い世代が、地域に目を向けられるゆとりある地域づくり
- 31 顔見知りを多く作る
- 32 地域包括を活用・相談する

➤ **80 歳以上 男性 (21)**

- 1 気軽に挨拶できる環境にある
- 2 ほとんど、自治会・町内会組織で福祉活動が行われていない
- 3 人と人との絆ができていること
- 4 月 1 回の公会堂での居場所は、人とのコミュニケーションが出来てよい
- 5 外国人の交通ルール無視が多い
- 6 自宅で、退職した人が集う機会や、高齢者が安心して住める高齢者専用のアパートがあれば  
よい
- 7 コミュニケーションが取れる「居場所」は、小学校の空き教室を使用して、子どもたちとの  
触れ合いを深める場所をつくる
- 8 地域活動を維持していくための後継者育成
- 9 隣近所の人達と家族ぐるみのコミュニケーションを強める
- 10 隣組のつながりを強く
- 11 にっこり笑って、みじかな会話ができる地域に
- 12 毎日を健康で過ごし、互いに、その町が助け合って暮らせる所であってほしいと思います
- 13 安心し、気づかいのない社会をつくる
- 14 老人会・グランドゴルフ・パークゴルフで健康づくり
- 15 若い世代の地域理解
- 16 いろいろな情報を知ることができる
- 17 伝統行事も、若い世代が「めんどくさい」で継承されていない
- 18 声掛けが容易にできること

- 19 見守り隊がいて、子どもたちは安心です
- 20 自治会、町内会等相談できるような環境であること  
転勤族が多く、向こう三軒の結びつきが希薄
- 21 人の噂や嫌がらせのない地域であってほしい

### ➤ 80歳以上 女性 (21)

- 1 2021年度の子供対象の調査結果に関連して、福祉に関心を持つ子を育てる活動を期待する
- 2 あまり個人の生活に立ち入らない
- 3 移動するのにも困る地域です 高齢者の移動手段がしっかり確立できれば
- 4 今高齢者はどこに行っても居場所がない
- 5 思いやりと寄り添い
- 6 家族がまず、しっかりした支え合いが出来ること
- 7 近所の人と仲良く助け合える地域
- 8 声掛けが常時できる環境になったとき
- 9 ご近所が、日頃から自由に話が出来るとよい
- 10 子どもたちの朝の挨拶。
- 11 困ったときに、気軽に相談できる人・場所がある地域
- 12 静かに見守ってほしい
- 13 世界平和は、住まう地域や学校から
- 14 誰もが取り残されないようなコミュニティづくり
- 15 月一回のバスでの買い物とても楽しみ
- 16 同世代の仲間と久しぶりに笑顔で和える時（集会）
- 17 野良猫がいなくなったことは、近所全体が明るくなった
- 18 ホットする居場所が欲しい
- 19 友人が居場所を開所し提供してくれるので、毎日自由に活用させていただき感謝している
- 20 若い世代が、もう少し高齢者と向き合える努力
- 21 私のできることは、近所のゴミ拾い、犬の糞の片付けなどで通る人の笑顔を見守る

## 8. 調査協力者から、「調査票」とともに、寄せられた意見

このたびの「調査研究事業」には、県内各地域の活動実践者をはじめ、福祉施設・団体等、幅広い領域からの協力により、ここに調査を取りまとめることが出来た。「調査票」とともに寄せられた「手紙」には、調査協力者が、取りまとめるに当たり、ご苦勞されたことや、このたびの調査事業への思いや期待する尊い意見が含まれていた。ここでは、寄せられた意見の中から、その一部を集約して紹介をする。

- 1 これまで、仲間とともに、60代頃は、高齢社会に対する夢や希望がいっぱいあり、地域で協力し合えば、きっと楽しく有意義な活動が出来ると信じて、地域活動「ふれあいサロン」に取り組んできましたが、参加していた会員も皆高齢になり、施設に入所されたり、デイサービスに通所される方、伴侶が亡くなって自宅にこもる方も多く、参加人数も減り、ここ3年間は、コロナ禍下、今は、休会状態です。主人の入院生活から、退院後、今は、介護生活が始まっています。この年代になると、一日一日夫婦二人が無事に過ごすことが精一杯です。笑顔で挨拶を交わすのがやっとです。「ホットする、安心した地域づくり」の企画運営に楽しく関わった時代が懐かしいです。
- 2 このたび、依頼を受けた「ホットする、安心した地域づくりその意識と実態調査」は、今の時代、大切な取り組みです。知り合いの協力のもと、調査票を記入しながら、一つ一つをみんなまで話題にしてのひと時でした。
- 3 調査票を手にししながら、自分の生活のこと、ご近所のこと、地域社会のことを振り返ること

が出来ました。

人任せでは、いい地域は出来ないこともわかるのですが、どうしても、だれかに託す考え方が強くなっていきますが、この機会に、地域全体のこととして、積極的に仲間呼びかけていきたいと思えます。

- 4 施設利用者の皆さんにも、回答をお願いしました。過去の地域の話が出てきました。
- 5 今回の調査は、65歳以上の皆さんを対象とした調査でしたので、お願いする方を探すのに少し苦労しました。調査票に答えている間に、「字が小さくて・・・」「たくさん問題があるので疲れた、一休みして・・・」「説明をしてほしい・・・」等、いろいろありましたが、なんとか回答していただきました。
- 6 コロナ感染防止で、地域内の行事や集会活動は中止となり、調査をお願いするタイミングがなかなか難しい状況でした。「出会い、交流、つながり・・・」といった言葉が、ここ最近聞こえない状況です。  
こうした、厳しい地域社会の次の時代を思い、仲間の方々に、調査票の記入をお願いしました。
- 7 長引く、厳しいコロナ禍下に加えて、台風15号の被災等、落ち着かないこの頃です。  
こうした、状況の中での調査の意義も理解しながら、協力を呼び掛けていきました。10枚の調査票を、だれにお願いできるかと、少し工夫をしながら、9枚回答いただきました。1枚は、個人で、主催者に送付したとの報告でした。(個人的に、同じ時期に、調査票が、本会宛に届いた。)
- 8 台風15号の被災地への支援活動に取り組んでいます。「災害ボランティアセンター」を立ち上げました。  
日が経つにつれて、新たな課題に取り組んでいます。
- 9 毎回、体操を一緒にしている仲間に、調査の協力を呼び掛けました。後期高齢者となりました。
- 10 少子高齢社会が進行している中、ますます「ホッとする、安心した地域づくり」が求められています。
- 11 80歳を超えて、地域活動を、後輩に引き継ぐことが出来ました。
- 12 88歳を迎え、地域活動から退くこととしました。多くの学びに感謝します。自分史を綴っています。
- 13 貴会のこれまでの「調査報告書」で多くの学びをしています。引き続き、活動に期待します。



2022年7月23日 第2回公開型研修会で高齢者問題を議論中

## 第4章 調査のまとめ

### 1. 本会の「福祉文化実践」のプロセスから高齢者の声を「地域づくり」へ

「阪神淡路大震災」1年後、日本福祉文化学会初代会長 故一番ヶ瀬康子先生から、「静岡で福祉文化現場セミナーをやってほしい」と飛び込んできた「学会主催・福祉文化現場セミナー」。

学会が当時、重要な事業として取り組まれていた「現場に学ぶ福祉文化」を、静岡県域の仲間約70名程に呼びかけ賛同を得たうえで、浜松市南区「浜松こども園」荒岡正憲氏の全面的な支援のもと、「静岡発 みんなで語ろう福祉文化を二十一世紀の礎に…人間らしい豊かさをめざして、いま 文化としての福祉を語る」をセミナーテーマに「第11回学会現場セミナー」は、全国各地から400名もの参加者を迎えて開催することができた。

県内外の事例を紹介し合いながら、地域性を踏まえた、地域づくりの重要性を福祉文化の視点で共有し合う「災害と福祉文化」、「働く人たちと福祉文化」、「環境と福祉文化」、「高齢者と福祉文化」、「障害者と福祉文化」の4つの分科会と基調講演等研究協議を深めた。

このセミナーに係った仲間のうち、高校生から先輩市民の40名余がその後、静岡県の地域性を活かし、身近な地域課題を世代や領域を超えて研究討議できる活動集団を立ち上げようと議論を続け、1996年9月、市民活動・志縁団体として、ここに「静岡福祉文化を考える会」が誕生した。その後、セミナー開催実現に関わった有志40名が本会発足につながる。

本会が結成してから、4年後には、「第18回学会現場セミナー～ねむの木学園宮城まり子さんと福祉文化を学ぶ」を開催（全国各地から250名参加）した。さらに、その後、3年後（2002年度）に「第13回日本福祉文化学会全国大会静岡大会」の要請があり、その後、学会事務局と連携を図りながら、実現に向けて努力を重ねた。

2002年11月30日・12月1日の2日間、裾野市、裾野市社会福祉協議会、社会福祉法人富岳会の全面的協力のもと、人々が暮らす生活圏域の会場を交渉し、裾野市の全面的支援の基、「裾野市市民文化センター」（全館貸し切り/社協職員・施設職員・行政職員運営参加）において、全国各地から650名余の参加者が「富士山麓 いのちとくらしによりそう福祉文化の創造と推進」をテーマに熱く議論。そして、静岡県から「福祉文化の火」を消すことなく県内外に発信しようと、本会の活動は、地域課題、とりわけ、「足元の福祉」「ご近所福祉」「長寿者が安心して暮らせる地域づくり」を活動テーマに「静岡県福祉文化研究セミナー」も、細々とではあるが、活動の柱として「第21回セミナー」実現し、今日に至る。

本会は、「地方発 福祉文化の創造」を追求し、「福祉文化」を共有化する市民活動集団、男性の積極的な参加、そして、異業種交流集団ともいえる特色を持ちながら、現在では20名の会員により、福祉文化実践活動に取り組み、27年の歩みとなる。

厳しいコロナ禍下、一体どのように展開することが出来るだろうかと不安を持ちながらも、「専門性と市民性の融合」「公開型地域総合型学習の企画と実践」「課題解決に向けたプロセス重視」の3つの活動基調を基に、「第1の柱立て：啓発学習事業—静岡発 福祉文化の創造をめざし、地域総合型学習を通して、県内各地の実践活動に学ぶ」「第2の柱立て：活動のプロセスを重視し、協働による地域づくりを検証する」「第3の柱立て：調査研究活動を通して、地域ニーズの把握をもとに地域づくりを提言する」この3つの柱立てにより今日まで、一貫した展開をしている。

中でも、「静岡発 福祉文化の創造」を目指した実践活動の大きな柱立ての一つに、その時代の地域社会を取り巻く様々な福祉課題を「調査テーマ」にした「調査研究活動」に取り組み、その分析結果を、県内各方面での研修会や本会の公開型研修会などで公表し、世代を超えた「地域総合型学習」を通じて問題提起をし、県民一人ひとりの意識改革に努めてきた。これまでの調査研究活動を振り返ると、

- 1997年度 1. 「共働きに関する調査」
- 1998年度 2. 「私たちにとって、地域とは何か—その1—意識と実態調査」
- 1999年度 3. 「私たちにとって、家族とは何か調査」
- 2000年度 4. 「父親に関する調査」

- 2001 年度 5. 「ボランティア活動実践者意識調査」
- 2002 年度 6. 「大人を対象とした生きがいと就労に関する意識調査」
- 2003 年度 7. 「青少年の生きがいに関する調査」
- 2004 年度 8. 「地域とは何かーその 2ー意識と実態調査」
- 2005 年度 9. 「子どもと社会環境に関する調査」(継続調査)
- 2006 年度 10. 「子どもと社会環境に関する調査」(総括)
- 2007 年度 11. 「地域活動と団塊の世代の役割に関する意識調査」
- 2008 年度 12. 「長寿者の生きがい、その意識と実態に関する調査」(静岡県共同募金会助成事業)
- 13. 「日常生活と福祉情報に関する意識調査」(静岡県委託事業)
- 2009 年度 14. 「長寿社会に関する県民意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 2010 年度 15. 「いまこそ地域社会に福祉文化を拓く 生活圏域における支え合いとは何か本音に迫る調査」(静岡県委託事業)
- 2011 年度 16. 「地域と私の居場所その意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 2012 年度 17. 「家族ってなにその意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 2013 年度 18. 「長寿者とつながるホッとするご近所づくりその意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 2014 年度 19. 「豊かに暮らせる地域づくりその意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 2015 年度 20. 「若者の地域参加その意識と実態調査」
- 2016 年度 21. 「ご近所福祉その意識と実態調査」
- 2017 年度 22. 「居場所ってなにその意識と実態調査」
- 2018 年度 23. 「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査」(1)
- 2019 年度 24. 「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査」(2)  
「256 名の子どもたちに聞きました。ホッとする地域ですか?」  
(静岡県社協ふれあい基金助成事業・考察提言)
- 2020 年度 25. 「ご近所福祉その意識と実態調査」(25 周年記念調査研究事業)
- 2021 年度 26. 「福祉ってなに? 461 名の子どもたちに聞きました調査」  
(公益財団法人さわやか福祉財団, 公益財団法人あしたの日本を創る協会助成事業)

と、「26 のテーマ」の調査研究活動に取り組んできた。

今回の調査研究活動は、これまでの調査考察結果から、地域住民相互のつながりやささえあいが弱くなり、地域コミュニティへの関りについて、その意識と実態が希薄化の傾向にあることが浮き彫りになった。

さらに、長引く厳しいコロナ禍下、尊い地域コミュニティの希薄化による「共助」「自助」が衰退傾向にある地域環境の中で、それぞれの地域で暮らす高齢者の意識と実態の現状を把握するとともに、コロナ明けに期待する地域(ご近所)のささえあいの仕組みづくりを検証することとした。

これまで、本会の 27 年間の活動のプロセスで、高齢者から「ご近所のささえあい」の実情を学んできた。

「高齢者宅訪問研修会」では、次のような、若者が数々の尊い学びの意見が寄せられた。

- 長寿者の話を聞き、地域に対する意識が変わった。  
地域の希薄化は時代の流れと思っていたが、長寿者にとって地域のつながりは大切であり、つながれば孤独死も減少する。
- 地域で暮らしていくことの大切さを知った。しかし、施設を利用する長寿者も多くなった。  
ご本人の状況からの施設利用か、家族のことを考えての施設利用か、地域社会のことを考えての施設利用か、個人、家庭・家族、地域社会それぞれのことを十分理解していかなければならない。実際に会って話を聞かないとわからないことが多い。各地域で意見交換することは意義がある。
- 地域で、長寿者の意見を聞く研修会に参加して、若者に託されていることが多いことに気付いた。
- 長寿者と向き合って、改めて「ボランティアとは何か」を読み取ることが出来た。若者は、

- 責任感を持って生活しなければと感じた。
- 勉強したくても出来ない、長寿者の若いころの苦勞を知り、現代では、当たり前のようにできる環境にあることを感謝しなければいけない
  - 長寿者を交えて、世代を超えて、また、普段話すことのない若者の意見を聞き、一人ひとりの捉え方、考え方は違うが、地域や長寿者を取り巻く環境をよくしたいという思いは同じであることを学んだ。
  - 私たちは、もっと積極的に地域に目を向ける必要がある
  - 若者の何気ない行動を生きがいととらえてくれる方がいることなど、若者の存在意義が理解できた。
  - 長寿者との話し合いで、昔に比べて、「ご近所づきあい」が十分に出来ない環境となり、地域のまとまりが薄いと感じた。若者、長寿者、子ども、みんなが共に生きていく、住みやすい地域を目指すために、それぞれの「居場所」を見つけていくことが大切だと感じた。
  - 長寿者の話は、これからの自分たちの問題として取り組む課題だと感じた。
  - 他の長寿者が生活している自宅で話を聞きながら、改めて、自分の祖父母となかなか話すことがない。家族やご近所問題を聞き、これからは、身内の家族としっかりと向き合うことの大切さを教えてくれた。

こうした意見を整理しながら、本会としては、これまでは、漠然と、大人社会（20歳以上対象）の調査活動をしてきたが、このたびの調査活動は、本会結成以来初めて、高齢者対象（65歳以上）に、厳しいコロナ禍下における、高齢者の「生活状況」、「家族・家庭との関わり」、「地域との関わり（意識と実態）」、「地域参加の動向」、「高齢者の地域環境」、「高齢者の思い」等、794名の尊い高齢者からの意識と実態、現状等の意見をいただき、「これからの地域づくりへの提言」としてまとめることが出来た。

なお、本会が取り組む全県域と「焼津福祉文化共創研究会」が取り組む、焼津港地域管内（小地域）の地域性をもとに、それぞれ、地域社会が果たすべき課題を提言することが出来た。

## 2. 均等性のある「基本属性」に基づく考察

市民団体という立場上、こうした全県域における調査研究活動に工夫が求められる。

今回の調査研究事業は、特に「高齢者（65歳以上）」対象とした限定した中で、「地域性」をもとに、さらには、「年代別」においても、「65～69歳」（70～74歳）（前期高齢者層）と「75～79歳」「80歳以上」（後期高齢者層）が、偏りがないようにしていく工夫が求められた。

そして、動員型調査ではなく、日常生活の中で、それぞれの生活を検証していただくことを含めて、「調査」の協力をお願いした。

本会の調査研究活動は、結成以来、関係団体、会員、地域実践者、福祉施設、企業等の協力により、精力的に調査研究活動に取組み、調査にあたっては、実施期間中、十分連携を計りながら展開し、「地域共生社会調査研究部会」を設置（期間中10回開催）し、研究協議をもとに、確実な調査活動の実施、とりわけ、「調査票の作成」「調査票回収」「データ入力」「考察」につなげられるように努力をした。

既に「第2章 サンプル構成/基本属性」で考察しているが、2年前の調査結果との比較を基にまとめると、「性別」では、男性44%（2年前調査結果45%）、女性56%（同54%）と、ほぼ均等化した回答を得た。

「年代別」では、60代25%（同42%）、70代57%（同46%）、80代以上19%（同11%）の回答状況から、70代、80代の高齢者の積極的な回答が寄せられている。回答者の中には、90歳以上の方々も調査に協力をいただいている。また、施設利用者の回答もいただいている。

## 3. 「協働」重視による「調査研究活動」の成果

「足元」、「現場」、「地方発」こそ、「福祉文化の創造」の原点であることを活動の基本として、本会結成以来27年間、積極的に関係団体等との「協働」を基に活動を展開してきた。

このことは、本会の規約にも、「会員だけが求心的・閉鎖的に集うのではなく、広く市民に拓か

れた活動をめざす」と明確に表明している。この27年間の取り組みとして、「協働」に努めてきた点は、

(1) 本会発行の「Our Life」の配信（HP・ブログ）の配布を通じた連携

- |                     |                  |
|---------------------|------------------|
| ① 日本福祉文化学会          | ⑥ 静岡市ボランティア連絡協議会 |
| ② 焼津福祉文化共創研究会       | ⑦ あしたの日本を創る協会    |
| ③ 静岡県コミュニティづくり推進協議会 | ⑧ ふじのくに未来財団      |
| ④ 各社会福祉協議会          | ⑨ さわやか福祉財団       |
| ⑤ 地区コミュニティ団体グループ    | ⑩ 県関連行政          |

(2) 各種助成事業・福祉文化活動を通じた連携

- |               |                     |
|---------------|---------------------|
| ① 静岡県         | ⑥ 静岡市ボランティア連絡協議会    |
| ② 静岡市社会福祉協議会  | ⑦ みずほ教育福祉財団         |
| ③ あしたの日本を創る協会 | ⑧ 静岡県コミュニティづくり推進協議会 |
| ④ 静岡県共同募金会    | ⑨ 日本福祉文化学会          |
| ⑤ ふじのくに未来財団   | ⑩ 焼津福祉文化共創研究会       |

特に、2019年度に結成した「焼津福祉文化共創研究会」とは、この27年間、活動全体の連携を図りながら、小地域福祉文化実践活動への関わりを深めた取り組みをしている。

このたびの調査研究事業「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査」の取り組みは、本会がこれまで27年にわたり取り組んできた「調査研究活動」を、研究会でも活動の主な柱立てとして取り組み、議論を重ね、本会は、県域で実施してきた、過去の同類調査項目等を「焼津福祉文化共創研究会」と共有し、本会は県域を対象に、「焼津福祉文化共創研究会」は、焼津市内の研究会管内（中学校区約5,000世帯）を対象に実施し、「協働」で取り組むことが出来た。

今回の調査研究事業の実施に当たり、「焼津福祉文化共創研究会」に設置した「地域共生社会調査研究部会」に、本会活動も連動した形で取り組み、それぞれ、広域と小地域における調査の取り組みの工夫や課題（具体的な調査の目的、志縁団体との協働、見える化）、今後に向けた課題等を浮き彫りにしながら、調査研究事業を展開し、ここに、調査報告を完成することが出来た。

本会は、「日本福祉文化学会」に団体会員として加盟し、「日本福祉文化学会」のHPと本会ブログ及び「焼津福祉文化共創研究会」のブログとリンクし、これまでの活動や今回の調査活動の取り組みの経過、調査結果データをその都度UPし、県内外に発信を続け、さらに発展する基盤が出来た。

## 4. 高齢者の生活状況の考察からの提言

- (1) 長引く厳しいコロナ禍における、高齢者の暮らし向きは、約6割は「ゆとりがある」が、「ゆとりがない」回答は約4割を占めている。加齢とともにゆとりがない。
- (2) 高齢者の女性は、男性よりも生活上の不安が少ない。75歳～79歳では、生活基盤が確保されているが、不安要素をあげると「自分や家族の健康」や「災害時の対応」、「自分や家族の介護」、長引く厳しいコロナ禍下、「コロナの緊急対応」が浮き彫りになっている。
- (3) 今日では、複雑多様化した地域社会における公的支援体制は確立しているため、段階的には、公的機関の利用に移行しているが、まずは、高齢者自身が、身近な生活圏域で、自ら問題解決できる語れる地域環境を地域社会で構築していくことが望まれる。具体的には、「家族・家庭機能を維持すること」、「日常的に信頼関係を維持できる人間関係の確保」。こうした領域においても、男性の孤立傾向を防ぎ、地域参加できる地域環境を確保する課題がある。
- (4) 孤立化を防ぎ、安心した生活を維持していくための身近な地域社会とつながる高齢者への日常生活の福祉の情報発信は、主には、各マスコミからのルートが挙げられているが、「家庭・家庭機能」を基にしたルートは維持したい。身近な地域の信頼関係の確立とともに、人間関係を維持した友人による情報源は大きなルートである。新たに、高齢者に向けて、浮かびあがってきたのは、「スマホ・パソコン」による情報入手である。古くから、今日まで、依然とし「回覧板」による情報源を活用しているが、確実にその役割を果たせるかの課題は大きい。
- (5) 高齢者を取り巻く生活の安定化（孤立化防止）を図るには、「家族・家庭機能の確立」とともに、

身近な地域社会における、信頼できる人間関係（友人）を維持する友人・仲間の確保の努力は必要である。男性の地域からの孤立化を防ぐ、日頃からの社会参加の努力が求められる。

## 5. 高齢者の家庭・家族の考察からの提言

- (1) 高齢者から、情緒安定・生活の場（環境）としての「休憩安らぎの場」、「家族の団らんの場」、人をつなぐ「家族の絆を強める場」研鑽する「家族が共に成長する場」、包み込む「夫婦の愛情を育む場」。生み育てる場「子どもを産み育てる場」教育的「子どもをしつける場」尽くす場「親の世話をする場」としての「家庭・家族機能」の重要性は明らかである。回答傾向からは「情緒安定的機能」が強く感じられる。
- (2) 「家族と食事をとる」回答が約 8 割強あり、家族との食事のとり方を通じての、高齢者の家族・家庭からの孤立化の傾向は感じられなかったが、約 2 割は単身世帯を含めて、地域社会で支え合う場づくりの課題が挙げられる。
- (3) 「家庭・家族の機能」や「親と子どもそれぞれの自立」と「親子関係」等、多面的に考察する意味から「子どもとの同居」を問い質したところ、約 6 割は「同居を望む」、約 4 割「同居を望まない」であった。女性より、男性の方が同居したい意向が強いことが伺えた。核家族化が進む今日において、改めて、「家族・家庭の機能」を再構築する課題をあげたい。
- (4) 高齢者の立場から、家族を一番必要と感じる時は、「健康に不安を感じたとき」、「身近なことで相談をしたいとき」、「生活に不安を感じたとき」、「今、報告をしたいことが生じたとき」、「経済的な問題が生じたとき」などが浮き彫りになった。これまでの考察から、「家庭・家族のつながり」、「ご近所とのつながり」、「地域社会全体へのつながり」と、プロセス重視のもとで、発展的な問題解決へとつなげていきたい。

## 6. 高齢者の地域との関わり（意識）の考察からの提言

- (1) 「一人でも安心して暮らせる地域」約 7 割、「一人でも安心して暮らせる地域ではない」約 3 割は、居住年数が短い層では、地域へのなじみのなさから安心ではない意識が伺える。長い居住年数だと現状を踏まえたいうえで、安心ではない状況が伺える。
- (2) 地域の人との交流については、「地域の人々との交流は大切である」と総体的意識が伺えるが、厳しい社会状況から、2 年前の調査結果とは、否定的な大きな開きがある。男性よりも女性の方が地域の人との交流の大切さが伺える。身近な地域社会における、地域住民一人一人が、つながる地域づくりを心掛けていくことが求められる。
- (3) 「“超高齢社会”の今の生活の支え」は、「家族の支え」が半数を占めている。2 年前の調査結果より、現在の厳しい社会環境から、「地域社会での支え」より、「自分自身での支え」の回答が多い。
- (4) これまで「地域のコミュニティの考え方」について、年々、希薄化の傾向にあると強調してきた。2 年前の調査結果との比較では、今回の回答では、大きな変化はなく、高齢者からの回答は、「潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割を持つ」が約 6 割であったが、約 4 割は否定的な回答であった。高齢者層が、今後積極的に地域参加し、地域づくりに関わる働きかけが求められる。
- (5) 「これから、参加してみたい地域活動」は、生きがいを感じる「趣味や特技を生かせる活動」、健康維持のための「高齢者を対象にした健康交流の活動」が主にあげられているが、「特にない」の回答が 15%ある。女性は、男性よりも、また加齢とともに、積極的に「健康交流」をあげている。

## 7. 高齢者の地域との関わり（実態）の考察からの提言

- (1) 高齢者の社会的環境の検証を、「時代性」、「地域性」、「文化性」、「個別性」から考察することができる。本会では、このたびの調査実施に当たり、「地域共生社会調査研究部会」において「調査票の組み立て」を協議した際に、こうした厳しい地域環境の今、高齢者のこれまでの生活を振り返りながら、その時代の良さをこれからの地域づくりにどのように活かせるかを

取り上げることとした。

回答結果から、まず、「家族」（家族との和やかなひと時・子どもたちの元気な姿）が一番多い回答状況であった。つぎに、「仲間」（健康・スポーツ・レクリエーション活動・趣味仲間との活動）、そして、ご近所（近所同士の交流）、コミュニティ活動（町内会活動、地域のお祭り、自治会活動・行事、高齢者との交流・居場所、サロン、ミニデイサービス等）が描かれている。加齢とともに、「家族」から「仲間」へと広がっている。

- (2) ご近所の人とのつきあいは、ここでも、男性のご近所との関係は、女性よりも消極的であること伺えた。長引くコロナ禍下、2年前の調査結果より、さらに「ご近所との関係」が希薄化している結果である。

全体的には、「外で立ち話をする程度」「会えば挨拶する程度」が多いが、女性の回答からは、「おすそ分け」「相談に応じる関係を持つ」の回答が寄せられ、近所関係を維持していくうえで、「ご近所のしきたりに従う」意見もあった。「おすそわけをする関係」、「相談に応じる」と、ご近所同士のつながりを感じる意見も伺えた。本会が、今日「福祉文化の視点」で「ご近所福祉」の意義を強調している中で、今回の調査から、改めて、日頃の地域環境の中で、ご近所同士のコミュニケーション（挨拶・声掛け）を心掛けていきながら、共助の地域づくりに向けて、「ご近所福祉の再構築」を課題としたい。

## 8. 高齢者の地域参加の考察からの提言

- (1) 高齢者の日頃の地域参加の状況は、2年前の調査結果より、「前向きに参加している」回答で、加齢とともに、地域参加状況は消極的傾向がみられることから、積極的な地域参加の機会を働きかけたい。就労状況にある高齢者層は、就労そのものが地域参加の回答と受けとめることが出来る。世帯状況から、「単身世帯」の地域参加の傾向は、「夫婦のみ」「複世代との同居世帯」よりも多いことが伺われた。
- (2) 高齢者の「地域の行事や活動に参加している主な内容」は、地縁組織で日頃から参加を呼び掛けている「清掃活動」、「防災訓練」、「自治会・町内会活動」や、「地域の祭り」、「奉仕活動」が多く回答され、生きがいとしての「健康・スポーツ関連行事」、「趣味活動」が挙げられた。
- (3) 「地域づくりへの参加の呼びかけについては、「前向きに参加する」以降の回答が約9割と多い。厳しい地域環境の中で高齢者層は、具体的な活動内容を理解したうえで積極的な参加が期待される。主な参加領域として、生きがいにつながる「健康づくりや生きがいづくり」をはじめ、「高齢者や障がい者への支援（買い物・家事・移送等）」「子育てや子どもの見守り」等身近な福祉活動への関わり「自治会・町内会運営の参画」も活動範囲にあげている。今後における地域活動は、高齢者を排他的にすることなく、社会参加できる地域環境を整えたいうえで、高齢者への働きかけに努めたい。
- (4) 「参加したくない」約1割の回答は、「健康でない」現状を訴えている高齢者が約2割。「参加したいとは思わない」、「興味がわからない」、「参加のきっかけがない」、「一緒に参加する人がいない」、「情報が入らない」、「近くに活動がない」等の回答については、高齢者の社会参加の意義を日頃から働きかけていく地域環境整備（仕組み）を課題としたい。そして、いかにして、住み慣れた身近な地域において、高齢者の地域における役割を明確にして、地域参加を積極的に呼びかけて、つなぐ・つながる地域づくりをめざしたい。

## 9. 高齢者の地域環境に関する考察からの提言

- (1) 高齢者が、安心（ホッと）できる場所（環境）として挙げたのは、「家庭・家族」である。次に「友人との付き合い」、「趣味仲間」、「ご近所」である。加齢とともに「家族・家庭」から「地域の居場所・サロン」や「趣味の仲間」「利用している福祉施設」と変化している。単身世帯では、生活の安定を維持していくために「友人との付き合い」、「趣味仲間」へと自助努力により、広がりを見せている。いかにして「家族・家庭機能」の維持をすることが出来るか、身近な地域社会における課題としたい。
- (2) 地域において、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービスは、日頃から、

家庭・家族を基盤として、さらには、身近な生活圏域で、見守り・声掛け（安否確認）、移動支援・同行（買い物・通院等）、話し相手、ゴミ出し、定期的なふれあいサロン（居場所）等について、高齢者を取り巻く生活課題について、公助依存に終始することなく、日頃から、地域全体で課題解決策を協議する環境を確保していきたい。

- (3) 高齢者の自立を基に、地域ぐるみのささえあいの環境を維持し、持続していくためには、身近なご近所同士で「一緒に活動する人（仲間）がいること」、「一人ひとりが気軽に参加できる活動の機会があること」の回答がもっとも多い。男性より女性の方が積極的な意向を示している。「地域が抱えている課題の情報が提供されていること」の回答は、「地域課題の見える化・わかる化」を問いかけている。
- (4) ここにきて、「地域ぐるみで見守り活動の支援体制はあるか」の認識は、2年前の調査結果より、やや認識が薄れている傾向である。また、相変わらず、「わからない」回答が2割あることから、ごく一部の関係者の範囲内での活動にとどめることなく、世代を超えて、地域全体への広がりへの努力が求められる。
- (5) 高齢者が、住み慣れた身近な生活圏域の「ご近所」で必要と思われることは「ご近所のささえあい」、「身近な人の見守りと助言体制」、「コミュニティ組織体制の確立」、「身近なところでの居場所の開設」と、「ご近所福祉そのものの回答結果であることから、まずは、生活圏域での日頃からの支え合いのできる地域環境を生み出したい。そして、「専門性と市民性の融合」の視点で「相談体制や情報提供の充実」が挙げられている。「行政と住民との協働」の視点では、「地縁団体（自治会・町内会）の積極的な福祉活動の取り組み」「市町行政の地域への積極的な歩み寄り」が浮かび上がってくる。いずれにせよ、高齢者の加齢化とともに、居住年数別では、年数が長いほど、さらに、身近な環境での「つながる関係」を強く求めている。取り巻く環境から考察できることは、「単身世帯」においては、「コミュニティ組織体制の確立」という、広範囲な取り組みよりも、より、身近な生活圏域でのホッとできる、具体的な「居場所」の開設を強く望んでいる。
- (6) 今回の調査の実施において、新たな設問項目として「無償性と有償性」について、高齢者に問いかけた。これまで、ボランティア活動は、「自発性」「無償性」「連帯性」を定義として、地域活動に取り組んできた。しかし、大きく社会福祉を取り巻く状況の変化とともに、介護保険制度の導入等により、「ボランティアの有償化」等が浮き彫りになっている。「生活上困ったときの“有償サービス”支援の利用」についての回答結果では、「説明を聞いた上で前向きに考えたい」と約6割の回答があった。福祉活動の「有償化」は、今後さらに、これからの福祉のあり方を広く地域住民に課題提起をしたい。
- (7) 核家族化の時代を迎えて、家庭・家族機能（生み育てる・保護的・福祉的・教育的・情緒安定的・経済的）は、大きく変化をしている。県内各地において、高齢者等の孤立化防止、身近な生活圏域における生活圏域の拠点づくりとして、積極的に取り組まれている「居場所」について、今回の調査項目を、あえて取り上げることにした。「これまでの「居場所」から、これからの「居場所」のあり方」を問い質すことを狙いに「地域において、地区住民同士がひと時を過ごす“居場所”はどのような運営（環境）であればよいか」を設問とした。「高齢者が望む、地域の居場所の運営（環境）」の全体的な回答から考察できることは、「語れる、対等で自由な環境が保障されていること」「参加者が主体であり、上下の関係がなく、対等な関係が維持されていること」「居場所が参加する住民をつなぎ、共助関係を維持できる」「地縁団体組織で継続的に維持できる運営基盤が保障されていること」で、「ボランティア主体、福祉施設等の依存」の回答は低い。「居場所」の課題として、大きく取り上げられるのは、男性が居場所に来ない、と話題になる。今回の回答でも、女性の方が、男性より、柔軟で自由な環境を求めている傾向が伺えた。本来、「居場所は「家庭・家族」が原点であるとも言われている。今回の調査課題である「ホッとできる安心した地域づくりその意識と実態調査」では、「家庭・家族」から、「地域の家庭化機能」により、いかにして生活圏域における福祉課題に向けて、住民それぞれの立場で課題解決に向けて関わることが出来るかを考える時期を迎えていることを提起したい。

## 【静岡福祉文化を考える会】 2022年度活動経過記録

月/日	経過記録
04/09	➤ 静岡市V連総会出席（古屋氏）、2021年度本会監査実施
04/14	➤ 2022年度会費納入状況確認（10名）、2022年度会員数18名
04/23	➤ 「第211回委員会」開催
04/29	➤ シンヤ印刷工芸社との協議（調査報告書印刷製本見積依頼）
04/30	➤ 焼津福祉文化共創研究会2022年4月（第37回）定例研究会開催
05/03	➤ 本会ブログ更新のための資料確認 （「2021年度決算書」、「2022年度予算書」、「2021年度事業報告書」）
05/08	➤ 「第1回公開型研修会」開催（5月21日）についてマスコミに情報提供
05/09	➤ 「第1回公開型研修会」開催（5月21日）を県内地域実践者30名に案内発送作業実施
05/14	➤ 焼津福祉文化共創研究会2022年5月（第38回）開催
05/21	➤ 「第212回委員会」及び「第1回公開型研修会（全体会）」開催
05/24	➤ 「Our Life 140号」編集・発行、関係方面へメール送信
05/26	➤ 会員に「Our Life 140号」及び「第1回公開型研修会（全体会）」関係資料発送 ➤ 本会運営に関する連絡調整
06/01	➤ 日本福祉文化学会より「福祉文化研究第31号」、「福祉文化通信第93号」届く ➤ NPO法人こころしき（本田弘哉氏）より、かるた活用レポート報告あり ➤ 新たな地域活動の資料をいただく
06/09	➤ NPO法人こころしき（本田弘哉氏）より、7月23日公開型研修会報告用資料届く
06/11	➤ 焼津福祉文化共創研究会2022年6月（第39回）開催
06/17	➤ 焼津福祉文化共創研究会に「2022年度（公財）さわやか福祉財団助成事業」採用決定連絡有
06/20	➤ 静岡市社会福祉協議会より、本会を「2022年度県知事表彰」に推薦する旨の連絡有 （6月23日締め切り）
06/21	➤ 静岡市社会福祉協議会へ、「2022年度県知事表彰」に関する書類を提出
06/23	➤ 静岡県社会教育委員全体研修会において、本会の結成以来今日までのプロセスと調査活動紹介
06/30	➤ 第2回公開型研修会に関するマスコミ対応及び関係方面へ案内文書発送準備作業
07/01	➤ 焼津福祉文化共創研究会の「みんなで創る福祉を学ぶ講座」に赤い羽根助成金決定 この講座を本会として「協力」することとする
07/04	➤ 第2回公開型研修会参加呼びかけ実施（30名に郵送）
07/09	➤ 焼津福祉文化共創研究会助成事業関連資料作成（講座・調査研究事業） 併せて、本会本会調査研究事業も関連づけて取り組む ➤ 焼津福祉文化共創研究会2022年7月（第40回）開催 （本会調査研究事業の協働について了解）
07/23	➤ 「第213回委員会」及び「第2回公開型研修会」開催
07/25	➤ 「Our Life 141号」編集・発行、関係方面へメール送信 ➤ 日本福祉文化学会へ情報提供
07/28	➤ 本会のブログのアクセス件数増加傾向あり
07/30	➤ 「第1回地域共生社会調査研究部会」開催
07/31	➤ 日本福祉文化学会中部東海ブロックへ活動状況報告
08/06	➤ 「第2回地域共生社会調査研究部会」開催
08/08	➤ 静岡福祉文化を考える会「調査個票」組み立て作業実施
08/20	➤ 焼津福祉文化共創研究会主催「みんなで創る福祉を学ぶ講座」に協力 ➤ 焼津福祉文化共創研究会2022年8月（第41回）開催
08/25	➤ 静岡福祉文化を考える会「調査個票」完成し、発送作業実施
08/29	➤ 沼津市民生委員児童委員協議会研修会にて本会活動紹介と調査協力呼びかけ
08/31	➤ 「第33回日本福祉文化学会全国大会京都大会」（オンライン）開催の案内有、本会会員に案内
09/03	➤ 「第3回地域共生社会調査研究部会」開催
09/17	➤ 焼津福祉文化共創研究会2022年9月（第42回）開催

09/19	➤ 静岡福祉文化を考える会「調査個票」回収開始, データ入力依頼実施
09/20	➤ 焼津福祉文化共創研究会発行「みんなで創る福祉を学ぶ講座報告書」を本会関係方面に配布
10/01	➤ 「第4回地域共生社会調査研究部会」開催
10/05	➤ 「公益財団法人愛恵福祉支援財団」へ「助成申請書」をPCにて手続き実施
10/08	➤ 焼津福祉文化共創研究会 2022年10月(第43回)開催
10/10	➤ 「Our Life 142号」発行, 関係方面へメール送信
10/15	➤ 「2022年度コミュニティレッジ」において, 「若者発 近所福祉かるた」の誕生と活用方法紹介 また, 「2022年度調査研究事業」の取り組みについて紹介
10/17	➤ 「若者発 近所福祉かるた」に関する問い合わせ有(コミュニティレッジ受講者), 対応
10/23	➤ 「第33回日本福祉文化学会全国大会京都大会」(オンライン)開催
10/25	➤ 「第21回福祉文化研究セミナー」開催(11月26日)案内実施(30名)
10/31	➤ 本日をもって「調査票」回収終了, 本格的なデータ入力作業とクロス集計へ移行
11/05	➤ 「第5回地域共生社会調査研究部会」開催
11/12	➤ 焼津福祉文化共創研究会 2022年11月(第44回)開催
11/26	➤ 「第214回委員会」及び「第21回福祉文化研究セミナー」開催
12/03	➤ 「第6回地域共生社会調査研究部会」開催
12/17	➤ 「第7回地域共生社会調査研究部会」開催 ➤ 本日をもって調査考察作業終了, 調査報告書編集作業へ移行
12/21	➤ 「公益財団法人愛恵福祉支援財団」へ「助成決定通知書」到着
12/24	➤ 焼津福祉文化共創研究会 2022年12月(第45回)開催 ➤ 「焼津福祉文化共創研究会通信 No.40」発行 ➤ 「Our Life 143号」(静岡福祉文化を考える会)発行 ➤ 「焼津福祉文化共創研究会調査報告書」印刷業者に入稿
01/07	➤ 「第8回地域共生社会調査研究部会」開催 ➤ 「静岡福祉文化を考える会調査報告書」印刷業者に入稿
01/14	➤ 焼津福祉文化共創研究会 2023年1月(第46回)定例研究会開催 ➤ 焼津福祉文化共創研究会「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査報告書」納品
01/20	➤ 静岡福祉文化を考える会「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査報告書」納品
01/28	➤ 「公益財団法人愛恵福祉支援財団」へ「事業実施報告書」提出
02/04	➤ 「第9回地域共生社会調査研究部会」開催
02/18	➤ 焼津福祉文化共創研究会 2023年2月(第47回)定例研究会開催 ➤ 「地域共生社会を語る」(調査報告会)研修会開催
02/25	➤ 静岡福祉文化を考える会「第3回公開型研修会」開催 ➤ 「第215回委員会」開催 ➤ 「焼津福祉文化共創研究会通信 No.42」発行
03/04	➤ 「第10回地域共生社会調査研究部会」開催
03/18	➤ 焼津福祉文化共創研究会 2023年3月(第48回)定例研究会開催 ➤ 「焼津福祉文化共創研究会通信 No.43」発行
03/25	➤ 「第216回委員会」開催 ➤ 関係機関・団体へ事業報告



2018年3月4日

公開型研修会で高齢者問題を議論中



2016年3月15日

若者発近所福祉かるた(拡大かるた)で議論中

## 2022年度 静岡福祉文化を考える会 27年の歩み

★印日本福祉文化学会主催(本会共催) ※印静岡福祉大との共催 ○印本会主催 △印社会福祉法人ハルモニアとの共催 ■印静岡県委託事業  
 ☆印ふじのくに未来財団助成事業 ▲印公益財団法人あしたの日本を創る協会助成事業 ◆印 静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業  
 ◇印公益財団法人さわやか福祉財団助成事業 ◎印焼津福祉文化共創研究会協働事業 ※印静岡県共同募金会(赤い羽根共同募金)助成事業

年度	活動テーマ	実績	調査研究	機関誌発行
1995年 平成7年		★第10回福祉文化・静岡公開現場セミナー 「静岡発みんなで語ろう福祉文化を21世紀の礎に」 (浜松市 浜松こども園・プレスタワー) 全国から350名、スタッフ80名		
1996年 平成8年 ①	結婚とは	○設立総会(平成8年9月) 第1回公開型研修会「高校生の環境マップづくり」 ○第2回公開型研修会「青年は広野をめざす」 ○第3回公開型研修会「おいしい結婚まずい結婚」		No.1, 2
1997年 平成9年 ②	共働き	○総会・第1回講演会・研修会(座談会) 「家庭と地域と施設を語る」 ○第2回研修会 現場研修「老人施設と自立した長寿者」 ○第3回研修会 宿泊研修セミナー 「世代・領域を超え、福祉文化を語る」 ○第4回公開研修会 講演会「高齢者介護の問題点」 ○第5回研修会 現場研修「特養での実習・長寿者と語る」 ○第6回研修会 公開セミナー「共働きについて」	第1回共働きに関する意識調査	No.3, 4, 5, 6, 7, 8, 9
1998年 平成10年 ③	地域とは	○総会・第1回ミーティング(研修会)「お互いに肌の付き合いを」 ○第2回研修会 現場研修「地域社会での活動」 ○第3回研修会 宿泊研修セミナー「世の中どうなってるの?」 ○第4回研修会 現場研修「障害児によせる地域の人たち」 ○第5回研修会「映画より 障害者の声」 ○第6回研修会 参加型公開シンポジウム「歩けなくなる日がやってくる」	第2回地域に関する意識調査(その1)	No.10, 11, 12, 13, 14
1999年 平成11年 ④	家族とは	○総会・第1回研修会「私たちに地域とは何か」 ○第2回研修会 合宿体験セミナー「福祉の裏と表」 ○第3回研修会 現場研修「在日外国人と日本語、母国の文化」 ★第18回日本福祉文化学会現場セミナー 「宮城まり子さんと福祉文化を学ぶ」 ○第4回研修会 公開シンポジウム「私たちに家族とは」	第3回家族に関する実態調査	No.15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22
2000年 平成12年 ⑤	父親とは	○総会・第1回公開トークシンポジウム「今日まで そして明日から」 ○第2回研修会 合宿体験セミナー「親と子 それぞれの言い分」 ○第3回研修会 公開シンポジウム「福祉文化へチャレンジ 障害者の余暇文化」 ○第4回研修会 公開セミナー「私たちに父親とはなにか?」	第4回父親像に関する実態調査	No.23, 24, 25, 26
2001年 平成13年 ⑥	ボランティア活動とは	○総会・第1回公開トーク「ボランティアはただ働きの代名詞か」 ○第2回研修会 公開型合宿セミナー 「何か変だぞ?ボランティア活動」 ○第3回研修会 国際年2001年ボランティアEXPO 「ボランティアはただ働きの代名詞か」 ○第4回研修会 公開シンポジウム 「ボランティア実践者意識調査の報告」	第5回ボランティア活動実践者の実態調査	No.27, 28, 29, 30, 31
2002年 平成14年 ⑦	働く人の暮らし	○総会・第1回公開トーク「福祉文化の原点を探る」 ○第2回研修会 合宿セミナー「福祉文化の創造とは」 ○★第13回日本福祉文化学会大会 in しずおか ○第1回静岡県福祉文化研究会セミナー 「富士山麓のちと暮らしによりそう福祉文化の創造と推進」 ○第3回研修会 公開トーク「生きること・働くこと楽しいですか」	第6回働くこと・生きること、生活者の意識調査	No.32, 33, 34, 35
2003年 平成15年 ⑧	青年の生きがい	○総会・第1回研修会「精神障害者の生活支援と余暇文化」 ○第2回研修会 合宿体験セミナー「大人の言い分 青少年の言い分」 ○第3回研修会 公開型研修会「青年の生きがいを探ろう」 ○第2回静岡県福祉文化研究会セミナー 「大人も子どもも障害者も高齢者も豊かに生きるための福祉文化」	第7回青少年の生きがい・就労に関する意識調査	
2004年 平成16年 ⑨	地域とはII	○総会・第1回公開トーク「福祉文化を創造する地域づくり」 ○第2回研修会 合宿セミナー「町づくり・こんな町に住みたい」 ○第3回静岡県福祉文化研究会セミナー「地域福祉と福祉文化活動」 ○第3回研修会 公開研修会「検証/福祉文化と地域づくり」	第8回地域に関する意識調査(その2)	No.36, 37, 38, 39
2005年 平成17年 ⑩	子どもたちを取りまく諸問題	○総会・第1回研修会「福祉文化の原点を探る～子どもと地域をつなぐ」 ○第4回静岡県福祉文化研究会セミナー 「つながる地域に、福祉文化を発信できる新たなまちづくりを語ろう」 ※○「はっぴい祭2005」第2回研修会 ○第3回研修会 公開型トーク 「大いに語ろう、地域ぐるみで子ども達を育むには」	第9回子どもと保護者の意識調査	No.40

## 2022年度 静岡福祉文化を考える会 27年の歩み

★印日本福祉文化学会主催(本会共催) ※印静岡福祉大との共催 ○印本会主催 △印社会福祉法人ハルモニアとの共催 ■印静岡県委託事業  
 ☆印ふじのくに未来財団助成事業 ▲印公益財団法人あしたの日本を創る協会助成事業 ◆印 静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業  
 ◇印公益財団法人さわやか福祉財団助成事業 ◎印焼津福祉文化共創研究会協働事業 ✕印静岡県共同募金会(赤い羽根共同募金)助成事業

年度	活動テーマ	実績	調査研究	機関誌発行
2006年 平成18年 ⑪	子どもたちと 地域環境	○第1回総会・自由討議 今後の「静岡福祉文化を考える会」の再生に向けて ※「わんぱくあそびフェスティバル 2006」 第2回研修会 公開型研修会 ※「はっぴい祭 2006」 第3回研修会 公開型研修会 ○第5回静岡県福祉文化研究セミナー 「静岡から発信する『福祉文化の創造』とはなにか」 ○第4回研修会 座談会「子どもたち、その実情とこれからを・・・」 ○第5回研修会 公開研修会 「地域ぐるみで子どもを育む講座」	第10回子どもと社会環境に 関する調査	No.41, 42, 43, 44, 45
2007年 平成19年 ⑫	団塊の世代	○第1回研修会 公開型研修会 全国一斉「あそびの日」キャンペーン事業 ※「わんぱくあそびフェスティバル 2007」 ○総会・第2回公開トーク「世間は団塊の世代を議論しているが・・・」 第3回研修会 公開型研修会 ※「はっぴい祭 2007」 ○第6回静岡県福祉文化研究セミナー 「地域活動と団塊の世代の役割に関する意識調査」から何が見えたか	第11回「地域活動」と「団塊 の世代」の役割に関する調 査	No.46, 47, 48, 49
2008年 平成20年 ⑬	長寿者(高齢者) の自立	○静岡福祉文化を考える会 10周年記念誌発行 ○総会・第1回公開トーク 「地域で豊かに暮らし合うための条件ー長寿者と福祉文化ー」 ■第2回公開型研修会(県委託事業) 「ほっとする居場所、ここが一番居心地がいい」 ■第3回公開型研修会(県委託事業、沼津市社協主催) 「ご近所福祉 in ぬまつ」 ■第7回静岡県福祉文化研究セミナー (日本福祉文化学会ブロック研修)(県委託事業) 「長寿者とともに暮らす 共生社会づくりの担い手は一体誰か？」 ■県委託事業「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり4地区モデル事業」 (沼津市、富士川町、掛川市、袋井市) 第25回中日ボランティア賞受賞 平成20年度「みずほ福祉助成財団」より助成 第6回静岡市社会福祉大会会長表彰受賞 ■平成20年度県委託事業関係者連絡会 2回(7月、3月)開催	第12回県共募助成事業 長寿者の生きがい、その意 識と実態に関する調査  第13回県委託事業 日常生活と福祉情報に関す る調査	No.50, 51, 52, 53, 54, 55
2009年 平成21年 ⑭	長寿社会 (地域づくり)	○総会・第1回公開型研修会 公開トーク「共生社会と福祉文化」 ■第2回公開型研修会(県委託事業) 現場小セミナー「私にとっての心安らぐ居場所って何処？」 ー自宅以外の『もうひとつの家』誕生地域の支え合いを学ぶー ■第3回公開型研修会(県委託事業) 現場小セミナー 公開トーク 「協働による福祉社会再構築と福祉文化を大いに語ろう」 ■第8回静岡県福祉文化研究セミナー パノラマ式討論 「長寿者とともに小地域をつなぐ仕組みづくり実現にむけて」 ■県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」 4地区モデル事業 (小山町、伊豆の国市、焼津市小川第11自治会、菊川市) ■第4回公開型研修会 (県委託事業、焼津市小川第11自治会主催)「ご近所福祉インコがわ」 ■第5回公開型研修会(県委託事業、沼津市社協主催) 「ご近所福祉 in ぬまつ」 第5回福祉文化実践学会賞受賞 (平成22年2月28日に日本福祉文化学会第20回東京大会で受賞) ■平成21年度県委託事業関係者連絡会 3回(7月、11月、3月)開催	第14回県委託事業 長寿社会に関する県民意識 と実態調査	No.56, 57, 58, 59, 60
2010年 平成22年 ⑮	生活圏域の支え 合い	○総会・第1回研修(公開トーク) 「一人でも安心して暮らせる地域づくりの条件」 ■第2回公開型研修会(県委託事業) 井戸端会議方式/徹底討論 「これからのご近所の支え合いはどうなるの？」	第15回県委託事業 いまこそ、地域社会に福祉 文化を拓く「生活圏域におけ る支え合いとはなにか、本 音に迫る調査」	No.61, 62, 63, 64, 65, 66

## 2022年度 静岡福祉文化を考える会 27年の歩み

★印日本福祉文化学会主催(本会共催) ※印静岡福祉大との共催 ○印本会主催 △印社会福祉法人ハルモニアとの共催 ■印静岡県委託事業  
 ☆印ふじのくに未来財団助成事業 ▲印公益財団法人あしたの日本を創る協会助成事業 ◆印 静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業  
 ◇印公益財団法人さわやか福祉財団助成事業 ◎印焼津福祉文化共創研究会協働事業 ※印静岡県共同募金会(赤い羽根共同募金)助成事業

年度	活動テーマ	実績	調査研究	機関誌発行
		<ul style="list-style-type: none"> <li>■第3回公開型研修会(県委託事業) 追跡討論「サロンは何をめざすのか」</li> <li>■第9回静岡県福祉文化研究セミナー オープン式KJ法に挑戦(第4回公開型研修会 県委託事業) 「これまでとこれから—生活圏域の支え合いの仕組みづくりの提案—」</li> <li>■第5回公開型研修会(県委託事業、沼津市社協主催) 「ご近所福祉 in めまづ」</li> <li>■県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」 5地区モデル事業 (藤枝市、磐田市、富士宮市、西伊豆町、沼津市)</li> <li>■平成22年度委託事業関係者連絡会 3回(7月、11月3月)</li> <li>△福祉コミュニティ講座 「ほっとする、私が主役の福祉のまちづくりにチャレンジ」4回シリーズ</li> <li>△みんな仲間集まれ「ウェルフェア塾」4回シリーズ</li> <li>△特別公開型研修会 共生社会実現への道程研修会</li> </ul>		
2011年 平成 23 年 ⑩	生活圏域で一人 ひとりの居場所を 考える	<ul style="list-style-type: none"> <li>○総会・第1回公開型研修会全体ディスカッション 「これまでとこれから—静岡発 福祉文化の創造—」</li> <li>△福祉コミュニティ講座(第2回公開型研修会) 住民主体の「福祉コミュニティづくり」を学ぶ —福祉施設とともに「福祉コミュニティ講座」を開講—4回シリーズ</li> <li>■県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」 5地区モデル事業(富士宮市、西伊豆町、川根本町、袋井市)</li> <li>■第10回静岡県福祉文化研究セミナー (第3回公開型研修会 県委託事業) 福祉文化の創造の原点に返って—世代を超えて語りあう—</li> <li>■第4回公開型研修会 (県委託事業、沼津市社協主催)「ご近所福祉 in めまづ」</li> <li>■平成23年度委託事業関係者連絡会 3回(8月、12月、3月)</li> <li>■第5回公開型研修会(県委託事業)「共生社会実現への道程研修会」</li> <li>△「みんな仲間、集まれ『ウェルフェア塾』」(4回シリーズ)</li> </ul>	第16 回県委託事業 「地域と私の居場所その意識と実態調査」	No.67, 68, 69, 70, 71, 72
2012年 平成 24 年 ⑪	家族って何？ 私の居場所がある のか	<ul style="list-style-type: none"> <li>○総会・第1回公開型研修会「今、あらためて“家族の実情”に迫る」 —ご近所とつながる家族機能を考える—</li> <li>■第2回公開型研修会(県委託事業) 実践活動に学ぶ/グループワーク 「誰が担う？つながる地域 支え合う地域—世代を超えて、今こそ語ろう 考えようこれからの私の居場所」</li> <li>△第3回公開型研修会 「実践活動から学ぶ—つながる地域・支え合う地域—」</li> <li>■△第4回公開型研修会 『福祉コミュニティ講座—地域と家族のつながりを考える—』(2回シリーズ) —地域に“私の居場所はありますか—楽しいを創造する地域とは”</li> <li>■第 11 回静岡県福祉文化研究セミナー(第5回公開型) 「福祉文化と家族—これまでの家族・これからの家族」</li> <li>■第6回公開型研修会 (県委託事業、沼津市社協主催)「ご近所福祉 in めまづ」</li> <li>△■第7回公開型研修会「共生社会実現への道程研修会」 「一人でも安心して暮らせる地域づくりとは—」</li> <li>△福祉コミュニティ講座(第8回公開型研修会) 「ホットな出会い 楽しい遊び」</li> <li>△「みんな仲間、集まれ『ウェルフェア塾』」(6回シリーズ)</li> <li>■県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」 5地区モデル事業 (熱海市、牧ノ原市、掛川市、西伊豆町、富士宮市、沼津市)</li> <li>■平成 24 年度委託事業関係者連絡会 3回(7月、12月、3月)</li> <li>平成 24 年度静岡県社会福祉協議会会長賞受賞</li> </ul>	第17 回県委託事業 今、あらためて、“家族の実情”に迫る 私にとって、家族ってなに？その意識と実態調査	No.73, 74, 75, 76, 77
2013年 平成 25 年 ⑫	ここが一番ホッと する私たちのご近 所の居場所づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>○総会・第1回公開型研修会「つながるご近所の再構築の決め手は？」</li> <li>■第2回公開型研修会(県委託事業) 住民主体でご近所を診断「長寿者が輝く これからの“ご近所”を創る」</li> <li>■第3回公開型研修会 「ご近所の支え合いの取組みを学ぶ—実践事例からの検証—」</li> </ul>	第18 回県委託事業 ホッとするご近所づくり その意識と実態調査	No.79, 80, 81, 82, 83

## 2022年度 静岡福祉文化を考える会 27年の歩み

★印日本福祉文化学会主催(本会共催) ※印静岡福祉大との共催 ○印本会主催 △印社会福祉法人ハルモニアとの共催 ■印静岡県委託事業  
 ☆印ふじのくに未来財団助成事業 ▲印公益財団法人あしたの日本を創る協会助成事業 ◆印 静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業  
 ◇印公益財団法人さわやか福祉財団助成事業 ◎印焼津福祉文化共創研究会協働事業 ※印静岡県共同募金会(赤い羽根共同募金)助成事業

年度	活動テーマ	実績	調査研究	機関誌発行
		<ul style="list-style-type: none"> <li>■第4回公開研修会 (第12回福祉文化研究セミナーとして開催) 『誰がご近所福祉を創るか、これが一番、ホッとする支え合い』</li> <li>■第5回公開型研修会 (県委託事業、沼津市社協主催)「ご近所福祉 in ぬまづ」</li> <li>■第6回公開研修会 「長寿者から学ぶ“ご近所福祉”」大石さき様宅訪問</li> <li>■県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」 7地区モデル事業 (熱海市、牧ノ原市、沼津市、長泉町、島田市、御前崎市、森町)</li> <li>■平成25年度委託事業関係者連絡会 2回(7月、3月)</li> <li>■ご近所福祉カルタ制作(次年度継続)</li> </ul>		
2014年 平成26年 ⑱	人々が豊かに暮らし合い、安心して暮らせる地域づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>○総会・第1回公開型研修会 福祉文化ってなに? その①豊かに暮らしあえる地域を大いに語ろう</li> <li>■第2回公開型研修会(県委託事業) 「福祉文化ってなに? その② 地域の豊かさとは何か」</li> <li>■第3回公開研修会(県委託事業) (第13回福祉文化研究セミナーとして開催) 「静岡発 福祉文化の創造一人々が豊かに暮らし合い、安心して暮らせる地域づくり」</li> <li>■第4回公開研修会(県委託事業) 「鈴木君なぜ地域参加するの? 山田君なぜ地域参加しないの?」</li> <li>○第5回公開研修会 「地域の豊かさとは—静岡発 福祉文化活動からの検証—」</li> <li>■若者の「訪問型研修会」から長寿者を取り巻く地域問題解決の提言 計10回、延べ152名が訪問</li> <li>■県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」 6年間の実践的活動地区の総合的検証</li> <li>■共創社会実現研究会(23名の委員構成)の設置と4回開催</li> <li>■ご近所福祉カルタ制作に向けた協議</li> <li>○あしたの日本を創る協会「生活会議」事業の取り組み(助成事業)</li> </ul>	第19回県委託事業 豊かに暮らせる地域づくりその意識と実態調査	No.84, 85, 86, 87, 88
2015年 平成27年 ⑳	静岡発 福祉文化の創造による豊かに暮らせる生活圏域の地域づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>○総会・第1回公開型研修会 「今こそ、静岡発 福祉文化の創造をめざして 豊かな地域づくりを語ろう」</li> <li>○第2回公開型研修会 「地域住民が集まる居場所とは」</li> <li>○第3回公開研修会 「私の地域を知っていますか、まずは地域の豊かさづくりから」</li> <li>○第4回公開研修会 「地域ぐるみの学び合いで語れる環境を創る」</li> <li>○第5回公開研修会 「福祉課題解決に、私の地域の社会資源をどう活かすか」</li> <li>○第14回静岡県福祉文化研究セミナー 「静岡発 福祉文化の創造による豊かに暮らせる生活圏域の地域づくり」</li> <li>○第6回公開研修会 「福祉情報の共有化と地域の支え合い」</li> <li>○第7回公開研修会 「20年をこれからの原点に —当たり前のことが当たり前出来る地域とは—」</li> <li>○若者発ご近所福祉かたるたの創作と地域学習の開拓 県共同募金助成事業(かるた100セット作成)</li> <li>○「共創社会実現研究会」設置(12回開催)</li> <li>○「若者発”居場所”あり方研究会」設置(9回開催)</li> <li>○静岡福祉文化を考える会 20周年記念誌発行(200部)</li> <li>○あしたの日本を創る協会「生活会議」事業の取り組み(助成事業)</li> </ul>	第20回 若者の地域参加 その意識と実態調査	No.94, 95, 96, 97, 98, 99, 100, 101, 102, 103
2016年 平成28年 ㉑	静岡発 福祉文化の創造とご近所福祉	<ul style="list-style-type: none"> <li>○総会・第1回公開型研修会 「静岡福祉文化を考える会これまでとこれから」</li> <li>○第2回公開型研修会「いかに地域性を発揮したご近所福祉を創るか」</li> <li>○第3回公開研修会 「静岡発福祉文化の創造とご近所福祉を総括する」</li> <li>○第15回静岡県福祉文化研究セミナー 「静岡発福祉文化の創造と豊かなご近所福祉づくり」</li> </ul>	第21回 ご近所福祉その意識と実態調査(調査報告書は、静岡市V連絡協議会助成により100部作成)	No.104, 105, 106, 107, 108, 109, 110

## 2022年度 静岡福祉文化を考える会 27年の歩み

★印日本福祉文化学会主催(本会共催) ※印静岡福祉大との共催 ○印本会主催 △印社会福祉法人ハルモニアとの共催 ■印静岡県委託事業  
 ☆印ふじのくに未来財団助成事業 ▲印公益財団法人あしたの日本を創る協会助成事業 ◆印 静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業  
 ◇印公益財団法人さわやか福祉財団助成事業 ◎印焼津福祉文化共創研究会協働事業 ※印静岡県共同募金会(赤い羽根共同募金)助成事業

年度	活動テーマ	実績	調査研究	機関誌発行
		○鈴与マッチングギフト助成事業による「若者発 ご近所福祉かるた」拡大版2セット作成と活用開拓 ○「若者発 ご近所福祉かるた」の有効活用によるご近所福祉の検証及び「拡大かるた」の有効活用 ○「焼津市新しい地域支援のあり方」を考えるフォーラム」運営協力 ○沼津市社会福祉協議会主催「沼津市ワークショップ」協力 ○「共創社会実現研究会」の設置(6回開催) ○常葉大学同好会「若者発“居場所”あり方研究会」への支援と協働活動の展開 ○あしたの日本を創る協会「生活会議」事業の取り組み(新しい地域課題・助成事業) ○焼津市教育委員会主催「おしゃべりカフェ」運営協力 ○焼津市港地域づくり推進会主催「港地域ささえあい講座」協力		
2017年 平成29年 ⑳	ご近所福祉で集まる地域ぐるみの居場所を拓く	○総会・第1回公開型研修会『ご近所福祉と居場所』 ☆第2回公開型研修会 「ささえあう地域ぐるみの“居場所”づくりを拓く」 ☆第3回公開型研修会「地域ぐるみの居場所をめざす」 ☆第16回静岡県福祉文化研究セミナー 「静岡発 福祉文化の創造とほつとする居場所」 ☆「共創社会研究会」の設置(4回開催) ○焼津市港地域づくり推進会主催「港地域ささえあい講座」協力 ○「いかずい北川原」居場所協力(焼津市) ▲あしたの日本を創る協会「新しい地域課題(全国的な課題)助成事業」 ◆平成29年度静岡県社会福祉協議会ふれあい基金地域福祉・ボランティア活動等推進助成事業 ☆ふじのくに未来財団「福祉コミュニティ再構築に向けた県民の意識と実態把握事業—ささえあう地域ぐるみの“居場所”づくりへの提言」助成事業 ○常葉大学同好会「若者発“居場所”あり方研究会」への支援と協働活動の展開 ○「若者発 ご近所福祉かるた」の有効活用によるご近所福祉の検証及び「拡大かるた」の有効活用 H.29年度静岡市表彰受賞	第22回 居場所ってなに？その意識と実態調査(静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成・あしたの日本を創る協会助成・ふじのくに未来財団助成)	No.111, 112,113, 114, 115, 116
2018年 平成30年 ㉑	子どもを育む地域づくりとは	○総会・第1回公開型研修会 「福祉文化と子どもを育む地域づくりを考える」 ○第2回公開型研修会 「支え合う地域ぐるみの“子供の居場所”を考える」 ○第3回公開型研修会「子どもたちが安心して暮らせる地域づくりとは」 ○第17回静岡県福祉文化研究セミナー 「静岡発 福祉文化の創造と子ども支援を考える」 ○焼津市港地域づくり推進会主催 「港地域ささえあい講座」協力(全4回) ○「焼津市いかずい北川原居場所」協力 ○「若者発“居場所”あり方研究会」(常葉大学同好会)への情報提供 ○「若者発ご近所福祉かるた」有効活用呼び掛け ○県内要請市町研修支援 ○第29回日本福祉文化学会大阪大会にて、 「本会の23年間の福祉文化実践のプロセス」発表 ○第30回日本福祉文化学会東海大会側面的支援	第23回 子どもを育む地域づくりその意識と実態調査(あしたの日本を創る協会助成)	No.118,119, 120,121
2019年 平成31年 令和1年 ㉒	子どもを育む福祉コミュニティの再構築と地域ぐるみのささえあいの仕組みづくり	○総会・第1回公開型研修会「子どもと福祉文化を語ろう」 ◆第2回公開型研修会「地域の子ども支援の実践に学ぶ」 ◆第3回公開型研修会 「大人が変わる、地域が変わる、子どもが変わる、ホッとする地域とは」 ◆第18回静岡県福祉文化研究セミナー「福祉文化と子ども」 ◆共創社会研究会設置(3回開催) ○「いかずい北川原」居場所協力(焼津市) ▲あしたの日本を創る協会「2019年度全国的な課題」助成事業 ◆静岡県社会福祉協議会ふれあい基金地域福祉・ボランティア活動等助成事業 ○「焼津福祉文化共創研究会」協力	*第23回 子どもを育む地域づくり② *第24回 100名の子どもたちに聞きましたホッとする地域ですか(静岡県社協ふれあい基金助成事業)	No.122, 123, 124,125, 126, 127

## 2022年度 静岡福祉文化を考える会 27年の歩み

★印日本福祉文化学会主催(本会共催) ※印静岡福祉大との共催 ○印本会主催 △印社会福祉法人ハルモニアとの共催 ■印静岡県委託事業  
 ☆印ふじのくに未来財団助成事業 ▲印公益財団法人あしたの日本を創る協会助成事業 ◆印 静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業  
 ◇印公益財団法人さわやか福祉財団助成事業 ◎印焼津福祉文化共創研究会協働事業 ※印静岡県共同募金会(赤い羽根共同募金)助成事業

年度	活動テーマ	実績	調査研究	機関誌発行
		<ul style="list-style-type: none"> <li>○静岡県コミュニティづくり推進協議会「令和発・コミュニティ読本」編集協力(「若者発 ご近所福祉かるた」掲載協力)</li> <li>○「若者発 ご近所福祉かるた」(拡大かるた)の有効活用</li> <li>◆子ども実践地区検証事業(4地区)</li> </ul>		
2020年 令和2年 ⑫	つながるご近所の再構築 決め手は一体何か ご近所福祉の復活①	<ul style="list-style-type: none"> <li>○総会・第1回公開型研修会(資料配布) 「私のご近所 これからのご近所を創る」</li> <li>○第2回公開型研修会「ご近所を診断する」</li> <li>○第3回公開型研修会「これで安心 ホットするご近所」</li> <li>○第19回静岡県福祉文化研究セミナー 「ホットするご近所のささえあいは誰が創る？」</li> <li>○「いかずい北川原」居場所協力(焼津市)</li> <li>○「焼津福祉文化共創研究会」との協働</li> <li>○「若者発 ご近所福祉かるた」の有効活用</li> <li>○関係機関・団体との情報提供</li> <li>○本会ブログ立ち上げ</li> <li>○「日本福祉文化学会」HPと「焼津福祉文化共創研究会」ブログとのリンクによる情報共有</li> <li>○本会25周年記念調査報告書発行</li> <li>・みずほ教育福祉財団助成事業決定(プロジェクター機材)</li> </ul>	第25回ご近所福祉その意識と実態調査	No.129,130,131 132,133
2021年 令和3年 ⑬	地域を家庭化する“ご近所福祉”を創る支え合いを探る	<ul style="list-style-type: none"> <li>○総会・第1回公開型研修会 「ご近所福祉その意識と実態から、課題提起を探る」</li> <li>○第2回公開型研修会 「住民福祉教育の成果とご近所福祉かるたの活用」</li> <li>○第3回公開型研修会 「地域を家庭化する“ご近所福祉”を創る支え合いを探る」</li> <li>○第20回静岡県福祉文化研究セミナー「ご近所福祉と福祉文化」</li> <li>○「焼津福祉文化共創研究会」との協働</li> <li>※静岡県共同募金会助成事業 「若者発 ご近所福祉かるた」の活用拡大と住民福祉教育開拓事業」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・若者発ご近所福祉かるた100セット増刷作成</li> <li>・若者発ご近所福祉かるた利用の手引き作成(200部)</li> <li>・共創社会実現研究会設置(外部委員3名)とかるた有効活用議論</li> <li>・かるた活用状況調査実施</li> </ul> </li> <li>○関係機関・団体との情報提供</li> <li>○本会ブログ継続維持と「焼津福祉文化共創研究会」ブログとのリンクによる情報共有</li> <li>▲あしたの日本を創る協会「政策提言」助成事業</li> <li>◇さわやか福祉財団地域ささえあい基金助成事業 <ul style="list-style-type: none"> <li>・鈴与マッチングギフト助成事業決定(拡大かるた2セット作成)</li> <li>・静岡市ボランティア団体連絡協議会加盟継続</li> <li>・日本福祉文化学会団体会員加入(新規)</li> <li>・小さな親切運動本部発行「小さな親切」季刊誌に「若者発 ご近所福祉かるた」記事掲載</li> </ul> </li> </ul>	第26回福祉ってなに？ 461名の子どもたちに聞きました調査 (さわやか福祉財団、あしたの日本を創る協会助成事業)	No.134,135 136,137,138 139
2022年 令和4年 ⑭	ホットする豊かな地域づくりを拓く “共生社会”実現を探る	<ul style="list-style-type: none"> <li>○総会・第1回公開型研修会 「静岡発福祉文化の創造」26年間のプロセスを探る</li> <li>○第2回公開型研修会 「ホットする豊かな地域づくりは誰が担う？」</li> <li>○第3回公開型研修会 「ホットする豊かな地域づくりを描く」</li> <li>○第21回静岡県福祉文化研究セミナー 「“ご近所福祉”から描く福祉文化」</li> <li>○「焼津福祉文化共創研究会」との協働</li> <li>○「地域共生社会調査研究部会」設置</li> <li>○関係機関・団体との情報提供</li> <li>○本会ブログ継続維持と「焼津福祉文化共創研究会」ブログとのリンクによる情報共有</li> <li>○「若者発ご近所福祉かるた」の有効活用の把握</li> <li>・静岡市ボランティア団体連絡協議会加盟継続</li> <li>・日本福祉文化学会団体会員加入(新規)</li> <li>令和4年度静岡県健康福祉大会で表彰を受ける</li> </ul>	第27回ホットする安心した地域づくりその意識と実態調査(●助成事業)	No. 140,141,142,143 144

## 【静岡福祉文化を考える会】2022 年度活動計画

### 活動テーマ: ホットとする豊かな地域づくりを拓く“共創社会”実現を探る

厳しいコロナ禍こそ、福祉文化活動をどのように維持できるか、この2年間「見える化」、「わかる化」の知恵を出し合い、つながる・支え合う地域社会づくりを検証してきた。本会の調査研究事業から「地域コミュニティ」が年々、地域社会全体の個人志向化・希薄化と共に、福祉コミュニティ組織運営の難しさが浮き彫りになった。

本会の活動の原点は、「災害と福祉文化」そのものである。阪神淡路大震災の1年後、「災害と福祉文化」を追求する「地方発 福祉文化の創造」の市民活動団体として1996年9月に結成して27年目を迎えた。

結成当初から、「3つの活動基調」を掲げてきた。

- 活動基調1. 「専門性と市民性の融合の関わり」
- 活動基調2. 「公開型地域総合型学習の企画と実践」
- 活動基調3. 「課題解決に向けたプロセス重視」

この「活動基調」をもとに、さらに次の「3つの柱立て」をもとに26年間活動を展開してきた。

#### ➤ 第1の柱立て「啓発学習事業」

「静岡発（地方発）福祉文化の創造」を目指して、県内各地の実践活動に学び、「課題提起」をして「地域総合型学習」に取り組んできた。

#### ➤ 第2の柱立て「調査研究事業」

県民の協力により、一貫してその時代の地域社会問題をテーマに調査研究活動に取り組み、その結果をその都度県民と共に地域総合型学習をし、課題解決に向けた議論を深めてきた。

#### ➤ 第3の柱立て「実践地区活動事業」

広く県内各地の実践事例を共有し合い「地域診断」のもとに、豊かな地域性を把握し、さまざまな実践活動を展開し、「協働」による福祉問題解決のプロセスの重要性を確認してきた。

本会は7年間、静岡県委託事業「一人でも安心して暮せる地域づくり事業」に取り組み、「ホットするご近所福祉を創る」をテーマに、「生活圈域におけるささえあい（ご近所福祉）を議論し合い、福祉文化実践活動を展開し、「若者発 ご近所福祉かるた」（赤い羽根共同募金助成事業・鈴与マッチングギフト助成事業）を企画作成し、県内各地に、具体的な「住民福祉教育」の推進に役立てる「ご近所福祉を学ぶ」教材として有効活用した。2021年度に「若者発 ご近所福祉かるた」の増刷と「かるたの手引き」の発行にこぎつけて、かるたの誕生から8年目を迎えた今年度は、さらに、「ご近所福祉による共創社会実現」に向けて、これまでの成果物の有効活用を努めるとともに、様々な領域における住民福祉教育として「協働による地域改善に向けた地域づくり」の開拓に努める。

### 1. 2022 年度全体会（総会／第1回公開型研修会）の開催

- 開催日時：2022年5月21日（土）13:30～15:30
- 開催会場：静岡市清水区追分3-5-17「寄ってっ亭」
- 研修テーマ：「静岡発福祉文化の創造」の26年間のプロセスを探る  
ーいまこそ、足元の福祉文化を話し合おうー
- プログラム：
  - (1) 基調報告①「静岡発福祉文化の創造」27年への挑戦、改めて“共創社会”を探る
  - (2) 円卓トーク「今こそ出番 福祉文化を地域づくりの礎に」

## 2. 委員会の開催

- ✓ 実務型委員会の構成を基に，[代表]，[副代表]，[事務局長・次長]，[会計]，[監事]，[委員]が一丸となって，活動の進捗状況管理と検証に努める。
- ✓ 原則，公開型研修会開催日の前段に開催する。
- ✓ 広く委員や一般社会人にも参加を呼掛け，公開型研修会として位置付ける。
- ✓ 必要に応じて，臨時の委員会を開催する。
- ✓ 2022 年度委員会開催は，次の通りとする。
  - 第 1 (211) 回 2022 年 04 月 23 日 (土) 13:30 @静岡市清水区追分「寄ってっ亭」内
  - 第 2 (212) 回 2022 年 05 月 21 日 (土) 10:30 @静岡市清水区追分「寄ってっ亭」内
  - 第 3 (213) 回 2022 年 07 月 23 日 (土) 10:30 @静岡市清水区追分「寄ってっ亭」内
  - 第 4 (214) 回 2022 年 11 月 26 日 (土) 10:30 @静岡市清水区追分「寄ってっ亭」内
  - 第 5 (215) 回 2023 年 02 月 25 日 (土) 10:30 @静岡市清水区追分「寄ってっ亭」内

## 3. 研修・討議活動

### (1) 公開型学習会の開催

「定例委員会」をこれにあて，会員相互の情報交換の場及び日常的な実践活動につなげる。一般社会人の参加も呼び掛ける。

### (2) 公開型研修会の開催

#### ➤ 第 1 回

- 開催日時：2022 年 5 月 21 日 (土) 13:30～15:30
- 開催会場：静岡市清水区追分 3-5-17「寄ってっ亭」
- 研修テーマ：「静岡発福祉文化の創造」の 26 年間のプロセスを探る  
ーいまこそ，足元の福祉文化を話し合おうー
- プログラム：
  - ① 基調報告①「静岡発福祉文化の創造」27 年への挑戦，改めて“共創社会”を探る
  - ② 円卓トーク「今こそ出番 福祉文化を地域づくりの礎に」

#### ➤ 第 2 回

- 開催日時：2022 年 7 月 23 日 (土) 13:30～15:30
- 開催会場：静岡市清水区追分 3-5-17「寄ってっ亭」
- 研修テーマ：ホッとする豊かな地域づくりは誰が担う？
- プログラム：
  - ① 基調報告「若者発 ご近所福祉かるたの有効活用に学ぶ」
  - ② 円卓トーク「これまでの尊い教訓から，コロナ明けの地域づくりを考える」

#### ➤ 第 3 回

- 開催日時：2023 年 2 月 25 日 (土) 13:30～15:30
- 開催会場：静岡市清水区追分 3-5-17「寄ってっ亭」
- 研修テーマ：ホッとする豊かな地域づくりを描く
- プログラム：
  - ① 基調報告「調査から浮き彫りになったものは何か」
  - ② 円卓トーク「私が描く，支え合う地域」

## (3) 第 21 回静岡県福祉文化研究セミナーの開催

- 開催日時：2022 年 11 月 26 日（土）13:30～15:30
- 開催会場：静岡市清水区追分 3-5-17「寄ってっ亭」
- 研修テーマ：“ご近所福祉” から描く福祉文化
- プログラム：
  - ① 基調報告「27 年間の福祉文化のプロセスから見えたもの」
  - ② 円卓トーク「私の地域の今とこれからの語る」

## 4. 調査研究活動

## (1) テーマ『ホッとする豊かな地域づくりは誰が担う?調査』の実施

## (a) ねらい

「静岡福祉文化を考える会」は、この 25 年間「静岡発福祉文化の創造」を目指した実践活動の大きな柱立ての一つに、その時代の地域社会を取り巻く様々な福祉課題を「調査テーマ」にした「調査研究活動」に取り組んでいる。また、その分析結果を、県内各方面での研修会や本会の公開型研修会などで公表し、世代を超えた「地域総合型学習」を通じて問題提起し、県民一人ひとりの意識改革に努めてきた。

これまでの調査研究活動を振り返ると、

- 1997 年度 1. 「共働きに関する調査」
  - 1998 年度 2. 「私たちにとって、地域とは何かーその 1ー意識と実態調査」
  - 1999 年度 3. 「私たちにとって、家族とは何か調査」
  - 2000 年度 4. 「父親に関する調査」
  - 2001 年度 5. 「ボランティア活動実践者意識調査」
  - 2002 年度 6. 「大人を対象とした生きがいと就労に関する意識調査」
  - 2003 年度 7. 「青少年の生きがいに関する調査」
  - 2004 年度 8. 「地域とは何かーその 2ー意識と実態調査」
  - 2005 年度 9. 「子どもと社会環境に関する調査」(継続調査)
  - 2006 年度 10. 「子どもと社会環境に関する調査」(総括)
  - 2007 年度 11. 「地域活動と団塊の世代の役割に関する意識調査」
  - 2008 年度 12. 「長寿者の生きがい、その意識と実態に関する調査」(静岡県共同募金会助成事業)
  - 13. 「日常生活と福祉情報に関する意識調査」(静岡県委託事業)
  - 2009 年度 14. 「長寿社会に関する県民意識と実態調査」(静岡県委託事業)
  - 2010 年度 15. 「いまこそ地域社会に福祉文化を拓く 生活圏域における支え合いとは何か本音に迫る調査」(静岡県委託事業)
  - 2011 年度 16. 「地域と私の居場所その意識と実態調査」(静岡県委託事業)
  - 2012 年度 17. 「家族ってなにその意識と実態調査」(静岡県委託事業)
  - 2013 年度 18. 「長寿者とつながるホッとすることご近所づくりその意識と実態調査」(静岡県委託事業)
  - 2014 年度 19. 「豊かに暮らせる地域づくりその意識と実態調査」(静岡県委託事業)
  - 2015 年度 20. 「若者の地域参加その意識と実態調査」
  - 2016 年度 21. 「ご近所福祉その意識と実態調査」
  - 2017 年度 22. 「居場所ってなにその意識と実態調査」
  - 2018 年度 23. 「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査」(1)
  - 2019 年度 24. 「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査」(2)
- 「256 名の子どもたちに聞きました。ホッとする地域ですか?」  
(静岡県社協ふれあい基金助成事業・考察提言)

- 2020 年度 25. 「ご近所福祉その意識と実態調査」(25 周年記念調査研究事業)
- 2021 年度 26. 「福祉ってなに? 461 名の子どもたちに聞きました調査」  
(公益財団法人さわやか福祉財団, 公益財団法人あしたの日本を創る協会助成事業)

と、「26 のテーマ」の調査研究活動に取り組んできた。通算 27 回目となる今年度は、活動テーマ「ホッとする豊かな地域づくりを拓く“共創社会”実現を探る」に基づき、大人を対象に「ホッとする豊かな地域づくりは誰が担う?調査」に取り組む。

(b) 調査項目(細部は「調査部会」で具体化)

- |               |                   |
|---------------|-------------------|
| ① 基本属性        | ⑤ 福祉課題解決の体制に関すること |
| ② 生活状況        | ⑥ 福祉社会への期待        |
| ③ 家庭・家族に関すること | ⑦ 自由意見            |
| ④ 地域社会に関すること  |                   |

(c) 調査の展開(予定)

- |          |   |                         |
|----------|---|-------------------------|
| ① 調査実施期間 | … | 2022 年 09 月～2022 年 10 月 |
| ② 入力期間   | … | 2022 年 10 月～2022 年 11 月 |
| ③ 分析・考察  | … | 2022 年 12 月～2023 年 01 月 |
| ④ 公表     | … | 2023 年 02 月             |

(d) 対象 20 歳以上の静岡県内在住者

(e) 回収目標 200 名程度

(f) 調査依頼/配布方法

会員(現在 18 名), 地域実践者, 関係団体・施設, 企業

(2) 「共創社会実現研究会」の設置と運営

① 設置目的

「活動テーマ」をもとに、本会委員会と並行して、任意の「共創社会実現研究会」(県内実践活動者に呼びかけ・3 回程度開催)を設置し、実践活動から地域福祉について、広く意見を求め、具体的な課題を基に、これからの地域づくりへの提言をまとめる。

② 県民への広報啓発

議論した内容を、本会機関紙に掲載するとともに、本会の活動の提言としてまとめる。また、活動状況をマスコミ等へ情報提供し、広く県民に広報啓発する。

(3) 「若者発 ご近所福祉かるた」有効活用状況の把握

2021 年度事業で配布した団体・グループ等(学校, 地域実践領域, 学童保育, 社会教育, さわやかクラブ, コミュニティ実践団体等)からの「活用レポート」を整理するとともに、現地訪問等から得た検証事項をまとめ、検証作業を実施するとともに、「ご近所福祉」のさらなる推進に努める。

5. 広報・啓発活動

(1) 機関紙発行計画に基づく『Our Life』の発行

- ✓ A4 版, 4 ページ構成, 上質紙印刷, 年 4 回, 200 部発行
- ✓ 「地方発福祉文化の創造」議論や実践活動を会員及び関係方面に具体的に発信。
- ✓ 各号共通事項: 「編集後記」, 「ご近所福祉コーナー」, 「事務局日誌拝見」
- ✓ 発行計画
  - 第 140 号(2022 年 05 月 30 日)『27 年目の福祉文化実践活動の取り組み』
  - 第 141 号(2022 年 09 月 01 日)『若者発 ご近所福祉かるたの活用状況』

- 第 142 号（2022 年 12 月 10 日）『第 21 回福祉文化研究セミナーを振り返る』
- 第 143 号（2023 年 03 月 10 日）『静岡発 福祉文化の創造 2022 年を総括する』

(2) 日本福祉文化学会 HP と本会ブログのリンクによる「地方発 福祉文化の創造」の発信

(3) 「焼津福祉文化共創研究会」ブログとのリンクによる「福祉文化創造」の発信

(4) マスコミ、関係機関・団体への情報発信

## 6. 「若者発 ご近所福祉かるた」の有効活用の現場実践検証

県内の「ご近所のささえあい活動」（主に「かるた」配布先の活動）の実践地区への現地訪問を通じて「地域総合型学習」として、幼児から大人まで、身近な地域における実践活動の場や行事の中で楽しみながら活用し、安心して暮し合う生活圏域づくりをめざす取り組みを検証する。

関係機関・団体との「協働」により、これまでに個人、地域実践者、施設・グループ・サロン等に配布・設置した「かるた」の活用状況を把握し、ご近所福祉の検証に努め、本会の「公開型研修会」で紹介し、地域社会に「ご近所福祉」を課題提起し、これからの地域社会づくりへの提言につなげる。

## 7. コミュニティ組織との連携

コミュニティ組織との連携に努め、「かるた」の配布地域の開拓とともに「ご近所福祉」について、広く地域住民の意見を把握することに努める。

## 8. 関係団体との協働・連携

- (1) 「静岡県共同募金会」への情報提供（2021 年度助成事業、その後の取り組み経過報告）
- (2) 「焼津福祉文化共創研究会」との協働による諸活動の展開、小地域福祉活動の連携による「近助」の取り組みの現場に学ぶ実践活動を県域に共有
- (3) 「静岡県コミュニティづくり推進協議会」との連携  
（かるた配布団体・グループ推薦と事業関連情報提供）
- (4) 「日本福祉文化学会」への情報提供
- (5) 関連大学・専門学校への情報提供
- (6) 静岡県ボランティア連絡協議会との連絡調整及び情報提供
- (7) ふじのくに未来財団への情報提供
- (8) 県内外の関連研究会等と「近助」に関する情報共有
- (9) 福祉コミュニティ組織における実践的取り組みをしている地域の把握と情報交換
- (10) 「若者発 ご近所福祉かるた」配布団体・グループ等との日常的連携  
（施設、NPO 法人、V グループ）
- (11) 静岡県社会福祉協議会及び市町社協との連携（情報提供）
- (12) 公益財団法人あしたの日本を創る協会への情報提供
- (13) 公益財団さわやか福祉財団への情報提供

**公益財団法人さわやか福祉財団 地域助け合い募金助成事業**  
**焼津福祉文化共創研究会 2022年度「地域共生社会を目指す仕組み検証事業」**  
**テーマ:高齢者とともに、地域共生社会を拓く～ホッとする地域づくりは誰が担うか～**  
**「地域共生社会調査研究部会」設置要綱**

**1. 設置目的**

今日、地域コミュニティへの参画の希薄化とともに、家族機能やご近所の支え合いは、制度や施策等公助ありきの意図的支援が当たり前のような社会環境となりつつある。

加えて、長引く厳しいコロナ禍において、ますます地域コミュニティのつながりやご近所の支え合いも弱くなっている。こうした制約された社会環境の中で生活している高齢者自身の現状や、地域社会の共助の実情を把握するとともに、コロナ明けの地域社会をどのように望んでいるかを管内の高齢者の立場から検証する目的で「ホッとする、安心した地域づくりその意識と実態調査」事業を実施する。

調査に関する地域社会の現状認識、計画に基づく円滑な調査の展開協議（調査個票作成、調査集計・分析、調査結果考察、調査報告書編集、調査公表検討等）の議論を深めるとともに、調査結果をもとに、高齢者の積極的な地域参加を促し社会的孤立を防ぎ、世代を超えた地域ぐるみの支え合いにより、地域共生社会づくりの在り方を探ることを目的に設置する。

**2. 構成**

専門性と市民性を融合した住民主体を基本に、本会会員及び本事業に関心を持つ関係者の自発的な参画による構成で運営。

**3. 協力**

さわやかクラブやいづ連合会

**4. 設置期間と研究会開催日**

(1) 設置期間

本事業活動期間（2022年6月16日～2023年3月31日）

(2) 開催時期（会場は全て北川原公会堂）

回	開催日時	研究協議内容（概要）
1	07月30日（土）18:30	研究会の位置づけと方向性、地域の現状、課題整理
2	08月06日（土）18:30	調査実施計画協議（調査実施要項・調査個票・調査票配布）
3	09月03日（土）18:30	調査実施上の課題反響、調査集計作業
4	10月01日（土）18:30	調査回収状況、調査集計作業、協働の課題
5	11月05日（土）18:30	調査集計作業&考察作業（意識と実態と提言）
6	12月03日（土）18:30	調査から見えた意識と実態と地域づくりの課題考察①
7	12月17日（土）18:30	調査から見えた意識と実態と地域づくりの課題考察②
8	01月07日（土）18:30	調査報告書ページ仕立て作業、入稿、報告研修会計画
9	02月04日（土）18:30	調査結果の検証、報告研修会の具体化
10	03月04日（土）18:30	研究会総括（成果）、さわやか福祉財団へ報告

**5. 研究部会の運営・連絡先**

(1) 研究部会運営 「焼津福祉文化共創研究会」

(2) 研究部会連絡先

〒425-0041 焼津市石津 751-1 焼津福祉文化共創研究会 代表 平田 厚  
TEL & FAX: 054-624-1924 携帯: 090-4861-4547

## 【静岡福祉文化を考える会】2022 年度調査研究活動事業 ホットとする、安心した地域づくりその意識と実態調査実施要項

### 1. 調査の目的

「静岡福祉文化を考える会」は、結成以来 26 年間、「静岡発 福祉文化の創造」を目指した実践活動の大きな柱立ての一つに、その時代の地域社会を取り巻く様々な福祉課題を「調査テーマ」にした「調査研究活動」に取り組み、その分析結果を、県内各方面での研修会や本会の公開型研修会などで公表し、世代を超えた「地域総合型学習」を通じて問題提起をし、県民一人ひとりの意識改革に努めてきた。これまでの調査研究活動を振り返ると、

- 1997 年度 1. 「共働きに関する調査」
- 1998 年度 2. 「私たちにとって、地域とは何かーその 1ー意識と実態調査」
- 1999 年度 3. 「私たちにとって、家族とは何か調査」
- 2000 年度 4. 「父親に関する調査」
- 2001 年度 5. 「ボランティア活動実践者意識調査」
- 2002 年度 6. 「大人を対象とした生きがいと就労に関する意識調査」
- 2003 年度 7. 「青少年の生きがいに関する調査」
- 2004 年度 8. 「地域とは何かーその 2ー意識と実態調査」
- 2005 年度 9. 「子どもと社会環境に関する調査」(継続調査)
- 2006 年度 10. 「子どもと社会環境に関する調査」(総括)
- 2007 年度 11. 「地域活動と団塊の世代の役割に関する意識調査」
- 2008 年度 12. 「長寿者の生きがい、その意識と実態に関する調査」(静岡県共同募金会助成事業)
- 2008 年度 13. 「日常生活と福祉情報に関する意識調査」(静岡県委託事業)
- 2009 年度 14. 「長寿社会に関する県民意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 2010 年度 15. 「いまこそ地域社会に福祉文化を拓く 生活圏域における支え合いとは何か本音に迫る調査」(静岡県委託事業)
- 2011 年度 16. 「地域と私の居場所その意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 2012 年度 17. 「家族ってなにその意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 2013 年度 18. 「長寿者とつながるホットとするご近所づくりその意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 2014 年度 19. 「豊かに暮らせる地域づくりその意識と実態調査」(静岡県委託事業)
- 2015 年度 20. 「若者の地域参加その意識と実態調査」
- 2016 年度 21. 「ご近所福祉その意識と実態調査」
- 2017 年度 22. 「居場所ってなにその意識と実態調査」
- 2018 年度 23. 「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査」(1)
- 2019 年度 24. 「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査」(2)  
「256 名の子どもたちに聞きました。ホットとする地域ですか?」  
(静岡県社協ふれあい基金助成事業・考察提言)
- 2020 年度 25. 「ご近所福祉その意識と実態調査」(25 周年記念調査研究事業)
- 2021 年度 26. 「福祉ってなに? 461 名の子どもたちに聞きました調査」  
(公益財団法人さわやか福祉財団, 公益財団法人あしたの日本を創る協会助成事業)

と、「26 のテーマ」の調査研究活動に取り組んできた。

今回の調査研究活動は、これまでの調査考察結果から、地域住民相互のつながりや支え合いが弱くなり、地域コミュニティへの関わりについて、その意識と実態が希薄化の傾向にあ

ることが浮き彫りになった。さらに、長引く厳しいコロナ禍で、尊い地域コミュニティの希薄化による「共助」、「自助」が衰退傾向にある地域環境の中で、それぞれの地域で暮らす高齢者の意識と実態の現状を把握するとともに、コロナ明けに期待する地域（ご近所）の支え合いの仕組みづくりを検証する。なお、本会が取り組み全県域と「焼津福祉文化共創研究会」が取り組む、焼津港地域管内（小地域）の地域性をもとに、地域社会が果たすべき課題を提言することを目的に実施する。

## 2. 実施主体 静岡福祉文化を考える会

## 3. 協力 焼津福祉文化共創研究会

## 4. 調査対象

静岡県内の65歳以上の方々を対象に、年代・領域等を考慮して、約300名程度の回収を目標に実施。

## 5. 調査依頼／配布方法

(1) 会員	…	100 枚
(2) 企業、福祉団体、福祉施設への依頼	…	200 枚
(3) 地域実践者には、本会より郵送で依頼	…	200 枚
	合計	500 枚

## 6. 調査項目

(1) 基本属性	(5) 地域社会との関わり（実態）
(2) 生活状況（高齢者自身）	(6) 地域参加の動向
(3) 家庭・家族のこと	(7) 地域環境
(4) 地域との関わり（意識）	(8) 提言（自由な意見提言）

## 7. 調査展開

(1) 調査項目・調査票検討	…	2022年07月～2022年08月
* 本会委員会及び調査研究部会（地域共生社会調査研究部会）等を中心に検討。		
(2) 調査票完成	…	2022年08月20日
(3) 調査依頼（実施期間）	…	2022年08月25日～2022年10月30日
* 回収まとめ…10月30日		
(4) 入力期間	…	2022年10月10日～2022年11月30日
(5) 分析&考察	…	2022年10月30日～2022年12月01日
(6) 調査報告書完成	…	2023年01月30日
(7) 公表&報告	…	2023年02月中旬
* 公開型研修会、関係機関・団体等の各種研修会で実施		
* 本会「Our Life」で経過報告及び考察概要紹介		

## 8. 問い合わせ先

〒425-0041 静岡県焼津市石津 751-1 静岡福祉文化を考える会 代表 平田 厚  
TEL & FAX: 054-624-1924 携帯：090-4861-4547

【絆間福祉文化を考える会】2022年度調査研究活動事業  
～高齢者とともに、地域共生社会を拓く～

ホッとすると、安心した地域づくり その意識と実態調査票

調査にご協力いただき皆様へ

「絆間福祉文化を考える会」は、1996年9月結成以来、26年間「絆間発 福祉文化の創造」を  
目指した実態活動の大きな柱立ての1つに、その時代の地域社会を取り巻く様々な福祉課題を「調  
査テーマ」にした「調査研究活動」に取り組み、その分析結果を、県内各々での研修会や本会  
の公開型研修会等で公表し、世帯を超えた「地域総合型学習」を通じて問題提起をし、県民一人  
ひとりの意識改革に努めてきました。

これまでの調査研究活動を振り返ると、「共働き」「地域」「家族」「父親」「ボランティア」、  
「就労」「青少年の生きがい」「子どもと社会環境」「団塊の世代」「長寿者の生きがい」「日  
常生活と福祉情報」「支え合い」「地域づくり」「若者の地域参加」「ご近所福祉」「居場所」、  
「福祉ってなに？」等、26のテーマで調査研究活動に取り組んできました。

27年目の今回の調査研究活動は、本会活動テーマ「ホッとすると豊かな地域づくりを拓く“共生  
社会”実現を探る」を掲げ、今日、長引くコロナ禍下、地域コミュニティへの参画の希薄化が同  
える地域階層の中で、それぞれの地域で暮らす高齢者自身の状況や、地域社会の「共助」「自助」  
の真情を把握し、コロナ明けに期待する地域（ご近所）のささえあいの仕組みづくりを検証する  
ことを目的としています。

◆ 各調査設問に、特に指定がなければ、該当する番号1つに○をつけてください。  
◆ 各調査設問に、指定がある場合は、指定の範囲内の選択数でお答えください。

設問01. あなたの属性について、該当する番号に○をつけてください。

- 問01. 性別：①男性 ②女性  
問02. 年齢：①65歳～69歳 ②70歳～74歳 ③75歳～79歳 ④80歳以上  
問03. 職業：①自営業（農林漁業）②自営業（商工サービス）③会社または団体役員 ④無職  
⑤パートタイム臨時被雇用者 ⑥フルタイム被雇用者 ⑦収入を伴う仕事をしていない  
問04. 居住形態：①単独住 ②公営借家 ③民営借家 ④間借り ⑤その他（ ）  
問05. 今の地域の居住年数：①5年未満 ②10年未満 ③20年未満 ④20年以上  
問06. 居住地域：①東部地域 ②中部地域 ③西部地域  
問07. 世帯状況：①夫婦のみ ②単身世帯 ③世帯との同居 ④その他（ ）

設問02. あなたの暮らし向きについてお答えください。

- ①大変ゆとりがある ②まあまあゆとりがある ③ややゆとりがない ④大変ゆとりがない

設問03. あなたの現在の生活上の不安についてお答えください。主なものを3つまでお答えください。

- ①自分や家族の健康 ②災害時の対応 ③自分や家族の介護 ④コロナの緊急対応 ⑤家族問題  
⑥友人や地域との交流がない ⑦ご近所問題 ⑧その他（ ） ⑨特に不安はない

設問04. あなたは、毎日の暮らしの中で困ったとき、誰に相談しますか。主なものを3つまでお答えください。

- ①家族 ②近所の人 ③医師・保健師 ④福祉関係 ⑤友人・知人 ⑥自治会・町内会関係者  
⑦相談する人がいない ⑧誰にも相談したくない ⑨民生委員児童委員 ⑩社会福祉協議会  
⑪地域包括支援センター ⑫利用している介護事業者関係者 ⑬特に困ったことはない  
⑭その他（ ）

設問05. あなたの日常生活における生活情報源をお答えください。主なものを3つまでお答えください。

- ①家族 ②知人・友人 ③ラジオ・テレビ ④スマホ・パソコン ⑤新聞 ⑥行政広報誌(紙)等  
⑦回覧板 ⑧生活情報誌等 ⑨社会教育施設(公民館など) ⑩自治会発行広報誌(紙)等  
⑪町内会発行広報誌(紙)等 ⑫所属団体広報誌(紙)等 ⑬福祉施設団体広報誌等 ⑭スーパー  
等の掲示 ⑮各種企業チラシ ⑯その他（ ）

設問06. あなたは、親しくしている友人・仲間ほどの程度かお答えください。  
①たくさんいると感じている ②まあまあいると感じている ③あまりいないと感じている  
④ほとんどいないと感じている

設問07. あなたは、家族を大切にしていますか。

- ①とても大切にしている ②大切にしている ③少し大切にしている  
④どちらかといえば大切にしている ⑤大切にしていない

設問08. あなたにとって、家庭はどのような意味を持っていますか。主なものを3つまでお答えください。

- ①家族の団らん ②休息安らぎの場 ③家族の絆を強める場 ④家族が共に成長する場  
⑤子どもを育てる場 ⑥夫婦の愛情を育む場 ⑦子どもをしっかりとつづける場 ⑧親の世話をする場  
⑨その他（ ） ⑩わからない

設問09. あなたは、家族と食事をするようにしていますか。

- ①ほとんどいつも家族の誰かと一緒に食べている  
②毎日少なくとも1回は家族の誰かと一緒に食べている  
③時々、家族の誰かと一緒に食べている  
④家族と一緒に食べていない

設問10. あなたは、子どもとともに生活したいと思いますか。

- ①どちらかといえば、同居したくない ②どちらかといえば、一緒に住みたい ③わからない

設問11. あなたが、一番家族が必要だと感じるときはいつですか。主なものを2つまでお答えください。

- ①生活に不安を感じたとき ②身辺のことで相談をしたとき ③健康に不安を感じたとき  
④経済的な問題が生じたとき ⑤今、報告をしたことが生じたとき ⑥その他（ ）  
⑦感じない

設問12. あなたは、家族の中で高齢者の果たす役割はどのようなことだと思いますか。

- ①家事を担う ②家族・親族の相談相手になる ③家族や親族関係の取りまとめ役  
④家族の支え手 ⑤子どもの世話 ⑥病氣や障害を持つ家族の面倒を見る ⑦その他（ ）  
⑧わからない

設問13. あなたの地域は「一人でも安心して暮らせる地域である」と思いますか。

- ①強く思っている ②少し思っている ③あまり思っていない ④まったく思っていない  
⑤わからない

設問14. あなたは、自分の住んでいる地域の人々との交流について、どのようにお考えかお答えください。

- ①地域の人々との交流は大切である ②地域の人々との交流はどちらかといえば大切である  
③あまり大切だとは思わない ④まったく大切だとは思わない

設問15. “超高齢社会”における、あなたの今日の「生活の支え」についてお答えください。

- ①自分自身での支え ②家族の支え ③地域社会での支え ④その他（ ）  
⑤わからない

設問16. あなたは、地域コミュニティについて、どのようにお考えですか。お答えください。

- ①潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割を持つ ②生活を営む上で必要は感じている  
③今後、ますますその役割は薄れてくる ④よくわからない ⑤その他（ ）

設問17. あなたが、これから参加してみたい興味のある地域活動についてお答えください。

- ①趣味や特技を生かせる活動 ②環境美化に関する活動 ③高齢者を対象にした健康交流の活動  
④世代間交流ができる学習活動 ⑤世代間交流ができる文化伝承活動  
⑥身近な地域防災に関する活動 ⑦その他（ ） ⑧特にない

設問18. あなたの人生を振り返り、あのときは良かったと、今感じる内容について、主なものを3つまでお答えください。

- ①健康・スポーツ・レクリエーション活動 ②家族との和やかなひと時 ③子どもたちの元気な姿
- ④近所同士の交流 ⑤趣味仲間との活動 ⑥町内会活動 ⑦自治会活動・行事 ⑧老人クラブ
- ⑨婦人会 ⑩PTA ⑪地域のお祭り ⑫環境美化活動 ⑬運動会 ⑭青年団（青年会・青年学校）
- ⑮高齢者との交流（居場所・サロン・ミニデイサービス等） ⑯消防団 ⑰学習・教養活動
- ⑱子ども会 ⑲その他（ ） ⑳特になし

設問19. あなたの、ご近所の人とお付き合いについて、主なものを2つまでお答えください。

- ①会えば挨拶する程度 ②外で立ち話をする程度 ③「おすそ分け」する関係を持つ
- ④相談に応じる関係を持つ ⑤お茶や食事と一緒にする ⑥趣味を共にする
- ⑦病気の時に助け合う ⑧家事やちよつとした用事も頼める関係を持つ
- ⑨ご近所のしきりに会う ⑩特になし

設問20. あなたは、ご近所に親しくして行きていますか。

- ①多くある ②何軒かある ③1軒くらいはある ④まったくない

設問21. あなたは、地域の行事や活動に参加していますか。

- ①積極的に参加している ②時々参加している ③ほとんど参加していない

設問22. 設問21で「①積極的に参加している」、「②時々参加している」と答えた方に伺います。あなたが、主に「参加している内容」を2つまでお答えください。

- ①清掃活動 ②地域の祭り ③PTA・子ども会活動 ④防災訓練 ⑤健康スポーツ関連行事
- ⑥文化関連行事 ⑦奉仕活動 ⑧交通安全活動 ⑨自治会・町内会活動 ⑩趣味活動
- ⑪その他（ ）

設問23. あなたは、「地域づくり」を進める活動に参加協力の呼びかけがあったとき参加しますが、主な活動内容を2つまでお答えください。

- ① 呼びかけがあったら参加する
- ② 呼びかけがあれば参加してもよい
- ③ 参加したくない

設問24. 設問23で「①呼びかけがない」、「②呼びかけがあれば参加してもよい」と回答した方に伺います。主な活動内容を2つまでお答えください。

- ①子育てや子ども見守り ②高齢者や障がい者への支援（買い物、家事、移送等）
- ③健康づくりや生きがいづくり ④介護者や介護を必要とする方への支援
- ⑤自治会・町内会運営の企画 ⑥防災・防犯等生活安全に関する活動
- ⑦スポーツ・文化・レクリエーション等の活動 ⑧世代を超えた趣味・地域行事等交流活動
- ⑨青少年健全育成活動 ⑩高齢者同士の見守り ⑪生活改善（環境美化・緑化・まちづくり等）
- ⑫生涯学習（農園芸・朗読・シルバニア人材センター）
- ⑬教育・文化活動（学習会・子供会育成・郷土芸能等） ⑭その他（ ）
- ⑮特になし

設問25. 設問23で「③参加したくない」と答えた方に伺います。主な理由を2つまでお答えください。

- ①時間がない ②興味がわかない ③自分に合った活動がない ④健康でない ⑤費用がかかる
- ⑥近くに活動がない ⑦情報が入らない ⑧一緒に活動する人がいない
- ⑨参加のきっかけがない ⑩参加したいと思わない ⑪社会の動きが気になる
- ⑫その他（ ）

設問26. あなたの一番安心(ホッと)できる場所について伺います。

- ①家庭・家族 ②近所 ③友人との付き合い ④趣味仲間 ⑤地域の「居場所・サロン」
- ⑥利用している福祉施設 ⑦社会教育施設（公民館・図書館） ⑧その他（ ）
- ⑨なし

設問27. 今後、あなたが困った状態のとき、地域において、在宥生活を維持していくために必要と思われる支援・サービスについて、主なものを3つまでお答えください。

- ①見守り・声掛け（安否確認） ②移動支援 ③同行（買い物・通院等） ④配食 ⑤子育て支援
- ⑥ゴミ出し ⑦調理 ⑧定期的なふれあいサロン（居場所） ⑨掃除（取寄り）
- ⑩災害時の手助け ⑪話し相手 ⑫趣味・特技の援助 ⑬簡単な介助・介護 ⑭選択
- ⑮小動物の世話 ⑯お墓の掃除 ⑰簡単な修理 ⑱その他（ ）

設問28. あなたは、共に助け合う地域づくりに向けて、どのような環境があれば活動しやすくなると思いますか。主なものを2つまでお答えください。

- ①地域が抱えている課題の情報が提供されていること ②一緒に活動する人（仲間）がいること
- ③一人ひとりが気軽に参加できる活動の機会があること
- ④団体や活動に関する情報の入手がしやすいこと ⑤長期休暇や労働時間の短縮で余裕が増えること
- ⑥ボランティア体眼など、公共的な活動に参加しやすい仕組みがあること
- ⑦退職等により、時間的なゆとりがでること
- ⑧公共的な活動を積極的に評価し、支援する仕組みがあること
- ⑨どんな環境でも活動したいと思わない ⑩その他（ ）

設問29. あなたの地域には、「地域ぐるみで見守り活動」をする支援体制はありますか。

- ①地域が一体となって積極的に取り組んでいる ②ある程度地域住民が取り組んでいる
- ③どこからかという消極的な取り組みである ④ほとんど活動はしていない ⑤わからない

設問30. あなたが、今の地域で暮らし続けるために必要と思われることについて、主なものを3つまでお答えください。

- ①コミュニティ組織体制の確立 ②ご近所のささえあい ③身近な人の見守りと助言体制
- ④相談体制や情報提供の充実 ⑤福祉人材の養成
- ⑥NPO法人等志願団体による困りごと支援体制
- ⑦身近なところでの「居場所」の開設 ⑧企業・学校・地域社会での「福祉教育」の推進
- ⑨市町行政の地域への積極的な歩み寄り ⑩福祉団体の地域への積極的な歩み寄り
- ⑪地域団体（自治会・町内会）の積極的な福祉活動の取り組み ⑫その他（ ）

設問31. あなたが、生活上困ったときの「有償サービス」支援の利用について伺います。

- ①大いに利用したい ②説明を聞いた上で前向きに考えたい ③少し戸惑う ④利用しない
- ⑤わからない

設問32. あなたの地域において、地区住民同士がひと時を過ごす「居場所」はどのような運営（環境）であればよいと思いますか。

- ①自由にも出入りできる環境 ②ボランティアによる計画的な運営
- ③自治会・町内会等の主体的な活動としての運営 ④利用者が主体となって運営できる環境
- ⑤利用者同士で仲間づくりができる環境 ⑥福祉施設が地域貢献活動として運営する環境
- ⑦その他（ ）

設問33. あなたの「ホッと」する、安心した「地域」についてのご意見を簡易書きにご紹介ください。

ご協力ありがとうございました。

Life・Culture &amp; Welfare 地域から発信 福祉を文化へ

## 静岡福祉文化を考える会

代表 平田 厚

〒424-0841 静岡市清水区追分 3-5-17  
NPO 法人泉の会内 Tel054-367-2878 Fax: 054-367-2884

編集委員

藤下品子 古屋貴彦 河野恵介 平田 厚

## Our Life 140号

- \* 内容 \*
- 2022年度 第1回公開型研修会で、新たな参加者と足元の福祉文化を大いに語る……P.1
  - 「ホッとする豊かな地域づくりを拓く」をテーマに令和4年度本会活動スタート……P.2
  - 「福祉ってなに？461名の子どもたちに聞きました」調査報告 -その2……P.4
  - 「第2回公開型研修会開催のご案内」「事務局日誌拝見」「編集後記」……P.4

## ●「静岡発 福祉文化の創造」26年間のプロセスを探る

## 2022年度 第1回公開型研修会で、新たな参加者と、足元の福祉文化を大いに語る

27年目を迎え、2022年度本会活動計画に基づき、第1回公開型研修会を5月21日（土）静岡市清水区追分「寄ってっ亭」で開催した。

新たな参加者も加わり、今回は、20代から70代まで幅広い年代層に加えて、男女均等な参加者層は、地域社会を凝縮した環境でもあった。

開会にあたり、主催者から、お互いに気楽に語れる雰囲気をつくり、自由に話し合いが出来ることを期待する旨、参加者に呼びかけた。

「基調報告：静岡発 福祉文化の創造 27年目への挑戦 改めて、共創社会を探る」では、これまで、研修会において、毎回「福祉文化」を述べてきた。今回は、改めて、「福祉文化」をそれぞれの参加者の立場で、考えるために、「福祉文化のプロセス」を問い質した。

「福祉文化」は「造語」「合成語」から成り立ってはいるが、今日までの社会の動きの中で、受け止めていかなければならないことを確認した。

「歴史的な背景」では、1962年代 高度経済成長期 灘生活協同組合事業として、組合員のお互いの支え合いをもとに、互助活動から「福祉文化事業」が生まれていること。1981年代 国際障害者年では、「ノーマライゼーション」のもとに、「福祉は文化なり」の提唱があったこと。1987年代「介護福祉士・社会福祉士法」のあと、1989年代「日本福祉文化学会結成」は、全住民の問題としての取組「専門性と市民性の融合」「理論と実践の融合」は、本会結成につながっている。

1997年代「基礎構造改革」に「住民の積極的な参加による福祉文化の創造」が加わり、「福祉文化」が行政言葉にもなってきたこと。

「日本福祉文化学会」が大切にしていた「現場に学ぶ」「実践に学ぶ」。1995年代「第11回学会静岡現場セミナー」を開催し、1996年代「静岡福祉文化を考える会」を結成し、誰もが豊かに生きたいという思いが福祉の本命と、「静岡発（地方発）福祉文化の創造」を呼び掛けて今日にいたっていること。それぞれの地域活動の原点は何か？今をどう語るか、また、これからをどう語るかを問い質した。

研修会では、「26年間の静岡福祉文化を考える会の歩み」「2022年度静岡福祉文化を考える会の活動計画」を提示し、それぞれ、参加者の立場で「私の原点」「プロセス」「思い」の置き換えを呼び掛けた。

また「福祉文化」を、「人々が暮らし合う生活の中で考える」「人々のこれまでの暮らし（歴史的な視点）から考える」「人々の暮らし全体・暮らしそのものから考える」「人々の暮らし合う環境から考える」「人々の暮らしを担う立場から考える」以上「5つの視点」の意義を確認し合った。研修会は、前段の「アイスブレイク（自己紹介）：2022年度の私は変わります」とともに、「円卓トーク：今こそ出番、福祉文化を地域づくりの礎に」で大いに語り合った。



Life・Culture &amp; Welfare 地域から発信 福祉を文化へ

## 静岡福祉文化を考える会

代表 平田 厚

〒424-0841 静岡市清水区追分 3-5-17  
NPO 法人泉の会内 Tel054-367-2878 Fax: 054-367-2884

編集委員

藤下品子 古屋貴彦 河野恵介 平田 厚

**Our Life 141号**

- |                  |   |
|------------------|---|
| *<br>内<br>容<br>* | ➤ 2022年度 第2回公開型研修会で、小地域の協働実践事例に学ぶ…………… P.1      |
|                  | ➤ 「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査」に取り組む…………… P.2       |
|                  | ➤ 「福祉ってなに？461名の子どもたちに聞きました」調査報告 -その3-…………… P.3  |
|                  | ➤ 「第21回静岡県福祉文化研究セミナー開催のご案内」「事務局日誌拝見」「編集後記」… P.4 |

## 「ホッとする豊かな地域づくりは誰が担う？」をテーマに 第2回 公開型研修会で、小地域における地縁組織と志縁組織の実践展開を学ぶ

厳しいコロナ禍下、2022年度・27年目の本会活動は、計画に基づき、順調に、「第1回公開型研修会」(5/21)に引き続き、7月23日静岡市清水区追分「寄ってっ亭」で「第2回公開型研修会」は、「ホッとする豊かな地域づくりは誰が担う？」をテーマに11名が参加者し、和やかな議論を展開した。

今年度は、特に「若者発 ご近所福祉かるた」の有効活用状況を把握する取り組みをしていることから、「アイスブレイク」では、参加者それぞれに、「読み札」「絵札」それぞれ1組を配布し、受け取った「かるた」を手にしなが、ら、「かるた」に関わる地域の現状、自分なりの思いを紹介した。単に、「かるたとり」で終始することなく、生活や地域を振り返る、また、ご近所の時代を回想するなど、それぞれの地域で、大いに、かるたの利用方法を検討していただく場にもなった。ここから、次のプログラム「若者発 ご近所福祉かるたの有効活用に学ぶ」につなげた。デイサービスでかるたを活用された参加者から、実際の現場の状況を紹介していただいた。これまでに、本会の寄せられた「活用レポート」からは、

「さわやかクラブ通信で、毎月一例づつ紹介し、地域を考えていただく」「障害者施設で、ご近所を利用者と職員で学び合う目的で活用」「介護事業所と管内さわやかクラブ会員との交流に活用し、ご近所を見直す」「孫とのひと時に、ご近所を語りながら楽しく過ごす」「ご近所の仲間と自由な交流の場で、改めて、ご近所を語り合う」などを紹介した。2015・2021年度において、「赤い羽根共同募金助成事業」により「若者発 ご近所福祉かるた(計200セット)」を制作した。本会では、引き続き、「かるた」を配布した団体、施設、個人等に「アンケート」を実施し、「活用事例集」を作成し、コロナ明けの地域づくりに有効活用を働きかけることとしている。「円卓トーク」は、まず最初に、静岡市駿河区池田地域を中心に取り組まれている、「NPO法人 こころしさ」の「困りごと何でも支援事業」の事業の取り組みについて、実施に至る経緯事業の現状等の紹介をいただき、参加者同士の地域の課題解決のあり方について議論を深めた。

その後、今年度実施する「「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査」について、「地域共生社会調査研究部会」の設置、調査の目的と調査個票について、参加者に協力を求めた。



Life・Culture &amp; Welfare 地域から発信 福祉を文化へ

## 静岡福祉文化を考える会

代表 平田 厚

〒424-0841 静岡市清水区追分 3-5-17  
NPO 法人泉の会内 Tel054-367-2878 Fax: 054-367-2884

編集委員

藤下品子 古屋貴彦 河野恵介 平田 厚

## Our Life 142号

- \* 内容 \*
- 27年目、焼津福祉文化共創研究会との協働による調査活動 ……P.1
  - 「福祉ってなに？461名の子どもたちに聞きました調査報告その…」…P.2
  - 「協働団体「焼津福祉文化共創研究会」の取り組み紹介…」…P.3
  - 「第3回公開型研修会開催のご案内」「事務局日誌拝見」「編集後記」…P.4

## 「焼津福祉文化共創研究会」との協働による調査活動

27年目は、高齢者対象に「ホッとできる安心した地域づくりその意識と実態調査」

546枚の調査個票配布済み すでに206枚回収 300枚回収目指す

第27回目となる、今年度の調査研究活動は、「ホッとできる安心した地域づくりその意識と実態」をテーマに、県内65歳以上の皆さんを対象に、これまでの調査考察結果から、地域住民相互のつながりやささえあいが弱くなり、地域コミュニティへの関りの意識と実態が希薄化の傾向にあること、さらに、長引く厳しいコロナ禍下、尊い地域コミュニティの希薄化による「共助」「自助」が衰退傾向にある地域環境の中で、それぞれの地域で暮らす高齢者の意識と実態の現状を把握するとともに、コロナ明けに期待する地域（ご近所）のやささえあいの仕組みづくりを検証する目的に展開をしている。既に、4月以降「焼津福祉文化共創研究会」との協働事業として、本会が取り組む全県域と「焼津福祉文化共創研究会」が取り組む、焼津港地域管内（中学校校区約5000世帯）対象に、地域社会が果たすべき課題を提言することを目的に調査活動を展開している。

7月30日に「地域共生社会調査研究会」を立ち上げ、10月1日までに「第4回部会」を開催している。「調査個票」の作成作業から「調査個票」の印刷、配布作業まで、「調査実施要項」に基づき順調に進め、すでに、「調査個票」の発送（依頼）状況は下記の通りである。

No.	地区	社会福祉協議会	個人	福祉施設	福祉団体	会員
1	東部地域	2箇所20枚	6名 35枚	2箇所15枚	150枚	20名 100枚
2	中部地域	1箇所10枚	9名 50枚	2箇所10枚		
3	西部地域	6箇所60枚	11名 90枚	1箇所 5枚		
合計		9箇所90枚	26箇所175枚	5箇所30枚	150枚	61箇所 545枚

これを、県内の地域別にみると、「東部地域：11箇所・220枚」「中部地域：12箇所・70枚」「西部地域18箇所・155枚」である。回収目標を300枚としているが、9月25日現在、206枚の回答をいただいている。「調査個票」の回収を10月末とし、引き続き協力を呼び掛けている。

一方、焼津市内の地域を対象に、同様の調査活動に取り組んでいる「焼津福祉文化共創研究会」の「調査個票」の配布は、自治会・町内会をはじめ、さわやかクラブ連合会やいづ、地区民生委員児童委員協議会等に協力をお願いし、配布状況は下記のとおりである。

No.	配布依頼先	配布部数	備考
1	焼津福祉文化共創研究会会員	115枚	11名×10+5 (115枚)
2	港地区民生委員児童委員協議会	120枚	24名×5 (120枚)
3	さわやかクラブ連合会やいづ単位クラブ	156枚	管内：若調査個票才会、北寿会、長寿会
4	港第14自治会町内会長・自治会三役	85枚	17名×5 (85枚)
5	地域協力者等	50枚	
合計		526枚	

それぞれの団体には、これまで、調査の目的をはじめ、配布・回収後の事業の展開と公表時期を説明し、これからの地域づくりに活用していただくようお願いしている。「焼津福祉文化共創研究会調査個票」回収状況は、9月25日現在 128枚。引き続き、回収目標200枚に向けて努力をしている。

Life・Culture & Welfare 地域から発信 福祉を文化へ

静岡福祉文化を考える会

代表 平田 厚

〒424-0841 静岡市清水区追分 3-5-17  
NPO 法人泉の会内 Tel054-367-2878 Fax: 054-367-2884

編集委員

藤下品子 古屋貴彦 河野恵介 平田 厚

# Our Life 143号

* 内 容 *	➤ 「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査」●●●枚の回答を考察中…………… P.1
	➤ 「第3回公開型研修会開催のご案内」……………P.2
	➤ 「第21回静岡県福祉文化研究セミナー」で調査結果を基にご近所福祉を語り合う…………… P.3
	➤ 「福祉ってなに？461名の子どもたちに聞きました調査報告その⑤」……………P.4

## ●「焼津福祉文化共創研究会」との協働による調査活動回収から考察作業中 高齢者からの●●枚の意見を「これからの地域づくりへの提言」とつなぐ

「焼津福祉文化共創研究会」との協働活動として、本会が重要な活動の一つとして取り組んでいる「調査研究活動」は、結成以来、26年間「静岡発 福祉文化の創造」を目指した実践活動の大きな柱立ての一つに、その時代の地域社会を取り巻く様々な福祉課題を「調査テーマ」にした「調査研究活動」に取り組み、その分析結果を、県内各方面での研修会や本会の公開型研修会などで公表し、世代を超えた「地域総合型学習」を通じて問題提起をし、県民一人ひとりの意識改革に努めてきた。今回の調査研究事業は、これまでの成果を踏まえて、「焼津福祉文化共創研究会」が設置した「地域共生社会調査研究部会」機能を共有し、活動の目的、方向性をしっかりと確認して協議を進めている。設置趣旨は下記の通り。

### 地域共生社会調査研究部会設置要綱

#### 1. 設置目的

今日、地域コミュニティへの参画の希薄化とともに、家族機能やご近所のささえあい、制度や施策等公助ありきの意図的支援が当たり前のような社会環境になりつつある。

加えて、長引く、厳しいコロナ禍下において、ますます、地域コミュニティのつながりやご近所のささえあいも弱くなっている。こうした制約された社会環境の中で、生活している高齢者自身の現状や、地域社会の共助の実情を把握するとともに、コロナ明けの地域社会をどのように望んでいるかを管内の高齢者の立場から検証する目的で「ホッとする、安心した地域づくりその意識と実態調査」事業を実施する。

調査に関する地域社会の現状認識、計画に基づく円滑な調査の展開協議(調査個票作成、調査集計・分析、調査結果考察、調査報告書編集、調査公表検討等)の議論を深めるとともに、調査結果をもとに、高齢者の積極的な地域参加を促し社会的孤立を防ぎ、世代を超えた地域ぐるみの支え合いにより、地域共生社会づくりの在り方を探ることを目的に設置をする。

#### 2. 構成

専門性と市民性を融合した住民主体を基本に、本会会員及び本事業に関心を持つ関係者の自発的な参画による構成をもって運営する。

#### 3. 設置期間と研究会開催日

- (1) 設置期間 本事業活動期間(令和4年6月16日より令和5年3月31日まで)
- (2) 開催時期

回	開催日時・会場	研究協議内容(概要)
第1回	7月30日(土)18:30 北川原公会堂	部会の位置づけと方向性、地域の現状認識、課題整理
第2回	8月6日(土)18:30 北川原公会堂	調査実施計画協議(調査実施要項・調査個票・調査票配布)
第3回	9月3日(土)18:30 北川原公会堂	調査実施上の課題反響、調査集計作業
第4回	10月1日(土)18:30 北川原公会堂	調査回収状況、調査集計作業、協働の課題
第5回	11月5日(土)18:30 北川原公会堂	調査集計作業及び考察作業(意識と実態と提言)
第6回	12月3日(土)18:30 北川原公会堂	調査から見た意識と実態と地域づくりの課題考察①
第7回	12月17日(土)18:30 北川原公会堂	調査から見た意識と実態と地域づくりの課題考察②
第8回	1月7日(土)18:30 北川原公会堂	調査報告書ページ仕立て作業、入稿、報告研修会計画
第9回	2月4日(土)18:30 北川原公会堂	調査結果の検証、報告研修会の具体化
第10回	3月4日(土)18:30 北川原公会堂	研究会総括(成果) さわやか福祉財団への報告

すでに、「第7回調査研究部会」まで開催し、今後は、「考察」「調査報告書の作成」につなげる。

Life・Culture &amp; Welfare 地域から発信 福祉を文化へ

## 静岡福祉文化を考える会

代表 平田 厚

〒424-0841 静岡市清水区追分 3-5-17  
NPO 法人泉の会内 Tel054-367-2878 Fax: 054-367-2884

編集委員

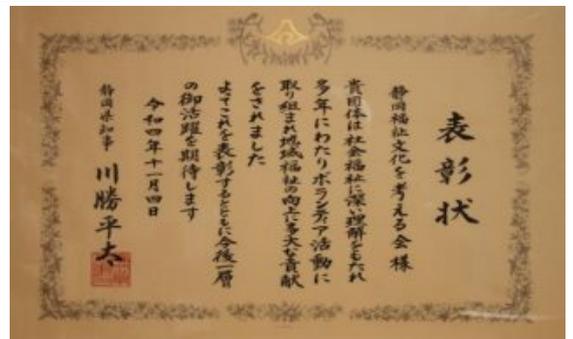
藤下品子 古屋貴彦 河野恵介 平田 厚

## Our Life 144号

- \* 内容 \*
- 地域福祉の推進に貢献 「静岡県知事素表彰」…………… P.1
  - 「公益財団法人愛恵福祉支援財団」の社会福祉育成活動助成事業決定…………… P.1
  - 「福祉ってなに？461名の子どもたちに聞きました調査報告その⑥」…………… P.2
  - 「第3回公開型研修会」開催近づく…………… P.3
  - 「事務局日誌拝見」「編集後記」…………… P.4

## 令和4年度 本会が「静岡県知事表彰」(社会福祉功労)受賞

このたび開催された「令和4年度静岡県健康福祉大会」(令和4年11月4日・グランシップ会議ホール風)において、本会は社会福祉事業に対してボランティア活動などにより、10年以上協力し、功績顕著な団体として静岡県知事表彰(社会福祉功労賞)を受賞した。主な功績内容として、評価されたのは、(1)平成8年結成以来、27年間にわたり、理論と実践の融合を基に、調査研究事業」に取り組み、「調査結果」を県内市町及び関係領域に課題提起をし、地域発展に寄与していること。(2)「静岡発福祉文化の創造」をもとに、住民主体の地域づくりの必要性を地域社会、福祉施設、障害児者、外国人、青少年団体、大学、NPO団体等との「協働」による取り組みにより、「共助の再構築」を27年間働きかけている。(3)静岡県委託事業(高齢者の孤独死防止策)「一人でも安心して暮らせる地域づくり」に、平成20年度から平成26年度まで7年間(単年度事業)取り組む中で、「福祉課題」を「見える化」「わかる化」「見せる化」の手法により、「公助」完結の問題解決から、「共助への意識改革」の働きかけに努力をしたこと。具体的には、実践的・体験的福祉文化活動として、「高齢者宅訪問型研修プログラム」(2年間で、24回延べ234名の若者の研修実績)や、「若者発 ご近所福祉かるた」の創作(200セット、拡大かるたの開発含む)「若者発 ご近所福祉かるた他利用の手引き」の制作とともに、これらを有効活用し、住民参加と、若者の地域参加の呼びかけに努めていることなどがあげられている。本会は、これまでに「第25回中日ボランティア賞」「第6回静岡市社会福祉協議会会長賞」(平成20年度)、「第5回日本福祉文化学会福祉文化実践学会賞」(平成21年度)「平成24年度静岡県社会福祉協議会会長賞」(平成24年度)「平成29年度静岡市ボランティア等善行功労表彰受賞」(平成29年度)の評価をいただいている。

●「公益財団法人愛恵福祉支援財団」の社会福祉育成活動助成事業決定  
令和4年度調査研究事業「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査報告書」印刷製本費

全国を対象に、福祉施設の運営、福祉活動に取り組む民間の団体に必要とする設備、備品類に対して助成(上限20万円)を長年取り組まれている「公益財団法人愛恵福祉支援財団」に、「令和4年度調査研究事業「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査報告書」印刷製本費(148,000円)を申請(10月5日)した結果、このたび助成決定(12月19日)をいただいた。現在、80頁仕立て200部を1月25日発行目標に、取り組んでいる。2月25日(土)「第3回公開型研修会」で調査報告書を基に、調査結果を公表する。

# 静岡福祉文化を考える会規約

## 第1章 総則

- 第1条 (名称) この会は、静岡福祉文化を考える会と称します。
- 第2条 (事務所) この会の事務所(連絡先)は「〒424-0841 静岡市清水区追分3丁目5-17 NPO法人泉の会内」に置くこととします。

## 第2章 目的・事業・活動基調

- 第3条 (目的) この会は、さまざまな福祉・ボランティア活動に携わる人と市民がいつしよに、地域が抱える生活全般のさまざまな問題を考えその改善のために努力していくことを目的とします。
- 第4条 (事業) この会は、前条の目的を達成するため、つぎの事業をおこないます。

- ① 情報交換活動
  - ② 啓発・広報活動
  - ③ 人的交流
  - ④ 研究会・講演会・セミナーなどの開催
  - ⑤ その他、この会の目的を達成するために必要な事業
- 第5条 (活動基調) この会の活動は、つぎのような基調を守っていくこととします。

- ① さまざまな分野で活動する人たちが、専門分野と世代を超えて交流を図ります。
- ② 会員だけが求心的・閉鎖的に集うのではなく、広く市民に開かれた活動をめざします。
- ③ 既存の福祉組織の活動から取り残された問題や新しく発生してきた問題を大切にし、つねに市民生活に密着した活動をめざします。

## 第3章 会員

- 第6条 (会員の資格) この会の目的に賛同し協力をする個人。  
原則として国籍・年齢・職業等を問いません。
- 第7条 (入会) 会員になろうとする人は、所定の申し込み用紙によって手続きをすることとします。
- 第8条 (会費) 会員は、規約により会費を納入しなければなりません。  
2. 既納の会費は返済しません。
- 第9条 (退会) 会員は、いつでも役員会に通告し、退会することができます。  
2. 会費を1年以上滞納した人は、委員会において退会したものとしてみなすことができます。

## 第4章 機関

- 第10条 (役員) この会の役員は、代表1名、副代表1名、事務局長1名、事務局長次長1名、委員、監事とします。
- 第11条 (役員の選任) 代表、副代表、事務局長、事務局長次長、委員、監事は、会員の中から互選し、会員全体会の承認を受けます。
- 第12条 (役員の任務) 代表は、この会を代表して会務を総括します。

2. 副代表は代表を補佐し、代表に支障が生じた場合には、の職務を代行します。
  3. 委員は、事業・研究・広報・会計・事務局事務などの会務を執行します。
- 第13条 (役員の補充) 役員が任期の途中で退任した場合には、委員会で補欠を選任することができます。

- 第14条 (会員全体会) 代表は、年1回は、会員の全体会を招集しなければなりません。
2. 代表は、委員会が必要と認めたとき、または、会員の3分の1以上の請求があったときは、会員全体会を招集しなければなりません。

- 第15条 (委員会) 代表は、年4回程度、委員会を招集しなければなりません。
- 第16条 (議決) 会員全体会の議事は、出席会員の過半数をもって決することとします。

## 第5章 会計

- 第17条 (経費) この会の経費は、会費・寄付金・その他の収入をもってあてます。
- 第18条 (会費) この会の会費は、「社会人 年間3000円」、「大学生以下年間1000円」とし、原則として1回払いとします。
- 第19条 (決算) この会の決算は、委員会の議決を経たあと、会員全体会の承認を得てこれを決定します。
- 第20条 (会計年度) この会の会計年度は毎年4月1日に始まり3月31日をもって終わるものとします。

## 第6章 規約の改正

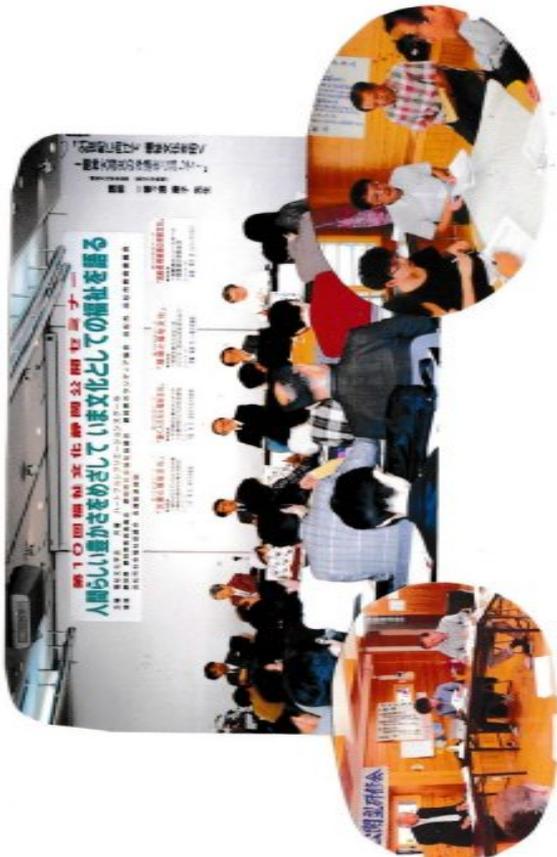
- 第21条 (規約改正) この規約の改正は、会員全体会において出席会員の3分の2以上の賛成をえなければなりません。

- 附 則 平成8年9月1日施行  
平成9年4月13日一部改正  
平成18年4月30日一部改正  
平成31年2月5日一部改正

## Life・Culture & Welfare

地域から発信 福祉を文化へ

# 静岡福祉文化を考える会



◇ 静岡福祉文化を考える会事務局 ◇

〒424-0841 静岡市清水区追分3-5-17

NP0 法人泉の会内 静岡福祉文化を考える会

☎054-367-2878 fax054-367-2884

## 「静岡福祉文化を考える会」の誕生とこれまで

福祉の改善・改革を「文化」の視点から検討する目的で、「福祉の文化化」「文化の福祉化」を掲げ、地域社会の様々な領域から、理論と実践をもとに1989年「日本福祉文化学会」が設立され、全国各地の福祉現場の実践家と福祉系を中心とする大学等の研究者の強固なネットワークにより、2019年で30年の節目を迎えた。

1996年3月、日本福祉文化学会から、「第11回日本福祉文化学会・公開現場セミナー」を静岡県内で開催してほしい旨の要請を受け、10代から70代の約40名が実行委員会を結成し、企画運営、広報等多岐にわたり、セミナーの実現に向け準備に着手した。

静岡県浜松市で開催したセミナーの第1日目は、浜松こども園を会場に「福祉施設の実践に学ぶ」と題して、先駆的実践発表が紹介された。第2日目は、プレスタワーに会場を移し「基調講演」として、学会初代会長 一番ヶ瀬康子氏が、阪神淡路大震災の政府復興委員の立場から、震災と福祉文化をもとに「21世紀にむけて 福祉文化を拓く」を熱く語られた。そして「4つの分科会」では、「災害と福祉文化」「働く人たちと福祉文化」「環境と福祉文化」「高齢者・障害者の余暇文化」に参加者が熱心に議論を深めた。

フィナーレは、「静岡で語ろう、“福祉文化”を身近な地域から、自立と共生の21世紀へ」を全国各地から参集された延べ400名が確認し合い閉会した。

この冒いセミナー実現のプロセスを「静岡発 福祉文化の創造」として形にしようとして、1996年9月、ここに「静岡福祉文化を考える会」が阪神淡路大震災1年後に誕生した。



### 目 的

本会は、さまざまな福祉・ボランティア活動に携わる人と市民がいつしよに、地域が抱える生活全般のさまざまな問題を考え、その改善のために努力する。

### 活動基調

- (1) さまざまな分野で活動する人が、専門分野と世代を超えて交流を図る。  
\* 「市民性と専門性」「理論と実践」を『融合』する努力
- (2) 会員だけが求心的・閉鎖的に集うのではなく、広く市民に拓かれた活動をする。  
\* 「公開型研修会」で市民性を高める努力
- (3) 既存の福祉組織活動から取り残された問題や新しく発生した問題を大切にし、常に市民生活に密着した活動をする。  
\* 結成以来、「調査研究活動」を重視し地域課題を掘り起し、提言する努力

● 大きな福祉文化の流れの中で、本会は「草創期」（会結成から実践活動6年間）、「協働期」（日本福祉文化学会静岡大会から6年間）、「実践融合期」（静岡県委託事業7年間）、「共創社会実現期」（現在まで）の4つの流れを歩み続け現在に至る。

## 「静岡福祉文化を考える会」のこれまでの活動を紹介します。

### ■年次別活動テーマ

1996年度：結婚とは ⇨ 1997年度：共働き ⇨ 1998年度：地域とは① ⇨ 1999年度：家族とは ⇨ 2000年度：父親とは ⇨ 2001年度：ボランティア活動とは ⇨ 2002年度：働く人の暮らし ⇨ 2003年度：青年の生きがい ⇨ 2004年度：地域とは② ⇨ 2005年度：子どもと地域環境① ⇨ 2006年度：子どもと地域環境② ⇨ 2007年度：団塊の世代 ⇨ 2008年度：長寿者の自立 ⇨ 2009年度：長寿社会 ⇨ 2010年度：生活圏域の支えあい ⇨ 2011年度：生活圏域における一人一人の居場所を考える ⇨ 2012年度：家族ってなに？ 一真の居場所を問う ⇨ 2013年度：ここが一番、ホッとする私たちの近所の居場所づくり ⇨ 2014年度：人々が豊かに暮らしたい、安心して暮らせる地域づくり ⇨ 2015年度：静岡発、福祉文化の創造による豊かに暮らせる強い活圏域の地域づくり ⇨ 2016年度：静岡発、福祉文化の創造と近所福祉 ⇨ 2017年度：集まる地域ぐるみの居場所を拓く ⇨ 2018年度：子どもを育む地域づくりとは ⇨ 2019年度：子どもを育む福祉コミュニティの再構築と地域ぐるみの支えあいの仕組み ⇨ 2020年度：つながる近所の再構築 決め手は一体何か～近所福祉の復活、「近助」とは何かを探る

◇その年度における【地域課題】を活動テーマとし、活動内容を組み立て、理論と実践の展開をもとに考察し、その都度、地域社会に課題提起を続けてきた。

### ■公開型研修会のこれまでの取組み

- (1) 合宿・現場セミナー 県内各地の社会教育施設を利用し、大学生や企業人、地域実践者等の参加のもと、「朝まで生福祉」で大いに「福祉文化論議」で盛り上がる。主なテーマは「世の中どうなってるの?」「これでもいいのか親子関係」「福祉の裏表」
- (2) 現場セミナー 「おもちゃ図書館」「障がい者の目々と介護」「地区社協とサロン活動」「介護体験から、利用者主体の施設づくりを考える」「言葉と文化/日本語を教える人々に学ぶ」等、県内各地に出向き、地域課題解決に取り組んでいる実践活動に学ぶ。
- (3) ワークショップ 年次別活動テーマをもとに、参加者主体（結成以来、外部講師を招かない）で、理論と実践をもとにまなびあひ、ワークショップにより研修を総括し、それぞれ参加者が地元で実践する展開を試みる。（年間 3回～6回開催）
- (4) 福祉文化研究セミナー 2002年（平成15年）に、「富士山麓、いのちと暮らしによりそう福祉文化の創造と推進」をテーマに「第13回日本福祉文化学会静岡大会」（裾野市・全国から650名参加）を契機に、「福祉文化の火」をいつまでも消さないようにと、今日まで「研究セミナー」として開催している。

### ■調査研究活動の取組み

本会結成以来、年次別活動テーマに基づき市民の視点で「調査内容」を組み立て、県域において実施し、草津結果を公表するとともに、課題提起をする。

### ■機関紙「OUR LIFE」の発行

A4版 4ページ仕立て 年平均5回、毎回200部発行 県内関係機関・団体等に配布啓発に努める。

### ■協働による活動

「地区社協」「福祉団体」「福祉施設」「ボランティア団体」「市町社会福祉協議会」「大学」等と協働による活動を試みてきた。



## これまでの福祉文化実践活動アルバム あれこれ



## ◇一緒に「福祉文化活動」に参加しませんか◇

○福祉・ボランティア活動に関心のある方は、ぜひご参加下さい。原則、国籍・年齢・職業等は問いません。

◇ 会費：社会人3,000円 大学生以下1,000円

◇ 郵便振り込み口座 口座番号 00880-1-111151

名義 静岡福祉文化を考える会 代表 平田 厚

入会ご希望の方は、下記の用紙にご記入の上、事務局までご連絡ください。

## 入 会 申 込 書

ふりがな			
氏名	性別（男・女）	年代（10/20/30/40/50/60/70/80）	
連絡先	Tel	fax	
	E-mail		
職業			

●入会の動機、これからの活動に望むこと等ご自由にお書き下さい。

# これからの福祉を考えるネットサイト

焼津福祉文化共創研究会

平成28年度から平成30年度まで3年間にわたり、いかに、「共創・近隣の地域を再構築することを目指すか」を目的に、在任主体の企画運営により、「焼津地域ささえあい講座」(運営14・23)研究会での「共創・焼津地域ささえあい講座」を企画しました。

この講座運営に際しては実行委員会と地域活動に協力を得て2019年(4月)に、これら3年間の活動からさらに発展していくべきか、2019年(4月)に「志願書」として「焼津福祉文化共創研究会」を設立しました。

blog profile

2020年度  
焼津福祉文化共創研究会主催  
「第2回公開型報告研修会」開催要項

昨年11月の第一回研修会に続きまして本年度二回目の研修会です。  
どなたでも参加できます。お気軽にご参加ください。

開催日時 令和2年2月26日(日) 13:00~15:30  
開催会場 港第14自治会 「石津コミュニティ防災センター」1階展示室

プログラム  
12:30~13:00 受付  
13:00~13:20 開会、アイスブレイク  
13:20~13:50 事業経過報告  
13:50~14:40 調査報告～ご近所福祉-その意識と実動調査から見たものは何か  
14:40~14:50 休憩  
14:50~15:30 “若者共 近所から見た”でものご近所を語る  
閉会  
15:30 (予定時間が変更になる場合もあります)

参加は無料ですが三宮駅止を考慮して事前の参加予約が必要です(定員にのみ参加の切ります)  
コロナウイルス感染拡大防止対策に皆様のご協力をお願いします。

参加申し込み・お問い合わせ:  
百の木デザインサービス内 焼津福祉文化共創研究会事務局  
電話 054-623-3665  
e-mail : minatosasee@gmail.com

お問い合わせメール: minatosasee@gmail.com

焼津福祉文化共創研究会  
プロフィール  
ブログ

お申し込み先: 日本福祉文化学会  
静岡福祉文化を考える会

文化としての福祉の創造  
日本福祉文化学会  
Japanese Society for the Study of Human Welfare and Culture

福祉を拓き、文化を創る。日本福祉文化学会は  
新しい共生社会の実現を目指し、実務と研究をつないでいきます

学会の紹介  
研究誌  
福祉文化実践報告  
福祉文化通信  
全国大会  
福祉文化実践学会賞  
実践セミナー  
ブロック活動・委員会活動  
出版物  
入会案内  
福祉文化リンク集  
メールマガジン  
お知らせ  
学会の年表  
福祉文化誌評  
福祉文化書評  
懇話会

●O学会バンフレットO●

【更新情報】  
2021.01.26 研究誌に福祉文化アカデミア・学会誌論文作成支援を掲載しました。  
2021.01.22 事務局に理事会議録を掲載しました。  
2021.01.13 事務局に社会報告を掲載しました。  
2021.01.09 活動報告ブログページを変更

◆日本福祉文化学会事務局◆  
〒541-0047  
大阪府大阪市中央区波島町4-4-13  
南里ビル701  
電話・FAX 06-4963-3410  
fukushibunaka@lagoon.ocn.ne.jp

QRコードから簡単にジャンプできます。知識と知恵を身に付けましょう。

港地域ささえあい講座

焼津市港地域ささえあい講座を公開して  
広く多数の市民に福祉問題を考えたい  
ます。高齢者だけでなく障がい者、子供  
たちなどのこれからの社会に必要な  
であろう福祉の基本を勉強します。そ  
して協力を多く得て市民の福祉社会を  
実現します。  
E-mail minatosasee@gmail.com

Profile Blog

2020年度 焼津福祉文化共創研究会主催  
「第2回公開型報告研修会」開催要項

昨年11月の第一回研修会に続きまして本年度二回目の研修会です。  
どなたでも参加できます。お気軽にご参加ください。

開催日時 令和2年2月26日(日) 13:00~15:30  
開催会場 港第14自治会 「石津コミュニティ防災センター」1階展示室

プログラム  
12:30~13:00 受付  
13:00~13:20 開会、アイスブレイク  
13:20~13:50 事業経過報告  
13:50~14:40 調査報告～ご近所福祉-その意識と実動調査から見たものは何か  
14:40~14:50 休憩  
14:50~15:30 “若者共 近所から見た”でものご近所を語る  
閉会  
15:30 (予定時間が変更になる場合もあります)

参加は無料ですが三宮駅止を考慮して事前の参加予約が必要です(定員にのみ参加の切ります)  
コロナウイルス感染拡大防止対策に皆様のご協力をお願いします。

参加申し込み・お問い合わせ:  
百の木デザインサービス内 焼津福祉文化共創研究会事務局  
電話 054-623-3665  
e-mail : minatosasee@gmail.com

静岡福祉文化を考える会

『静岡福祉文化を考える会』は、さまざまな福祉活動に関わる人と市民が、いっしょに、地域で生きる生活全般のさまざまな問題を考え、その改善のために協力していくことを「福祉文化」として活動しています。活動内容は主に、公開型学習会としての委員会、公開型研修会、福祉文化研究セミナー、調査研究活動、機関誌『our life』の発行などです。(平成8年9月にスタートし、現在まで活動中。)

リンク集  
港島データ2010~2013はこちら  
12345...の10件>>

2021年01月27日  
H29 沼津市地域福祉WS 2-3

プロフィール  
静岡福祉文化を考える会  
プロフィール  
ブログ

<< 2021年01月 >>  
日 月 火 水 木 金 土  
1 2  
3 4 5 6 7 8 9  
10 11 12 13 14 15 16  
17 18 19 20 21 22 23

タグ: ささえあい 静岡の福祉



**公益財団法人愛恵福祉支援財団 社会福祉育成活動助成事業  
静岡福祉文化を考える会 2022年度調査研究事業  
～高齢者とともに、共生社会を拓く～  
ホッとする、安心した地域づくりその意識と実態調査報告書**

- 発行：静岡福祉文化を考える会  
〒424-0841 静岡市清水区追分 3-5-17  
特定非営利活動法人泉の会 静岡福祉文化を考える会事務局  
TEL: 054-367-2878 FAX: 054-367-2884
- 発行日：2023（令和5）年1月18日（200部発行）
- 印刷所：有限会社シブヤ印刷工芸社  
〒425-0091 焼津市下小田 637  
TEL: 054-624-2483 FAX: 054-624-2096